
ミルクティーをもう一度

海苔巻蜥蜴

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ミルクティーをもう一度

【Nコード】

N20520

【作者名】

海苔卷蜥蜴

【あらすじ】

あの老人は嘘をついている。その横の女の笑顔には憎しみがあ
る。応じている男性は、その憎しみに怯えている。離れたところで
彼等のやりとりを見つめている少女は、精神異常者だ。

彼の両目は異質だった。目にした人の全てを瞬時に見極めてしま
うのだ。”眼”を持つ少年　シンが、ようやくのことで初めて
愛した女性は、ある秘密を隠していた。

プロローグ（前書き）

本文中に登場する人物・組織は、一部を除いて架空です。特殊能力のようなモノには一切言及していません。極めて現実に書いています。

プロローグ

静かだ……静か過ぎる。色の無い、真っ白な光の世界の中に、独り包まれているみたいだ。

青年は一人、静寂の中に居た。夏の暑さ、歓声、吹奏楽、太鼓の音……いずれも聞こえていて聞こえていない。音が……無い。この静かなる青年に、日本中の人々が注目していた。ある者はまさにその場に居る青年に、またある者はTVの画面に、別の者はラジオの実況に集中していた。

夏の高校野球選手権大会決勝戦、ここまで快進撃を見せ勝ち抜いて来た県立石滑^{イシナメ}高校は、9回裏最後の攻撃に臨んでいた。絶対的な声援を受ける公立の星は、4点あったビハインドをチーム一丸ではねのけ、今や2アウト満塁。逆転サヨナラのチャンスを迎えている。打席に立つ静かな6番打者。キャプテンでエースの大崎^{オオサキ}進は、フルカウントからの6球目を待っている。老若男女が心から祈った。

”打て！”

1 塁側内野スタンド、真直ぐに打席の青年を見つめる美女が叫んだ。

「シン、打ってえー！」

女性の覚悟を決めた叫びだった。

全国の人々が固唾を飲んで見つめる中、MAX150km/hオーダーバーを誇る左腕から、最後の一球が放たれた。

プロローグ（後書き）

かなりの長編で、特に前半は読みにくいかと存じますが、各所にある伏線が最後の最後に繋がって行きます。多少我慢して最後まで読んで頂けるなら、嬉しいです。

第1章：「タイガー・リリー」 "眼"; (前書き)

モラトリアムの高校生活を送るシン。同じ時期、日本国内では謎の組織が暗躍し始めていた。

第1章：「タイガー・リリー」 " 眼 " ;

ああー……今日は結構疲れてるな。気になる歌手見つけたから、ネットで何曲か拾おうと思ってたけど……こりゃあ無理っぽいな。

寝る　このままだと完全に寝る。あ！忘れてた！CD鞆に入れとかなきゃ。

疲労感に耐え切れずベッドに倒れ込んだ体を、無理矢理起き上がらせてMDコンポの方へ向かう。ここで思いの焦点がぶれる。そういや、そろそろ本気でiPod欲しいな。MD、個人的にはすごく気に入ってたのに。こいつらは時代に見捨てられた。うん。大量にあるMDの上、専用のラックからお目当てのCDを探す。人差し指を標にして、上から下に一度CDの列をなぞったものの見当たらない。一度見落としたんだな。折り返し、下から上になぞってすぐに見つけ出す。あったあった。これだ。里美^{サトミ}ちゃんと真智^{マチ}ちゃんからのリクエストで、貸し出すことになったのだ。あの2人は大丈夫だ。別に僕に特別な感情は無い。本当に友達として接することが出来る。茉美^{マキ}ちゃんは……要注意だ。女の子が自分のことを好いてくれる……本来なら感謝すべきことだが、あの娘には普通じゃない何かを感じる。下手に関わらない方が良い。この”眼”に従って間違ったことはない。

ヤバイ。瞼がめっちゃ重くなって来た。尋常じゃない。眠気に急かされるように、取ったばかりのCDを鞆の中に放り込み、再びベッドへ倒れ込む。布団掛けなきや　そんな考えが一瞬間をよぎったが、それからほんの数秒後には既に熟睡状態に入っていた。

携帯のアラームが起床時刻を知らせる。今日はバイトはない。いつもより多目の睡眠だ。目は開けず、音だけを頼りにアラームを止め、上半身の身をベッドから起こしてしばしまどろむ。

”ポルノのベスト持って来てね”

そうだ！ 里美ちゃんに言われてたのを思い出す。

”だったら私も貸してよ！里美の次に”

便乗した真智ちゃんにも頼まれて、すぐ快諾の返事したんだっけ。

寝癖がついた左後頭部を気にしながら、鞆を見る。ソレはもう入っている。そういえば、昨日の晩に入れておいた気もする。相当疲れてたから、記憶が曖昧だが、ここにこうして入っているのだから多分そうだ。うんうん、と勝手に一人で頷いてベッドから出て洗面所に向かう。

洗面所で思考を止め、何も考えずボーツと顔を洗って歯を磨き、部屋に戻って服を着替える。朝食は食べない。例外は野球の試合がある日だけ。父親はもう仕事に行ってるな。いつもなら僕の方が早いから、少し妙な感じもする。母親はまだ寝てるかな。考えながら、着替えを終える。

気が重い。だるい。もうすぐ夏休みが終わる。考えただけで嫌になる。歩くのを拒む足を引きずって、玄関のドアを出た。高校という名前の小屋に行き来するようになってから2年、生活のルーティーンもほぼ確立されている。別段長期休暇だからといって、それほど楽なわけでもない。バイトと野球部の練習に関しては、授業がある時よりも多いぐらいだ。ただどうしても……休みが明けるとなると良い気はしない。

水で押し付けただけの寝癖は、微妙に跡が残っている。ただ、きつちり直すのが面倒臭い。左手でそこを触りながら、まだ静かな住宅地を歩く。家から駅までは、自分の家も入っている住宅地を抜けてから信号を1つ渡る。その先の商店街を抜けると駅前通りだ。いつもより寝坊といっても、朝練があるから随分と早い時間帯だ。学生よりも都市部に向かうサラリーマンの方が圧倒的に多い。

高校生になってもこの癖は直らなかつた。得をすることなど一つもないのに、無意識の内に”眼”を使ってしまう。周りの人間の本

音を観察してしまう。現に、今隣をすれ違った夫婦……一般的にはわざわざ奥さんが見送りに来ているおしどり夫婦だが、あれは不倫だ。僕の”眼”が語っている。

死にたい。もう何も見たくない。いつそ目なんて見えない方がよい。もし生まれ変わることが叶うなら、何度も詐欺にひっかかるよくなおめでたいタイプの人が良い。幼少の頃からずっと思ってた。物心ついた時には、とっくに”眼”は備わっていた。ほとんど毎日、僕が産まれたこの世界を厭って生きて来た。死にたいと願う度、願うだけで実行する勇氣すら無い自分に反吐が出そうになった。

また世界を厭ってた。気付けばもう駅まで来ていた。いつの間に商店街を抜けたのか、覚えていない。バスの乗降口の横を通り、改札へと続くエスカレーターに乗る。何気なく見上げると、数段上に同じ年ぐらいの女子高生が確認出来た。青みがかかったグレーの短いスカート　そこから覗く白く細い美脚は、普通の男子高校生を振り向かせるには十分過ぎるだろう。このエスカレーターの角度からすれば、見たいモノを見ることは容易い。でも僕は興味が湧かない。

格好つけているわけじゃない。僕だって男だ。綺麗な人が通れば気になるし、スタイル抜群の人とすれ違えば振り向きもする。だがそれ以上に、僕の心の中では、女性への嫌悪感が絶対的に君臨している。さっきの娘がこちらを見た。大体の娘はスカートを押さえる時にはこちらを睨む娘もいる。彼女は違った。少し誘うような目。そして何事もなかったかのように前に向き直る。なるほど……一流とまではいかないが、相当のレベルの媚びるテクニクを持っているらしい。きつとその目付きで媚び入り、期間限定ブランド（制服から見える脚）を駆使して、あの娘自身の愛されたい願望を叶えて来たのだろう。

改札で定期券を通し、さっき登ったのと同じ量を今度は下りる。駅のホームに出ると、此処に来るまでは向きが違った太陽が見える。鬱陶しいこと極まりない。僕は晴れが嫌いだ。曇りは好きだ。もし世界がジャイナ教の教えのように光と闇に二分されるなら、僕は闇側だろうか。

列車が来た。律儀に白線の後ろに下がる自分に気づき、虚しく笑う。マニュアル人間を嫌う癖に、当の本人も寸分変わらずマニュアル人間なのだ。やがて列車車両の扉が開き、幾つか空いている席の一つを選んで腰掛ける。

物を見ることから逃げるようにして、僕は目を閉じた。新学期まであと一週間。9月になって欲しくない。

雨の夜

携帯に編集してある、最近のお気に入りの曲リスト最新20件は、丁度僕が学校に着くぐらいに再生を終える。家から高校までは少し遠いので、20曲という曲数が絶妙なんだ。音楽は小さい頃から聴いて来た。よくプロデューサー気取りのウザイ奴、なんて批評されているタイプ……僕はそれじゃないかとちょっと恐れる。一度聴いた歌手の声はすぐに分かる。次かその次のシングルでブレークしそうな曲を聴き分ける耳もある。今日、電車に乗り込んで再生した1曲目のバンドは、間違い無く次で売れる。

学校に着いてすぐに雨が降り始め、クラスの女の子達が計画していた、”夏休みにみんなでプールに行こう企画”と時を同じくして、我が野球部の屋外練習も中止が決定した。

顧問の小野^{オノ}が野球部を訪れることは滅多に無い。今や学校側とのパイプ以上でも以下でもない。実質の監督の僕が、部員達に指示を出す。部員といっても、たかだか11名だ。この県立石滑高校は、県内でトップクラスの公立の進学校であり、部活で全国大会に行くなどと励む奴はいない。まあ、数学オリンピックの準優勝者とか、クイズ大会の本選出場者とか、そういった類の奴らならごろごろ居る。適度に汗を流し、健全な青少年教育を掲げつつも、受験が控える3年生になるとこぞって引退する。息抜きに部活を続けるのは、全校生徒の1割にも満たないマイノリティーだ。つまり、端的に言うならば、学校側はこの野球部に何の期待もしていなかった。僕達が来るまでは。

それぞれの練習メニューを、今日来ていた7人の部員に指示し、自分はシャドーピッチング用の鏡の前へと移動する。そこに到達す

るには、小さなロッカー室を横切る必要がある。ふと、1枚のDVDに目が行く。マネージャーがロッカー室に柵を作って整理してくれている資料コーナーで、そのDVDを取り出す。女の子特有の少しカクカクした手書きの文字で、“石滑高校野球部 3回戦”と書いてある。こんな高校に入って、学校の指針に逆らってまで野球をして、かといって甲子園を目指す気もない自分は……一体どこに向かいたがっているのだろうか？

一度、現代国語の教師に話したことがあった。自分は大人びるのが早くて、モラトリアムは中学時代に終わったのだ、と。するとその教師は、僕の”手抜き的好成绩”を示唆して、お前は十分に青春時代で一時停止しているよ、と笑い飛ばした。

しかし、こうやって感慨深げにDVDを手に取っているわけだし、自分の中に野球への情熱は確かにある。やはり心は迷っているらしい。右手は勝手に、DVDを再生したがって動いた。やがて画面に映った約1ヶ月前の僕達の試合は、学校中を驚愕させ、その方向性まで変えてしまった。

マウンド上上がる背番号1は、僕。今年は気まぐれ……進学校の野球部がたまたま出場しただけのこと……そういう期待を払拭し、この日の僕は躍動した。別にこれで飯を食べる気はないし、高みを目指すつもりもさらさら無い。ただ、鬱陶しくて仕方ないこの日常が……偏差値という尺度でしか物事を量ろうとしない社会が……テスタの点数で対応をコロコロ変える教師どもが腹立たしく思え、うさ晴らしでもするかのように投げている。いや、今思えば憂さ晴らしそのものだったのだ。投げ込むストレートは常時140km/h前後で、決め球の横のスライダーと、ときどき投げる五分五分で良く落ちるフォークがあれば充分だった。そりゃそうさ……これでも小学生の時、県大会優勝の飯沼リトル相手に3安打完封をした

経歴を持つ投手なんだ。本気を出せばこれぐらいの学校に負ける恐れはない。1回表の三者三振に相手ベンチがどよめいてすぐ、裏の攻撃で次は球場のまばらな観衆がざわめく。2アウト2塁から打った4番打者の打球が、フェンスを軽々と超えたのだ。僕の唯一の親友……そして女房役の一打だった。

まあ、あいつは今日は店の手伝いでいない。あ！あいつのことを思い出して、我に返った。まったく……何やってんだろ。またこの映像を見て、自分の選択が間違っていないかを感じている。これでかれこれ10回は数える。特にここところははずつとだ。練習に戻ろう……DVDを取り出してケースに納め、大きな鏡の前の自分と対峙する。

………お前は今………どうしたい？………なあ、答えてくれよ！

フォームを確認しながら振るわれるタオル。その空気を切る渴いた音だけが虚しく響く。今日が晴れていて、もしみんなと一緒にプールに行っていたとしても、きつと僕はこんな感じになつたに違いない。雨の体育館で、ひたすら迷いの汗が流れて行く。

練習は午前中で終了。昼から空いた時間、夏服のセールでも見に行こうかと思いつく。もうとつづくに8月に入ってるし、ケタが5ケタの品物も、今や破格の値段だ。来年の夏用に、薄手の半袖レイヤードも欲しいと思ってた。

携帯電話をスライドさせ、アドレス帳からこの急なデートのお相手を物色する。一周、そしてまた一周と繰り返し、予想通りの疎外感に苛まれる。本当の意味で誘いたい人がいない。昔からよく、世渡り上手とか八方美人とか、横文字版ではフレンドリーとかフランクだとか言われて来た。確かにアドレスの登録件数は、同世代の平均を上回るなど言うに及びもしない。でもそこじゃない。……そこじゃないんだ。携帯をたたみ、一度脳裏に浮かんだ計画を取りやめる。そういや、今晚はお気に入りのチームの試合の中継があった。それまで寝てよう。別に疲れてないけど、こないだ借りた洋楽

聞いている内に、そのうち眠くなるだろう。

リモコンのボタンを指の感覚だけで押すと、最近気になっているUKロックが流れ出す。2曲目の曲は、リズムの速さに反比例し、なかなか深い内容を歌っている。無意識でなされていた日本語訳は、5曲目の間奏辺りで途絶えた。

中継の間に映った2人組の左の娘は綺麗だった。そんなどうでも良いようなことを思い出しては寝返りをうつ。雨音のコンサートはそろそろフィナーレなのか……やや強さに欠けてきた。眠れない。なんとなく、さっき観てた試合を振り返る。

”放送席、今日のヒーロー……選手です！見事なホームランでした！”

”ありがとうございます！次につながるごと必死に打ちました。”

よく言えたもんだ。大体ペナントレースも終盤、マジックが点灯しようかというチームと、かたや今年の最下位がほぼ決定的なチームの対戦……6回からロングリリーの若手投手のテストは十分合格点だった。ただ出す投手が勿体無いという理由で、9回も任せられた右腕に力は残っていなかった。まして打者は2年連続3割20HR超えをしている。疲れきった若手の威力のない直球を叩くなんて造作もない話だ。やめてくれ……こんなトコにまで偽善を持ち込んでくれるな。

沈むばかりの感情をどうにかしようと、また苦肉の策に出る。僕はベッドから這い出ると、パジャマを脱いだ。

ポチヨン……

ポチヨン……

目の前に両手を突出してみる。その腕に纏わりついてた雫たちが、刹那の世界を強く生き抜き、また音をたてて母なる海へと戻って行く。

ポチヨン……

ポチヨン……

真夜中は怖い。お化けや幽霊の類を恐れる年齢でも性格でもない。だけど、何物も飲み込んでしまえそうな静寂が呼んで来る。漆黒が、絶え間ない暗闇が、僕を手招きしているような感覚がする。そして僕は、同時にその闇の奥にひどく懐かしさを感じる。望郷の念に近い感覚……とでも言おうか。だから、真夜中の風呂は好んでよく入る。これが苦肉の策。闇に身を任せ、この静寂を味わっている間は、自分自身の沈んだ感情は何処かへ行ってくれる。

真夜中に限らず、僕が風呂を好む理由がもう一つある。それは風呂上がりに現れるもう一つの感覚ゆえだ。身も心もキレイサツパリ洗われ、どす黒く濁った憎むべきこの心が、一瞬だけ真っ白になる。そして雨上がりの空みたく、新品の心を持った僕は嬉しそうに微笑むのだ。多少は救われた。もうさっきまでの消極的な僕はいない。

着信音が響く

メールだ。他の人と異なって、この人の時だけは a i k o の曲が鳴る。百合^{ユリ}だ。時計の針はもう2時を回っている。こんな時間にメールして来るってことは……多分酔ってる。もしくは何かあった。小型の液晶画面を見やる。

”今何してんの？”

やっぱり何かあったらしい。何してんの？”話を聞いて、ということだ。メールを返信するより、電話した方が良いだろう。

「もしもし……百合？」

「あ、ごめんねシン。起こしたんじゃない？」

流石は百合。何かあった時でも、まずは僕の心配をする。

「ううん。起きてた。それより……何かあったんでしょ？」

「別に………って否定しても……シンは分かっちゃうもんね。」

この言い回しからすると、まだ少し気を遣っているな。

「いやー雨の音が耳に残っちゃってさ。ちょうど良いや。その可愛い声聞きながら、今日は夜更かしするよ。」

「もう……………ありがとう。」

恥ずかしそうに、でも嬉しそうに百合は電話越しに礼を行った。

「あのね……………」

そして百合は話し始めた。大抵は聞いてあげるだけで良い。ちょっと感情を整理してやれば、聡明なあいつのことだ。自分で解決出来てしまう。百合は少し泣いていた。鼻をすすっているから、きくと。それが雨音の残響なのか、百合の涙が印象的だったのか、夢に落ちてからも僕の脳は同じ音を刻み続けた。

花火空

「何でみんな、誕生日だからって騒ぐんだろね？」

さっきまで散々騒いでいた百合が言う。8月30日の今日、百合は24になった。雰囲気が出ないだか何だか知らないが、髪をアツプにして昨晚引つ張り出して来たドレスを着用し、僕にもちゃっかり正装を強要した。マスカット風味のスパークリングワインをほとんど一人で飲み干してしまい、ほろ酔い気分の百合は、ナチュラルメイクを問題にせず頬を染めている。

百合はとかく偏見や固定観念を嫌う。僕も同じであるからして、しばしば一つのテーマに対して二人して毒づく。さっきまで毒づいていたのは、人類が持つ誕生日への特別な思い入れについて。そもそもが古代ローマの時代に仕組まれた宗教的画策に、今や全世界の人間が踊らされていると考えるとちゃんちゃらおかしい。でも、言ってるそばから百合がこの有様なのだ。説得力も何もあつたものじゃない。

夏のケーキは小さめで良い。春のケーキは大きめで。でも、夏にはちゃんと蠟燭を立てること。百合との取り決め。春に縮まった年齢差が、また開いて元通り。24本の蠟燭を半ば無理矢理立てて、さあどうぞ、と百合を見たが反応が無い。相変わらず、キラキラした大きなおめで僕を見ている。

「なあに？」

僕は問う。普段では絶対に有り得ない甘え声で。

「あててみせよ。」

百合は答える。普段では絶対に有り得ないおどけた口調で。

「んー……どうやって?」

じれったい程にわざとらしい掛け合いはまだ続く。僕はそれを望む。

「”眼”、使ったら?」

ちよっぴり挑発するような目付きで、テーブルに肘をついた彼女が、僕の望みを阻む。

基本的に、彼女と二人ですごす時はオフ。両目に宿す力を意識的に使わないことにしている。この力、凄く疲れる。RPG風に言うなら、ラスボスに近い所で習得する魔法のMP消費量ぐらい、僕自身の精神力を大きく消耗する。だから、一番自然でいられる彼女の前では使ってない。だが今は必要である。

神経を研ぎ澄ませ、両目に意識を集中して彼女を見つめる。仕草、発汗、匂い、表情、目の動き、前後の行動……これらを総合的に観察して分析すれば、人の内奥を嗅ぎ分けることなど容易い。

柄にもなく(なんて実際に口にすれば僕の命が危ういが)、キザなことを言われてみたいらしい。百合も女の子なんだなあ。こんなに張り切っちゃって、可愛いなあ。あーそのウルウル眼は威力抜群だ。彼女が何をこそ望かは分かったが、こうしてしばらく見とれていたい気もする。

「ん? どしたの? 私には眼の力使えない?」

使えないことはないけど……どうしても見とれてしまって、力が削がれることは認めよう。

「ちよっと! 聞いている?」

少し頬を膨らませ、ご機嫌ななめの兆候を顔にする。これ以上の

ロスタイムは禁物だ。

「ねえ。今から僕のやること見てて。」

ちよつとわからない、といったところか。彼女の興味をひく切り出しは成功だ。よくわからないまま、彼女は首を縦に振ってからの次の行動を待つ。僕は、まだ残っていたデイナー（百合お手製＆今日も美味しかった）の皿を持つ。ケーキの上の蝋燭を1本、また1本と抜き取ってはそこに乗せて行く。最終的に皿の上に積み重なったのは全部で21本。

「はい、ここでクイズです。この21本はどういう意味でしょう？」

「えー何それーわからないよぉ。早く言ってよ。」

今度も頬を膨らませているが、さっきのとは種類が異なる。楽しんでくれてる。良かった。

「このお皿がね、百合の過去。僕の知らない百合の21年間。残りの3本は、僕と出会ってからの百合。この3本は………二人の思い出。」

あんまり言い続けると、照れくさくて自分が嫌になりそう。だからここでニコツと笑った。どう映ったのかはわからないけど、百合もニコってしてくれた。多分、それなりに満足はしてくれた。

「じゃあさ、このケーキは………人生って感じ？」

「うーむ………さすが。乗っかって切り返して来ようとは。」

「そうなるかな。」

でも悪くない。百合がちよつとでも喜んでくれた。ただそれだけで良い。

「じゃ、これからの蝋燭で私の人生彩ってね！」

………参りました。

「うん、約束。」

これからの二人の思い出は、一本一本の蝋燭となって行く。この時はそう信じてやまなかった。君のその結わえた髪も、直接は言えないけどそのうなじも、笑うと登場する笑窪と目じりのしわも、百合一挙手一動の全てを僕がずっと守って行くのだと。

約束。僕らは指切りはしない。おでこを軽くコツン、と4回やる。いつだったか、ドリカムの歌を聴いた君が僕らの間にも何か作りたいってせがんだもんだから、コツツンコを作ったのは覚えてる。あの歌は”アイシテル”の5回。僕らは”ヤクソク”の4回。

君の方からおでこをぶつけて”ヤ”。

今度は僕から照れながら”ク”。

嬉しそうにはにかむ君が”ソ”。

その顔を愛しみながら僕が”ク”。

続けて4回、小さな”コツン”が響いた。4回目の”コツン”が終わったその時、隣町の大花火大会が始まりを告げ、最初の花火が上がった。あまりにタイミングがよくて、あまりに前に二人で見た映画みたいで、きっと良い雰囲気になれる素敵なおハプニングなんだろうけど、おかしくて僕らは互いに笑ってしまった。

「ちよつとお！ 何で笑うのよ。ムード台無し」

って言いながらの君の笑いっぷりは、決して上品とは言えないぞ。

「ユリだって笑ってるじゃん！」

そもそも最初に笑ったのは百合だ。それぞれがひとしきり笑い終わり、百合が切り出した。

「花火、見よつか。」

「だね。」

この”くしよつか”って言う時の君の浮かれた表情が大好きだ。ほんのちよつと興奮していて、それでも顔はあまり崩さずに微笑む心から思う。可愛らしい。それがバレないように、極力平静を装った顔して僕は応じた。

二人きりの小さな縁側、うちわを扇いで眺める花火。君は”ワー”とか”キレイイ”とか言うタイプじゃないから、静かな観賞を好む僕にはピッタリなんだ。さっきまで白ワインが入っていたグラスに、二人でなみなみついでコーラをチビチビ飲みながら、二人は火花が入れ替わり立ち替わり咲き誇る夜空を見つめた。百合が自分の両膝をトントン、と叩いて僕の方を見て笑う。僕は、子猫のように彼女の両膝を枕にして甘える。

10分ぐらい経った頃、君がそつとこぼした。

「あとは、風鈴があつたら完璧だね。」

空高く目指して、新しい花火の種がまた登って行った。蚊取り線香はまだ大丈夫そうだ。夏が終わる。夏休みも終わる。8月30日のこの日僕の知らない所で、すでにもう事態は動き始めていた。

夏の祭典の喧騒を遠くに聞く小部屋の窓、夜空に鮮やかに咲く花の姿は小さく確認出来る。無駄を一切省いたシンプルな部屋から見える小さな花火は、その部屋の無機質さゆえに十二分に美しく映える。また一つ花火が上がり、人々の歓声が応える。

小部屋で唯一のテーブルに座し無精髭を生やした男性は、さも鬱陶しそうに唸った。

「あーうぜえー！ マジさばりてえええー」

「私だって早く済ませたいんですから、ちゃっちやとやって下さい。」

全く……何度、鼠ねずみさんのパートナーじゃなかったらと願ったことでしょう。」

赤く細い縁の眼鏡を掛け、お団子ヘアの堅物の女性が眉をしかめて嗜めた。

「おい、旧キョウ！ お前何度言ったらわかんだよ！ コードネームに”さん”付けるのやめろ！」

本当に不愉快なのだろう。冗談よりは数段真実味を帯びた格好で、鼠と呼ばれた男性は旧と呼ばれる女性に迫った。

「あら？ 丁寧と言って下さらないかしら？ あなたのようにならなくて行くつもりは無いの。」

男の怒りも何処吹く風である。ツンとした表情で全く譲りはしない。一度眼鏡のズレを右手で直し、淡々とした様子でそれまで左手に持っていたノートパソコンを開く。

「まったくよー！ 何年も準備して決行日は明日だぜ？ その前日って言うのにまだ逸材探しかよ……ああ……かつたりいー」

そこそこの付き合いを経て、男も女の性分を心得ていると見受けられる。それ以上食い下がることはせず、観念した様子で再び作業に戻る。左側にある束の上から一枚の紙を取り、数秒目を通した後、バツ印を書き込む。そして右側、左側の束より薄い束の一番上に綺麗に揃えて重ねる。

「確かに……稀なことですが、今回は私も鼠さんの意見に同感ですね。」

パソコンの画面に出ているエクセルのデータを、マウスを操って流し読みする旧はあまり感情を込めずにそう言った。

「だろ！？ そうだろ？ いやーやっぱな！ リーダーは何考えて

んだか…… ったくよー。しかし、お前にも話分かる時あるんだな
ー！」

こちらは感情たつぷりに返す。しごく嬉しそうである。

「今度ばかりは、私にもリーダーの意図を理解しかねますね……」
男の笑みを、知ってか知らずか完全に無視して答える。男と比べ
て仕事が無さそうな女は、今度は慣れた感じで眼鏡を拭き始めた。

漆黒の空に舞う花火は確かに美しく、明るい光で人々を照らし出す。しかしそれはほんの一瞬のこと。花火が散った後、再び闇が訪れる。そしてまたその闇を毛嫌いするか如く、人々は新たな花火へ希望を託す。託された夢は、やはり確かに一時の間闇を照らすものの、やがて今までの光達と同じ道を辿り、闇に屈して行く。諦めきれない人々は、それでもまだこの世に光を求める人々は、今度もまた新たな花火を、と夢を託す。現代における止揚^{シヨウ}　アウフヘーベンの連鎖を例えるには、夏の花火のあがる空は存外に役立つ。そのような想いでこの空を眺める者たちが、今宵確かに居るのだ。

小一時間経つただろうか。鼠の仕事も終盤戦になっていた。もはや左側の束より、右側の束の方が分厚くなっている。旧は暇をもて余し、うたた寝の一步手前で踏みとどまっている。花火大会の喧騒は消え、辺りは静けさが満ちている。

「おい！ おい！」

静けさを打ち破り、鼠が旧に大きな声で呼び掛ける。やや焦りの表情も見取れる。

「……っと、どうかしましたか？」

眠りと現実の狭間を彷徨っていた旧は、一気に現実へと引き戻された。

「こいつはヤベえ！ こんな逸材見たことがねーよ！ 旧、仕事だ！」

鼠は一枚の紙を持ち、紙を持っていない方の手の指で旧に示す。これでもか、と言わんばかりに旧の眼前へと押し出して叫ぶ。

「確かに……わかりました。ちょっと待っていて下さい。」
「事の重大さを認識し、旧がようやく舞い込んだ仕事に着手する。ノートパソコンを開き、鼠が示したままの紙を時折見やりながらキーボードで文字を打ち込む。」

「出ました。」

目当てのデータにヒットし、旧が鼠に目線を送る。目線を受けた鼠は何も語らず、ただ首の動きだけで旧を促す。

「大崎進、^{オオサキシン}17歳。五法のうち既に^{イッカタ}”眼”を所有しています。”眼”の開眼は3歳……3歳？ 早過ぎる。これは異例ね。」

冷静沈着にデータを読み上げていた旧が、驚きに少し取り乱す。

「分かったから続き！」

早く読め、と鼠が急かせる。

「ええ。5歳で”口”を体得。これも早いわ。そして特筆すべきは……12歳の時にもう”心”も持ち合わせるようになった。”耳”も”鼻”も可能性有りの診断が出てるわ。」

「半端ねえ……こんなヤツ見たことがねー……旧！ こいつはひよつとしたらひよつとするぞ！」

「ええ、そうね。この子は、初めて五法全部の習得者になるかもしれない。しかも、最も困難な”眼”と”心”の両立が完成済みだわ、鼠さん！」

「おい、早くリーダーンとこへ急ぐぞ！」

旧は”さん”を付けたが、鼠にそれを注意するほどの余裕は残されていなかった。

始まり

【我等暗黒と偽善の世に肅清をもたらす者なり。力無き者ぞ憂い惑いけれ。まいて人力持たざりき。先達あらまほしきことなり。いわば我等導かん。その者とならん。我等と共に来よ。いざ此処に成さん。現在の桃源郷を。我等こつ命名す。

タイガー・リリー】

「何ですかこの狂気じみた声明文は……」

警視庁へと向かう黒塗りのベンツの車内で、凜とした爽やかな男性が一枚の封筒の中身を見て言う。細身ながら鍛え上げられた肉体は、スーツの上からも確認出来る。

「あまり良い気はしませんね……この手の事件は長引く。」我等」と書いてあるから、組織ぐるみだ。わざわざ警察に充てて書く文章にそう書くのだから、我々警察の組織力を上回る自信もある、と言えましよう。こうなると厄介ですよ。」

分析が済んだからだろうか？　はたまた自身を落ち着かせようということなのだろうか？　男は内ポケットから取り出したフルーツガムを口に入れ、一息を吐く。代わりに、持っていた紙をたたんで入れた緋色の封筒を横に座る男性に手渡す。

「相変わらず君は煙草を吸わんな。」

その封筒を受け取った方の熟練の老刑事は、息子か孫にでも向けるかのような優しいまなざしで言う。

「私が教えていた頃からずっと……そのガムを食べておった。」
男が左手に持っているガムの包装紙を指摘する。

「ま、似合わないですが……思い入れってやつですかね……」

遠い過去を振り返るように、男は車窓から見える数年振りの日本の町並みを眺める。

「思い入れ？　過去に何かあったのか？　別れた彼女のことぐらいしか私は聞いとらんぞ。」

ややからかうようにして老刑事が探りを入れる。

「過去……そうですね。思い出です。かつての小さき戦友とのね……」

男の沈黙は、老刑事の詮索を打ち切りにさせる上で効果的だった。懐かしむように、愛しむように、男はやはり流れる風景を味わっている。

「元気でいると良いが……」

”戦友”と呼ぶその誰かに向け、男は小声で言った。右ポケットから取り出したのは、御守り代わりの壊れたポケベル。さも大事そうにそれを握りしめた男へ、次に窓から臨んだ景色は、警視庁そのものだった。

「^{サイトウ}齊藤警視、着きましたぞ。」
老刑事が、”齊藤”という男に告げ、齊藤はすぐにドアから降りた。

「^{フジヒラ}藤平さん、やめて下さいよ”警視”だなんて。前みたいに”齊藤くん”で構わないですから、ホント。」

「部下の手前もあるからな。ま、二人で話す時以外に限るよ。」

「頼みますよ……堅苦しくて叶わないんですから。」
齊藤は両手を使って堅苦しさを表現する。革靴の響く音は、やがて自動ドアの中へと吸い込まれて行ったのだった。

ああーだるい。体もだるいが気分のだるさはそれ以上だ。9月1日は始業式。そう決めた奴、ちよつと顔を貸せ。休み明けはいつもこの疲労感との戦いである。

そうそう。どの学校の校長の話もあんなに退屈なんだろうか。それとも探せば貴重な人材も居るのだろうか。願わくば校長たる者常に饒舌な語り手であつてもらいたい。今日もあれやこれやと考えながら歩を進める。いつもの癖。注意散漫なのではない。回りを行く人々の一人一人を的確に分析しているし、イヤフォンから流れるスキマスイッチの曲もすっかり味わっている。ただ、今日はいつもより質が激しい。腹に据えかねる出来事があつたせいだ。僕自身は認めたがっていないが、もう一人の僕は紛れもない事実としてそれを受け止めている。

”ちゃんと校長先生の話聞いた？”

百合からメールが来てた。全く……ちゃんと仕事してるよな。でもまあ、休み明けの僕の習性を気遣つたメールではある。上司の目を盗んで送ってくれたに違いない。

”聞いてないけど、ちゃんと良い子を演じてやったぜ(^ - ^) v”

本当は”大丈夫”って打ちそうになっただけど、この嘘を声高らかに唱えたところで、百合には効き目は無い。逆に”大丈夫じゃない”と百合に知らせると同じになってしまう。僕自身の問題だ。百合が背負う必要は無いんだから、これで良い。

携帯を閉じてエスカレーターに差し掛かる。小説や漫画の中の話って、実際に起こるから小説や漫画になるのだと僕は思う。僕の視覚は、エスカレーターの脇にいる人 重い荷物を両手に持つおばあさんを捉えた。本能か。理科的に言くと”運動”ではなく”反射”と言えよう。僕はおばあさんの方へ歩み寄っていた。

「大丈夫ですか？ 良ければお持ちしますが……」
相手が断ることの出来る選択肢は残しつつ提案する。

「ありがとう。お願いして良いのかい？」

「はい。どうぞ。」

ニツコリしながら右手を差し出す。おばあさんは一番重い荷物を遠慮深げに僕に預けた。

「若いのにしっかりとってるんだねえ。立派だねえ。」

目を細めておばあさんが語りかけてくれる。僕はそんな大それた人間ではない。

「あまり褒めないで下さい。慣れてませんから。」

これは本音だ。人の本質を見抜いた年齢があまりに幼かったため、僕はもう随分と長い間目立たないように目立たないように、と生きて来た。もし目立ってしまったら、心から毛嫌いしている人という生物の群れの中央部に行かなければならなくなる。だから、わざと褒められないような方向の選択肢を選んでここまで来たのだ。

「どの電車に乗られるんですか？」

「次に来る2番ホームの電車です。」

「なら電車が来るまでお持ちしてますね。私も同じ電車に乗りますから。」

「悪いねえ……」

エスカレーターを降り、黄色の領域が命令する場所へと移動する。おばあさんは心なしか喜んでるように見える。無理もない。こういうことが久し振りだったんだろう。ほとんどの人間は、自分さえよければ良いのだ。別にそういう人達に怒りを覚えたりもしない。だってある意味その人達の生き方は賢い。正直者が馬鹿を見る。全くその通りである。だったらわざわざ馬鹿を見る必要はない。批評家や理想家が何と言おうと、自分さえ守ってれば良いだろう。

今日も地下鉄の人込みは無表情。素知らぬ顔で歩いて行く。多少の何かが起きてても、一瞬注意を向けるものの、その後すぐまた歩き出す。何もなかったかのよう。

無口な 他人と 時に置きざり

小学生の時に聞いた曲の一節を思い出す。よくぞ歌ってくれたものだ。毎朝毎夕まさしく僕が見ている情景だ。

「電車が来るまで私が持ってますから。どうぞ座っておいて下さい。」

おばあさんはやっと安心したように一つため息をつき、ベンチに腰掛けた。

「ありがとう。本当に……ありがとう。」

電光掲示板の表示の矢印が点滅している。その矢印がまた一つ移動した。間もなく車両がやって来る。でもギリギリまで座らせておいてあげたい。まだ言わずにおこう。

「おばあさん。」

「はい。」

「でも今までよくこんな重い荷物持ってたんですね。」

どうにも腑に落ちなかった。そこそこ野球で鍛えた僕が重く感じる程なのだ……失礼だけどこ老体には無理じゃなかるうか。

「駅までは息子が持ってくれましたから。」

ならば納得も出来る。駅に入ってから数メートル、必死に抱えていたんだろう。それぐらいならなんとかなるかもしれない。もう一度目をやると、電光掲示板自体が点滅し始めていた。

「あ、そろそろ来ますよ。立ちましよう。」

「はい。ヨイシヨ……」

腰を起こすにも一踏ん張り。おばあさんはやっとこさ立ち上がり、僕の方を見て言った。

「向こうには迎えが来てますねや。ありがとう助かりました。もう十分……」

気を遣ってくれているおばあさんの気持ちは有り難いが、僕は途中で遮って最低限のアフターサービスを申し出た。

「なら、せめて座席まで持って行かせて下さい。」

僕がそう言っただけで微笑みかけたのとはほぼ同じ時、地下鉄の車両が生温い風と共にやって来た。

近づく車両……シンの少し後ろに、緋色のシャツを着込んだ2人組がいた。決して言葉を発さずに、目線と何かのサインのような手の動きを使って意志疎通を図っている。シンとおばあさんが乗り込む間合いと比べると、かなり遅れて 駆け込み乗車と説明した方が良いだろう 2人組も乗り込んだ。

「じゃあ、ここに置いておきますから。着いてからも、気をつけて下さいね。」

何度も何度も頭を下げる遠慮深いおばあさんに、そう言い残して僕は去った。今乗っているのが5両目。僕は次の駅ですぐ降りる。乗換えがあるからだ。僕は車両内の移動を始めた。乗換え口は、この車両でいくと2両目の降り口付近に位置する。こうやって予め2両目まで動いておくと後々都合が良いのだ。部活で極端に疲れていない限りほぼ毎日こうしている。

ただ移動するだけなのに、どうしても普通にやり過ぎせない。僕はまた”眼”のスイッチをほぼ情性で入れて、通り過ぎる車両内の興味深そうな分析材料を探す。

3両目には、ある意味尊敬するOLさんがいた。小刻みに揺れるこの車内で、手鏡を伺いながら見事にアイラインをひいて行く。もはや神業である。メイクの完成度はかなり高め。この後デートかまたは合コンか。そんなところだろう。どうか頑張って来て下さい。

2両目の、進行方向に向かって後ろ側に立っている女子高生は、もし痴漢に遭ってもその痴漢を弁護したくなるような丈のスカートだった。案の定、一人のサラリーマンが痴漢に成り下がりそうな目線を向けている。やめとけオッサン。せいぜいその左手のエロ本を楽しむぐらいにしておけ。

移動と観察を繰り返し、僕は2両目の中にあるお目当てのドアの前へと辿り着いた。ここなら次の駅に着いてすぐ、効率良く乗換え口へと行くことができる。

透明の枠内が移し出すのは、本来は微生物の楽園であるべき場所を人類がくりぬいてコンクリートで固めたトンネル。2年も眺め続ければ、非常口の位置も線路が何回カーブするかも覚えてしまう。次の右へと曲がるカーブの後少し進めば、もう次の駅だ。ポケットの定期入れを手探りで確認し、さあ行こうという態勢を整えたその瞬間だった。

ヴォフオーン！

ドゴオンー！

ドカアアアアアン……………

キイイイイツツ……

すさまじい爆音がこだまし、間髪入れず車輪の軋む音がけたたましく鳴った。只事でない雰囲気、僕は音のした方角を素早く見やっただ。僕が最初におばあさんと乗り込んだその車両は、跡形も無く吹き飛んで消えていた。とんでもない瞬間に、僕は居合わせていた。

頭文字（前書き）

種明かしを一つ。表題に、大きな手がかりを残していたりなんかします。探してみてください。

頭文字

「何かの暗号でしょうか。」
難解にも思えるその文面に、腕利きの刑事達が揃って顔をしかめる。

「よくある犯行予告とかですかねえ……推理小説とかに出て来るじゃないスか。」

この面々の中では一番の若手らしい刑事がこう発言する。フレームが黒とのストライプになっている銀縁眼鏡をかけた、今時の大学上がりといった風貌だ。

「バカヤロ！ ああいうのはな、所詮は小説なんだよ。現実には滅多にあんな奇怪な事件は起きはしねえよ。」

前述の若手刑事の指導役なんだろうか？ 少し前髪の薄い比較的円熟味のある中年の刑事が、若手刑事の右隣から注意した。

「おつしやる通りです。だが……今回の件はあながち工藤くんの言ったことは当たってるかもしれませんが。頭文字を辿って行くと、何かの犯行予告になるとか……そういう類のものでしょうか。」

斉藤は理知に満ちた目で真剣に語った。その場が静まり返った。彼が座しているのは全捜査員の前。ただ一人彼だけが座っている向きが違う。ホワイトボードを背にして語る若い警視正に、捜査員達は不信感を表していた。だが、「工藤くん」と呼ばれた若手刑事と、右隣の刑事は違った。

「さ……斉藤警視！」

拳手の後、緊張のあまり少しもって工藤刑事が発言した。眼鏡もちよっとずれている。

「ぶしつけで失礼ではありますが……どうして私の名前をご存じなのですか？」

そう……知っている筈はないのだ。斉藤は昨日までアメリカに居た身で、日本の所轄の一刑事。しかも最近配属されたばかりの若手の名前を知っているなんて到底あり得ない話だ。何人かが斉藤の答えに興味を示して回答を待っている。工藤刑事と思いは同じらしい。

「なぜ名前を……」

斉藤は少し答えを躊躇するかのような間をおいたが、思案の末工藤刑事を見据えてこう言った。

「行きの車内で全ての捜査員の情報を頭に入れて来ました。藤平警部に頼んで資料を持って来て頂いたんです。」

彼の帰国を快く思っていなかった刑事達でさえ呆気に取られた。彼の刑事としての能力と才能はもはや疑いようがなかった。彼はやや遠慮深げに続ける。

「こんな若いのがいきなり上に立って……あまり良く思われないでしょう。私もあなた達ならそうでしょうから。ですから上から物を言う気は毛頭ありません。経験も土地勘も……私より皆さまの方が格段にお持ちです。だから……どうかご助力頂きたい！」

自分たちの持っていたソレとあまりにイメージとかけ離れたその言葉は、双方のわだかまりをスツと拭い去って行く。

「みんな、彼がどういう人か分かっただろうか？ FBIでの経験もあるし、心理学の博士号も持つてる。人格は皆が今見た通りだ………指導者として文句は無いだろう？」

藤平は、やや心を開きかけた捜査員一同に語りかける。畳み掛けるタイミングを十二分に承知しており、待ちに待った台詞を述べた。斉藤は少しずつ、部屋の雰囲気が変わって行くのを感じていた。

「完璧だぜ”虎”！」

ニコリと微笑んだ緋色の二人組のうちの一人は、もう一人の方に親指を立てて”グッド”の仕草を見せた。

「お前さ、もうちょっと遅れてたらアタイが死んでたんですけど？」

予定より早くなくなかね？ さっすがフライングの”白”。「
口調は荒々しく男っぽいが、虎の相棒であるこの白は、ショート
カットの女性である。」

「まあ良いつてことよ。どうせ分かってたっしょ？」

「そりゃー、お前とアタイは結成当時からコンビ組んでっからな。
よゆうだよ、よゆう。」

喚きながら混乱する群衆の中に入り込み、二人は小言で会話を続
けている。任務を果たしたが、まだ確認作業を残しているので、二
人組はそこにしばらくとどまった。

悲鳴があちこちで響く。いや、響いているに違いない。みんな”ワー”とか”キャー”とかって叫んでいるのだろうけど、僕の耳は何も聞こえていない。ただただ呆然と立ち尽くし、今日の前で起きた信じられない出来事に呆気に取られている。みんなの動きがスロースロースヨンに見える。今打席に立てば多分ホームランだ。

「キミ、早く逃げなよ！」

さつきサラリーマンを痴漢へと貶めた超ミニスカ女子高生が、真剣な表情と声で僕の方に迫って来た。

「ほら、ほら！ 何やってんの！」

最後の瞬間、その娘は僕の左手を思いつきり引っ張った。それが引き金となり、僕の金縛りはたちまち解けた。そうだ！ 逃げなくちゃいけない！ その娘のパンツ丸見えの背中に引っ張られる格好で、僕は走り出した。アイツがいたなら、逃げることより目の前の娘の観察を優先するのかな、なんて考える。この切羽詰まった環境下でそんなことを考えだした僕は、自分の頭が動き出したことを理解して感謝した。

ゴオオオオオン！

再び轟音が奥の方から聞こえた。察するに、何かの拍子に誘発したんだろう。爆発音ではなかった。頭の回転に体がついて来始めた。

そして僕は、狂ったように走った。ただただ走った。生きるために。荷物を持ってあげたおばあさんのことばかり思い出していた。最後に見せてくれた微笑み……さっきまで確かにあの人は生きていたんだ。それなのに……

「人ってこんな簡単に死ぬのかよ！」

普段は絶対こんなことしないが、何だか無性に腹が立って、誰かが慌てて置いて行ったららしい鞆を蹴り飛ばす。誰に対して怒っているのか分からなかった。でも、ここ一年間で初めて全く嘘偽りのない言葉だった。自然に口をついて出た。打算的な自分がしよっちゅう嫌いになる。いつも相手を喜ばせる台詞を無意識のうちに選択して発言している。でも今は、久しぶりに本当に自分だ。紛れもなく、今僕は……久しぶりに僕は……大崎 進なのだ。

「ということとは愉快犯の可能性もあると？」

「ええ……この犯行予告から判断するとです。」

「……プロファイリングですか？」

「まあ……そうなりますね。でも今回の声明文なら、わざわざ私が分析しなくても皆さん分かっておられたんじゃないですか？」

齊藤と捜査員達の間で、タイガー・リリーに関しての分析が行われていた。その的確な分析と、決して人を見下さない齊藤の人格は、もはや誰もが認めるようになっていた。対等に意見を出し合い、

分析も終盤に差し掛かっていた。

「例えば……さっき頭文字なんかの暗号じゃないかと指摘した工藤くんなんかは分かっているんじゃないですか？」

斉藤の言葉は、捜査員ほぼ全員の視線を眼鏡の新人刑事へと向けさせた。工藤は多少まごついたが、憶することなく答えた。

「外れてるかもしれませんが、この声明文は古文ですよ。最初に、”初め終わりを意味せん”っていう文だけ改行されてます。これ、係り結びのこと言ってるんだと思います。」

「私もそう思った。」

斉藤の読み通り、若いこの刑事は気付いていた。彼は嬉しそうに微笑むと、引き続き意見を述べるよう工藤の方へと手を出して促す。「そのまま続けて。」

「で、係り結びの箇所を繋げると”そ”・”こ”です。続いて対応する文章の末尾を繋げると”の”・”役”です。」
堂々とした口調で先輩達の前で意見を述べるその姿に、斉藤はどこか嬉しそうに見つめている。

「ソコノヤク？」

工藤の養育係の刑事は、全く意味がわからないといった感じで彼に尋ねる。

「はい。但し、”役”は”ヤク”じゃなくて……」

「”エキ”！」

何人かの捜査員が同時に口走った。斉藤はゆっくり大きく頷いた。

「”その駅”……つまり、この捜査本部に一番近い駅ということ

です。」

「工藤、お前やるじゃないか！」

捜査員達は口々に新人を褒めた。そして続いて斉藤の指示を待った。しかし今の斉藤の目線は、素晴らしい読みを見せた工藤ではなく、その横の指導役の刑事に向けられていた。

「地図なんて調べる時間はいらぬ。山本さん、こここの所轄20年のあなたに聞くのが一番早い。ここに一番近い駅はどこですか？案内して下さい。」

丁寧に頭を下げながらの斉藤の言葉に山本は救われた。指揮官は自分の存在意義を分かってくれていたのだ。

「頭あ上げて下さい……警視にそんなに謙遜にされちゃあ……所轄の俺たちやあやりにくくしてしょうがねえ。」

台詞の最後の方……照れくさそうに言った山本の言葉は、同じ年代の刑事達を代弁するかのようなものだった。彼と同年代の捜査員2・3人がクスリと笑った。

「車で乗るより走った方が早い。斉藤さん、付いて来て下さい。」
アイボリー色の薄手のジャケットを脱ぎ置いて、山本は一番に部屋を出ようと扉の方へ駆け出す。斉藤も、そして捜査員全員も、これから滴るであろう汗を考慮して上着を脱ぎ捨てて、山本に続いて現場へ急ごうとする。その時だった。

赤い光が回転し、けたたましい警告音がこだました。

「入電！ 入電！ 地下鉄駅構内で爆弾テロが発生！ 繰り返す！
爆弾テロが発生！ 場所は……」

「あいつら予告通りやりやがった！」

捜査員達は続いてなされる”事件現場が何処か”のアナウンスを聞かずに一斉に走り出した。先頭の山本の背中に40人弱の刑事達が駆け足で付いて行く。斉藤は、自分が当初抱いた予感の的中を苦々しげに斬り捨てた。

「ちっ。この事件……やっぱり長くなりそうだ、ホント。」

シンではなく、久し振りの大崎 進として見る光景は、それはそれは酷かった。まさしく惨状だった。僕がいつも通りに降りる予定だった駅のホームは、負傷者と悲鳴で溢れている。怪我人が意外と多い。僕もちよつと腕を切っている。爆風で飛び散ったガラスの破片が、大勢の人間を傷付けていた。僕なんかはかなり軽傷に類するだろう。

その場の状況を見ているうちに、僕は違和感を覚え始めた。困惑の表情の人だかりの中に、ある2人の人物が紫色で区切られているように見えた。これは僕にとってはよく経験することだ。

「その二人、待つて下さい！」

”眼”は語る。さっきの爆発と、この二人は関係がある。しかし未だに混乱状態の人の群れの中へ、緋色の服を着た二人はすぐに紛れて消えてしまった。僕が呼び掛けた直後にだ。

「ふふふつ。」

すぐ背後で、小さな笑い声が聞こえる。少し僕を馬鹿にしたような笑い方だ。

「そういうのは警察の仕事でしょ？ 刑事気取り？」

聞き慣れた声、絶妙なバランスのポンパドール、最近よく見るショートパンツ……………

「百合！」

それは1つ目の偶然だった。

「何なんだあいつ……なんて私達だけすぐ怪しんだよ。」

「この世の中、あーゆう奴はたまに居るもんっしょ。」

駅から抜け出し、任務を完全に達成した後の2人は会話を重ねる。やや汗ばみ体温が上がった結果、2人の緋色のシャツはむき出しになっている。

「1つわかんねーのは……」

「ああ……」

一方は他方と同じことを考えていたのだろう。そういう含みのある相槌だ。

「なんであいつがあそこに居たのかってことだな。」

邂逅

「あいつら……絶対怪しかった。犯人か、そうじゃなくても犯人側の人間だよ！」

未だに取り逃がしたことを悔やみ、僕は悪態をついた。

「うん。シンがそう見えたらなら、きっとそうだったんだろうね。」
否定はせず、肯定に難色を示しもせず、百合はまだ混乱しているらしい僕をそつと包んでみせる。優しい声で。そしてまた僕は僕を取り戻す。母なる海へと帰ったような安心感が、いつも僕を僕であらしめる。

「落ち着いた？」

全てのタイミングを見計らっていたかのように、彼女は問いを投げかける。柔らかい微笑みを添えながら。

「うん……………」

改めてさつき体験した事件の恐ろしさを思い知る。落ち着くと、その恐ろしさが余計に膨大していくのが顕著に感じられる。

「ヒドい……………これはヒドいよ。」

今はもう幾名かの救急隊員達が駆け付けており、重症の人から優先的に順を定めて治療にあたっている。それでもまだ 特に女性 は 泣いたりしている人が多い。

「そう言えば……………百合、なんでこんなところに？ 仕事じゃなかったの？」

僕は、始業式拒否症候群の僕へと充てられたあのメールが、てっきり彼女の職場からのものだと思っていた。

「あ、違うの。今日はこの新作買いに来てたの。」

”エヘッ”と言う代わりに、彼女は舌の先を少し出した。右足の

かかとを上に向けるオマケつきだ。本人は気付いていないが、たまに天然でこういうことをやる。右手に持っている。そう言えばこないだ付いて行った東京ガールズコレクションの時に、あいつは凄く欲しがってた。セシルなんたらとかっていうブランドの鞆の調達か。

「お昼からお休みしたいんですう、ってちょっと可愛く言ったらお休みもらったの。」

そりゃあ僕だって中年になって管理職について、受付にこんな美人の新人OLが入社したらたいがい頼みはきいてやるだろう。

「男の敵だな。」

「なに？ シンも十分女の子の敵だよ。」

本気では怒っていない。ほつぺたを若干膨らませ、怒った演技を見せる。

「茉美ちゃんでしょう……佑香ちゃんでしょう……ひとみちゃんでしょう……」

親指、人差し指、中指と順に右手の指を折り曲げて数えて行く。今年のバレンタインに、チョコの数が多かった僕を、彼女は女の子の敵だなんだと楽しそうに責めた。

「あー！ もう、わかったわかった！」

こんな時の女の子は実に面倒くさい。面倒くさい素振りを見せるとさらに機嫌を損ねるから、それもまた面倒くさい。あの二の舞はごめんだ。潔く降参のポーズを百合へと向ける。

百合がまた笑う。無罪放免の意味を込めて。あんなショッキングな事件の後、不謹慎な僕は、今一度自分の恋人はなんと美しいのだろうか、などと考えていた。

駅に居る皆も少し落ち着き始めていた。そこに悲痛な叫び声が上がった。救急隊員2名が、泣きじゃくる女性の方へすぐさま走って行く。

「あの人……あの人……」

落ち着きかけていた場の空気は、一瞬にして再び緊迫感を取り戻した。女性の恋人なのだろうか？ まだ車両内に取り残されているというのだ。僕も百合と思わず目を合わせた。そしてまた響く。叫び声ではない。無数の革靴の足音がこだまし、それらはどんどん近づいて来る。男は、数十名の部下を引き連れて、僕らの一番近くの階段を先頭で降りて来た。感じが良く爽やかなその刑事を目にした時、僕の両目のスイッチは自動でオンになった。

「皆さん、落ち着いて聞いて下さい。警察です。今から誘導にしたがって順番に非難して下さい。」

その男の指示に倣い、何人かの刑事が役割別に被害者達を誘導し始める。男のやや右斜め後ろにいた若い刑事が、さっきの女性に気付けて救急隊員に話を聞きに向かう。そしてすぐに男を大声で呼ぶ。

「斉藤警視！」

手を大きく振って、優先すべきは此処だと言わんばかりに呼ばれる。それを見た斎藤警視はすぐに女性の側に向かう。

「この方のご主人がまだ中に……」

若い刑事が説明を言い終わるか言い終わらないか微妙なタイミングで、斉藤警視はもう飛び出していった。その疾走は、少し前に動き始めていた救急隊員達をあっさりと抜き去る。細身のスーツの格好良さをこれ以上ないぐらいに際立たせ、ヒラリと地下鉄の線路上に着地した。

タンツ！

着地の音をゼロコンマの世界に置き去りにして、斉藤さんは惨状の車両内へと駆けて行く。その真摯なまなざし。ひたむきな態度。僕の知っている斉藤さんは、やっぱり斉藤さんだった。あの人じゃなきゃ”眼”が勝手に働くなんてまず有り得ない。今見ている映像が、脳内に断片的に送り込まれて行く。まるで切り取られた空間を取り込む。SDカードを挿入されたパソコンのように。僕の脳内のメモリーは、まだ僕が小学生だった頃の一枚を引っ張り出して来た。

穏やかな夕日の下、下校中の黒と赤のランドセルが進む。

「そっかー……岸川キシカワさんは幹くんツヨシのこと好きなんだね。」

僕は小学校3年生。この頃既に大人達の闇を見抜いていた僕の”眼”は、同じ小学生のことを見透かすなんてそれはそれは容易いことだった。当時のクラスメートの岸川キシカワ 愛が、同じクラスの富永トミナガ 幹ツヨシに好意を寄せていて、この日僕は遂に尋ねたのだ。一緒に帰ろう、と放課後に岸川さんから誘われた時点で、僕はピーンときていた。洞察力・対応力・分析力・行動力……同級生達のそれらに比べて遙かに長けていた僕は、担任の先生から”副担任”という呼び名も付けられ、クラス内の色々な問題に取組むことが多かった。落ち葉が揺れる冬休み前の12月のこの日、僕は同日4件目の依頼に取組もうとしていた。

「いや……べ……別に好きとかそういうんじゃない……」

少し直球過ぎたかもしれない。彼女は顔を赤くして否定を試みた。

「良いよ。誰にも言わないからさ。」

ニッコリと笑って、僕は彼女の懸念材料を拭おうと務めた。

「ね？ 今日はそのこと相談するつもりだったんでしょ？」

「わーやっぱり進くん分かってたんだ〜」

「まあね。」

「凄いな〜 ユタンしたな〜」

「アハハ……ちなみに、油断ね。アブラって字で始まるヤツだよね

「？」

「うん。あ、あれユダンって読むんだ。」

「まだ習ってないのに、愛ちゃん凄いよ。」

「ううん……お兄ちゃんの漫画読んでたらあったから。」

「そっか。」

テンポの良い会話が一旦途切れ、不自然な沈黙が訪れる。僕はあえて促すことはしない。彼女のタイミングで、彼女が望む仕方話せるように待つ。この技術は既に体得していた。やがてためらいがちに彼女が口を開いた。

「あのね……幹くん人気あるでしょ？」

「……だねー。」

言い切らず、語尾を伸ばして柔らかみを持たせる。そして彼女を誘導する。

「だから……私なんか言っても……って思って……」

最後は消え入るような小さい声で話した。消え入りそうな彼女の気持ちとシンクロしたのだろう。

「でもさ。」

消え入らせないように、こちらはわざと強めの語気を繰り返して話を始める。

「うん。」

それに呼応して、彼女の声は少し張りを取り戻す。

「女の子に”好き”って言われて、嫌な男の子はいないと思うよ……
…っていうかいないし！」

何歳だよ。我ながら愉快だ。仮定形では彼女の不安を払拭出来ない
いと考え、締めくくりを断定形に変えた。まあ……その変更が言葉
に如実に表れているあたりが、まだ未熟なことを明らかにしてはい
るが。

「伝えてみなよ。多分……幹くんも、愛ちゃんのこと悪くは思っ
てないよ。」

以前からの態度からして、愛ちゃんが言いさえすれば結ばれるだ
ろうとふんでいた。一昨日の体育の授業の後、愛ちゃんの赤帽が無
くなった。幹くんは知らん振りで帰った。表向きは。でも僕は知っ
ていた。一旦正門から出て裏門へと回り、一生懸命赤帽を探した彼
を。

「うん……」

まだためらってはいるが、彼女の表情も声も前向きになった。

「明日言ってみる！」

「うん！」

いつも通り、此処で依頼は無事に成立する筈だった。だがこの日
は予想外のこと起きた。

「えー 愛ちゃん、幹くんが好きなの？」

ドタドタ足を鳴らし、ガチャガチャとランドセルについたキーホ
ルダーを鳴らして現れたのは、同じクラスの小川^{オガワ} 美恵^{ミエ}だった。ま
ったく何処からどうやって出現したのか、この小姑のような性分の
同級生もまた、幹くんに好意を寄せていた人物でもあった。しかも
愛ちゃん達仲良しグループに所属している立場でもあり、ややこし
いことこの上なかった。

「え？ あ……いや……」

内気な愛ちゃんは、一瞬にしてあまりに過酷な選択を迫られた。彼女自身も、小川さんが幹くんを好いていることを知っていたからだ。

「もうアンタなんか知らない！」

怒りに震える小姑は、愛ちゃんの名札を制服から無理矢理引きちぎり、その裏側にあるプリクラもろとも、僕らが居た近くにある橋の上から川へと投げ捨てた。僕はこれ以上ないぐらいに両目のスイッチをフル稼働させたが、この件は当時の僕には困難過ぎた。必死に打開策を求める僕を嘲笑うかのように、名札はヒラヒラと舞って水面へ着地した。愛ちゃんのお誕生会の時、彼女自身と小川さんが見せた満面の笑顔とピースサインを僕に見せつけて。

「もう絶交だからね！」

そう吐き捨てて小川さんは走って行ってしまった。

「ああああああ……」

愛ちゃんの泣き声と心の中の慟哭が、僕を激しく責めたてた。ちよっと相談されたからって何を良い気になっていたのだろうか？ かえって一人の友達を失わせてしまっているじゃないか！ 当時の僕は、せめて名札だけでもどうにかしてやろうと意気込み、ランドセルを道の脇に放って橋の上に立ったものの、そこでピツタリと動かなくなってしまった。そう……当時の僕は泳げなかったのである。これは余談だが、あくまで当時の話だ。さて、動かしようのない”泳げないという事実”が、目の前に大きく立ち塞がった。みるみる僕らとの距離を離して行く名札を見つめる僕に、後ろから優しくそんな声が聞こえた。

「どうしたの？ お友達は泣いてるしさ……」

顔を愛ちゃんの方に向けた。そして僕の方を再び見た。見知らぬスラリとしたカッコいいお兄さんは、僕の答えを待ってくれていた。ただ、僕はあまりにも動揺しており、言葉が口から出て来なかった。目だけは、今もなおその姿をどんどん小さくしていく名札を追っていた。青年は、僕の視線をたどり、僕と同じ物を見た。

「よし。ちよつと待つてな。」

そう言っただけは、真冬の川の中へと飛び込んだ。見事な泳ぎを見せる彼と名札の距離は、見る見るうちに縮まった。やがてそれを掴み取ると、メダリストが競技直後にやるかのように高々と空に左手を突き上げた。僕はお礼を言うのも忘れてポカンとしていた。状況は痛いほど飲み込めていた。ただ、信じられなかったんだ。こんな時代にこんな人が居ることが。僕の中のあの日の撮影画像は、名札をこっちに見せつける斉藤さんの笑顔をアップにして、メモリーに保存されている。

期待と不安のざわめきが燻っている。車両……というより”車両だった残骸”の中から、また轟音が上がった。不安のゲージが一気に上がる。

「シン……刑事さん、危なくない？」

一気に少女に戻ったみたいなウルウルの中で、百合は僕に訴える。

「あの人は大丈夫だよ。」

直感。確信。僕は揺るぎなく抱いていた。きっといつもの僕なら、百合と一緒に気をもんでいたのだろう。大丈夫。だって……だって……あの人は……

ドワアアアア！

歓声と拍手が沸き起こる。一人の男性を背中に背負って、斉藤さんはあの日の物より大人びた笑顔を見せた。駅のホームへ男性を担ぎあげ、救急隊員に任せる。遅れてホームに上がった斎藤さんの足元に、さっきの女性がくずれ込んだ。指には、救出された男性と同じデザインの指輪が光っている。夫だったのか。

「ありがとうございます！ はいひゃほゆ……」

後半はこっちの推測でしかないが、おそらく”ありがとうございます”を連発していたに違いない。何度も何度も頭を下げ、泣きじやくりながらご主人さんを抱き締めた女性に、若い警視は優しく声をかけた。

「足を挟んでおられて、自力で抜け出せなかったようです。骨は折れてないようですが、是非今こちらの方に見ていただきましょう。」

「本当に……ありがとうございます！」

夫婦揃っての一礼が終わり、救急隊員2名へその後の処置が託された。

「お願いします。」

言い終えて、警視としての指示を2・3与えながら指揮をとる。指をあっちこっちに向けて身振りを使いながら話し、少ししたところで僕と目が合った。

「斉藤さん！」

「シンくん！」

二人とも同時に叫んだ。それぞれの声がピッタリと重なるのを確認し、僕の眼は活動を止めた。二つ目の偶然 実に6年振りの再会だった。

大崎 進

「……………それが、私と出会った頃のシンですよ。百合さん。」
齊藤さんは、あの頃の僕を百合に紹介した。懐かしげに微笑みながら。

現在の僕は、齊藤さんが知っている僕の原型をとどめてはいない。かたや立派すぎる男。かたや貧弱すぎる男。これがどうしてひげ目を感じずにいられようか。あの日の約束を、齊藤さんはしっかりと果たしていた。齊藤さんから見ると、僕はどう映っているのだろう。

夕焼けの下、僕は自分のユニフォームについた泥が斉藤さんのグ
レーのジャケットを汚しはしないかと気を揉んでいた。つい先程ま
で僕の右手にあった軟球は、今は斉藤さんが両手でしっかりと包み
込んでいる。この日、小学校4年生の進の最大の理解者は、別れを
告げた。

「じゃあ……」

斉藤さんがこれからどうするか、どんな言葉を言うか、何をした
って事態が変わらないことも、全て分かっていた。ただ、行って欲
しくなかった。しかしどの感情よりも勝ったのは、だだをこねても
斉藤さんの迷惑だ、という感情だった。そして絞り出すように続け
た。

「……行ってらっしゃい。」

斉藤さんは微笑みかけてくれたが、少し困ったような笑顔だった。
一つ軽く息を吐くと、彼は言った。

「……良い子だ。」

僕は最初意味がわからなかった。

「進くんは良い子だよ、ホント。」

噛み締めるように、何かを確認するように、彼は僕の目を見て言
った。

「……最後まで、思いっきり子どもになっても良いじゃないか。」
僕が一生懸命守って来た部分　それが何なのかすら分かってい
ないが　を寸分の狂い無く刺し通され、凍り付いたようになって
しまった。氷はいつまでも凍っている道理はなく、やがて溶けて罅ヒビ

まで入り始め……

「……さ……さひよふあん！」

そして、僕は子どもらしく泣きじゃくった。

「ぜったい……立派な刑事になって戻って来るね。」

いつもの優しい微笑みの中に、いつもは無い強さをたたえつつ、
斉藤さんは言った。

「僕も、この目を乗り越えてみせます。」

今となれば、小学生のガキが大見得を切っただけだと言えるが、
そのガキ本人は当時本気でそう志していたのだから救いようもない。

「……だから、あなたみたいな素敵な女の人という進くんを見て、本当に嬉しかったんですよ。」

回想に入り浸っていたため、同期間に斉藤さんが何を百合に語ったのかははっきり全部は分からない。ただ、百合は僕の幼少期の話を聞いて上機嫌になっている。話を締めくくる斉藤さんの笑顔より、話を聞き終えた百合の笑顔の方が満足感に満ちている。

「やはりそれでも……女の人が隣に居ると違和感が……」
苦笑しながらのこの台詞に、百合は真剣な表情で食いついた。

「どうしてですか!？」
少し戸惑い気味の斉藤さんを尻目に、うるうるおめめは今か今かと解答を待っている。

「いやぁ……昔からコイツはこう見えてモテましてね。」
チラッと僕の方を見て意地悪そうに歯を見せ、再び百合の方に視線を戻して言う。

「女の子には不自由しなかったんじゃないかなあ」
語尾の伸ばし具合を絶妙に操って目一杯ふざけた斉藤さんは、二流漫画なら直後にこれみよがしの口笛を吹かんばかりの様子だ。

「……もう良いでしょ。」
野放しにするわけにはいかず、斉藤さんと百合の間の空間に身を滑り込ませる。斉藤さんが次に何を言うかは大体分かっている、それを阻止しようと頑張ってみたけど、やはり叶わなかった。

「それでも……初めてですよ。」

やや頬を赤らめて斉藤さんは言う。なぜあなたが照れる？

「進くんの横に女の子が居るなんてことはね。」

「え!？」

季節はややさかのぼり、僕の大好きな百合の笑顔は、初夏のような爽やかだ。斉藤さんは、いまだに固まったままの百合に追い討ちをかける。

「進くん、良かったね。この様子だと……」

百合のフリーズがとけた。首を目一杯左右に振って”言っちゃダメ”の意思表示をしている。僕はやっぱり、これを自然に出来てしまふ百合が好きなのだ。通称”ブリツ娘”という名の生物達が、計算済みで発動する男受けの良い仕草は、百合の場合生来身に着いている。

「……………百合さんも初めてらしいよ。」

百合があまりに恥ずかしがるため、かなりのためらいを見せながらも、結局は最後まで言ってしまった。おそらく、僕が喜ぶと思っ
て言ってくれたのだと思う。

「え!？」

これは意外だ。こんなに綺麗な女の子が、男達に言いよられない道理がない。疑うわけじゃないが、コッソリ発動させた”眼”が捉えた百合には、偽りの色は見出されなかった。

お互いに何か恥ずかしくて、何が恥ずかしいのか分からなくて、赤くなって止まってしまっている。そんな二人を見て、斉藤さんはクスツと笑った。

「いやあ、良かったよ。」

「僕もまさか斉藤さんに会えるなんて……良かったです!」

何とか気を取り直して僕は言う。

「いやまあ……それもそうだが……」

斉藤さんは、不自然な間を置いて続ける。

「今日見つけたよ。」

そして交互に僕らを見つめる。

「こんな世の中にも、美しい純愛があるんだってこと。」

最後は言いながら自身で可笑しかったのだろう。くさい台詞は自分のチョイスなのに、噴き出すのをこらえながらそう言った。やはり斉藤さんは流石だ。僕の必要とする物を、僕が必要なタイミングで与えてくれる。

「警視、早く！」

浸っていた僕は、一人の駅の警備員の声で目覚める。斉藤さんは完全に話し過ぎだ。原因は僕らにもあることは否定しないが。

「ああ、今行く。」

屈託のない笑顔から、本気モードへと切り替わる彼は、輝いて見える。

「百合さんとこれ以上話せないのが残念です。」

またキザなことを。様になっているからよけい気に食わない。斉藤さんだから許せる言葉だ。

「これ、名刺です。」

”警視正”の所が光って見える（多分僕だけがそう見えている）名刺を、百合は受け取る。

「あ、どうも……」

〇したるもの名刺の受け渡しぐらい何度もあっただろうに、何もぎこちない手つきで百合はそれをつかんだ。

「進くんのご事で分からないことがあったら、いつでもお電話を。」
ニコツと短く百合に微笑んで、すぐさま踵を返して斉藤さんは行
ってしまった。しばらくは事件対応で相当忙しいんだろっな。

名刺を受け取る作業に随分と手間取ったが、百合は最終的に何と
か笑顔で斉藤さんを送り出して見せた。

「カッコいい人だね。」

「うん……」

あまり気のない返事だったのは、本当にカッコいい斉藤さんと僕
自身の比較で萎えていたからであって、斉藤さんへの嫉妬からでは
ない。

「もしかして……」

それでも百合からするとそう見えても不思議じゃない。

「……妬いてる？」

嬉しそうに僕をからかうその顔を見て、嫉妬したことにした方が
今は幸せだと感じた。

「そんなんじゃないよ〜」

と言いつつ、満更でも無いような顔を表情筋を操って形作り、嫉
妬する男を渾身の演技で表現した。

「やっぱり妬いてるじゃん！ ふふふっ……」

演技は成功した。役者の道も、将来目指す道の一つに新たに加え
ておこうか、と考えている内にエスカレーターへ。

先刻までの混乱は落ち着き始め、一般人達もポツリポツリと居る
ぐらいまでになっている。百合の脚の露出を頭に入れて、先にエス
カレーターに乗せて、僕は後から後ろ側に陣取る。今日はスカート

じゃないから取り越し苦労かもしれないが、それでもやっておくべきだろう。

少し上から見下ろす百合の一瞬の笑顔は、”分かってるね”の賛辞だと思われる。向き直った百合の後ろ姿……改めて”良い脚”だなんて思いながら見ていると、鞆が僕の顔めがけて振り下ろされる。寸前のところで鞆を受け取めて見上げると、怒りながらも苦笑いの百合がいた。

「……何見てんの？」

「……………脚。」

間髪入れずに差し迫った二度目の鞆は、避けきることは出来なかった。

水原 百合

それは、初めての経験だった。TVカメラに自分が映るなんて、考えたことすらなかった。2番出口の階段を登りきった所に、マスコミ各社が被害者の声を実録せんと陣取っていたのだ。矢継ぎ早に浴びせられる質問に百合はまごついた。各記者は、自分の質問だけに答えてもらおうと必死なのだ。自国の国益ばかり守ろうとする精神は、こういう社会の末端にも刷り込まれているのか、などと考えながらも、僕は百合に質問された4つの質問に対する答えを、それぞれ質問した記者の方を向いて冷静に答えた。

僕の対応に記者団が少々驚きを見せたその一瞬……僅かなスキを見逃さず、僕は百合の腕をやや強く掴んで包囲網をかいぐった。百合が動転しているように見えたからだ。

「大丈夫？ 人込み駄目だったっけ？」

ただ焦ったなどということではなく、何かに怯えるような雰囲気を感じられる。少し汗もかいているように見えるし、震えているのを隠すように双方の手が逆の二の腕を掴んで座り込んだ。

「うつん……………」

百合も賢い。嘘をついたって僕が見破ることぐらい分かっている。それでいてなお強情に語ろうとしないのは、僕の踏み込めない事情があるのかもしれないし、百合の中で僕はそれを語らせるだけの器に未だなっていないのかもしれない。ただ、幾秒かの沈黙には、彼女自身の葛藤が垣間見える。何かに踏切りをつけるように、百合は沈黙に別れを告げた。

「……………なんでもない！」

思いつきり無理して作った笑顔と、声を荒げる寸前と説明して良いくらいの強さは、これ以上の詮索への拒絶を意味している。僕は

それを受け入れるべきだろうし、受け入れない選択をする筈もない。彼女はしっかりした足取りで立ち上がった。

この時はまだ、彼女の苦しみを理解してはいなかった。それでも彼女が無理をしているという点だけは、なんとかしてあげたかった。

「わかったよ……」

うなずいてみせ、弱めに微笑んで”詮索中止”をアピールする。そして右手を伸ばし、僕よりほんのちよつと低い頭を撫でる。頭を撫で終えたその手は、そのまま彼女の右腰に回し、ゆっくりと二人で歩き出す。

今は何かを語る時じゃない。水原百合は、口先だけの同情に心動かす女ではない。ただただ、僕の思いを腕から伝える温もりに乗せる。それがこの場で出来る唯一の方法であり、最善の方法なのだ。

”僕は君を心配している”

”君を愛しているから”

口では言えないようなこと（意外と言えたりする時も稀にある）を、右腕にたくした僕と黙ったままの百合は、それから数分夕暮れの繁華街を歩いた。

「どうかしたかい？」

捜査指揮は完璧すぎるぐらいの元教え子だったが、藤平は、彼の曇りがちな内面に気付いていた。

「何か腑に落ちないことでも？」

「いえ……」

言いかけて止まり、判断を変えて斉藤はこう前置きした。

「捜査とは何の関係もないことなんです……」

ためらいは確かにあるが、藤平なら耳を傾けてくれるだろうと確信もしているため、語尾が弱々しくなることはなかった。

「何だ？」

案の定、藤平は喜々として斉藤の言葉を待った。藤平にとって息

子のように可愛いがったこの男が、自分に何か相談してくれる事実だけで立派な贈り物なのだ。白い髭が似合う笑顔に向けて、斉藤は切り出す。

「さっきの青年……私が話していた……覚えてますか？」

「ああ……随分と親しげに話し込んでいたな。知り合いかね？」

「ええ。昔の。ちょうど藤平さんに教えてもらってた頃ですよ。」

斉藤が引き合いに出したのは、藤平が反応したくなる少し懐かしい思い出だ。

「思えばあの時から、お前はこうなる星の下に生まれていたのかも
しれないなあ……」

立派な刑事となった斉藤を、藤平は今一度両足の爪先から髪の毛の先まで下から上に見回した。感慨深げに。

「いや、本題からそれてしまふな。で……あの青年が何か？」

「ええ。簡単に言うと、私の知っている彼とは大きく異なっていたんですよ。」

何気ない会話だ。さして緊迫する話題でもない。少し気にかかる程度の議題だが、語り手の斉藤の表情は真剣だった。

「もう何年も経っているんだろう？ 君もこんなに立派になるくらい月日は経った。その青年にも変化があつて然るべきじゃないのか？」

適当に答えたわけではないが、藤平が考えつく答えはこれが精一杯だったとみえる。

「まあ………そうですね。」

少し考え込んだ後、やや俯き加減だった顔を上げて藤平に向き直る。

「気にしすぎただけかもしれません。」

そう言って、斉藤はポケットからフルーツガムを取り出し、慣れた手つきで銀紙を外し口の中に入れた。

「ね。ねえ！ ちゃんと綺麗に映ってたかな？」
すっかり機嫌を直した百合は、さっきTVカメラに撮影された時の映りをしきりに気に掛けている。僕としては、休みまで取って買に行つた新作の鞆を振り回していることの方が気に掛かる。

「……………映ってたよ。」

素っ気無い返事をしたのは迂闊だった。

「ちょっと！ 女の子の一大事なんだからね！」

そこまで怒ることはない、というこの男側の認識が、女の子側からすると余計に腹立たしいのだろう。

「うん……………ごめん。」

「え……………いや……………別に謝らなくつたつて。」
百合は、少しきつく言い過ぎたかと思つたのか、一步下がつて僕の隣に寄り添う。横顔をまじまじと見つめているその視線が、僕の右頬に突き刺さる。

「完璧メイクじゃなくても……………その辺の女の子よりは綺麗だよ。」
実際、今だつて凄く綺麗なんだから。さっきの失態を取り戻そうつてことじゃないけど、僕は百合を褒める。

「比べ物にならないぐらいにね。」

「えへ。」

つけまつげ無しで底知れぬ目力を発揮する両目が見える。薄いピンクのチークだけ塗つてある頬骨は、笑顔の効果でより膨らみを増した。

「つて……………その辺の女の子にとっても失礼だよ！」

「別に良いじゃん。」

「うっわ〜 最低!」

右の襟足を掻きながら、口喧嘩では百合に勝てそうにないなんてことを考える。

夕焼けの色は今にも燃え尽きそう。あと十分ぐらいすれば、紫色の夕闇が訪れるだろう。斉藤さんと出会った頃は、僕も輝いていたのだろうか。今やもうその輝きは、夜の闇の中に隠れんぼしてしまっている。押し問答が一区切り付いた所で、僕が一瞬見せた寂し気な表情は、百合の徹底マークを掻い潜ることは出来なかった。

「どうしたの?」

僕は何も語らない。

「何か暗いね……」

百合は実際に言葉を紡ぎ出しはしないが、無言のうちに僕への心配を訴えている。

自分はどこへ向かっているのか。ここ数ヶ月頭を悩ませる疑問が再び浮かび上がる。美術にセンスも興味も無いが、ゴーギャンの絵画の表題には胸打たれた。

”我々はどこから来たのか そして、どこへ向かうのか”

それほどまでに、しょっちゅう考え込んでしまうほどに、意識と無意識の空間で考えさせられ続けているのだろうか。

不意に、首筋の辺りに温もりを感じる。百合が後ろから両腕で抱き付いたのだ。手の甲を僕の胸の前でクロスさせるその格好は、男尊女卑を推進するわけでは断じてないのだが、男と女の役割が逆転

しているような気がして、どこか不格好で仕方がない。

「今も昔も関係ないよ。」

僕が何を悩んでいたのかお見通しのように話し掛けて、モデルさんのような小さな顔が左肩に乗っかる。右投手の右肩を選択しないのは、彼女の気遣いであることは疑いようがない。

「思いつきりやれば良いじゃない……………シンがやりたいことを……………シンのやりたいようにさ。」

答えは簡単だった。世界に絡繰りなどなかった。少なくとも百合が近くにいる限りは。

僕は、肯定の返事を口に出しはしなかったが、胸の前のクロスをそつと解いて振り返る。その時離さなかった彼女の両手首を優しく引っ張って抱き寄せて返答の代わりとする。僕の両腕と胸は、彼女の身体をいっばいに感じた。

そしてそれは何分か続いた。こんなことは今までなかった。キスをしたり、手を繋いだり、抱き合ったりはあるけれど、いずれの場面でも味わったことのない胸の高まりを感じた。強く抱き締めて離そうとしないのは、離れたくない……………離したくないからなのだ。今彼女を離すと、何もかもが駄目になる気がした。一つになりたいと思った。その時が来たのだと悟った。

約3年……………一般的には考えられないだろうが、僕らはまだ肉体関係を持っていない。女性の身体に興味が無いわけではない。欲求を抱かないのでもない。一人の女性を愛するなら、そうなるのは自然で逆に僕の場合は不自然だと親友に諭されたりもした。結局、今の今までそれらしききっかけが無かったというだけなのだろうか。

さて、僕はそれを言い出すには余りにも恋愛経験値が低かった。

偏差値は高く紙面上なら高得点なのだが、実践の応用問題となると

たちまち実力が劣化する。どういうタイプの女の子をどうやって口説くかは、眼があれば容易く識別出来る。ただ百合は特別だ。口説く口説かないの次元じゃない。一番大事で一番接し方が分からない人に”繋がりたい”の意思表示をしなければならぬのだ。

「ねー………ね。」

必要以上におどけた口調と、似合わない（もし口に出したら命はない）ぐらい可愛い子ぶった仕草が僕らの………少なくとも僕の雰囲気を変える。

「ゲームしよつか。」

そう言っただけの前の正面に立つ。両手を組んでお尻の辺りに回して、綺麗なお顔はほほ沈みかけた夕日を隠す格好でやや左側に傾いている。多分このゲームの拒否権は僕には無い。

「………何のゲーム？」

「当てっこゲーム。」

すぐに答えて、右手人差し指をピツとたてる。あまり目立たない笑窪の真横に。

「私かね、今シンが言っただけのことを当てるの。」
真上を指していた人差し指が、今度は僕の胸の方を指す。

「言っただけのこと？」

「そ。シンが私に今言っただけのこと。」

笑顔は笑顔だが、何だか無理に勇気を出しているように見える。眼のスイッチは切っているから、確証は持てないけれど。

「え………」

異議を挟もうとするが、百合は少しの時間も与えずに言う。

「……………今夜は……………帰りたくない。」

唐突だった。でも百合が選んだこの言葉は、確かに僕が言って欲しいことだった。

夜の帳の中、二人の男が会話をしている。一方が一方より優位に立っていることを除いて、何も分かることはない。

「狙いは何なの？」

「狙い？」

僅かに苛立ったような素振りを見せ、優位に立っている方の男が沈黙する。

「……共感を得ること。」

望んだ答えを得たものの、立場が劣っている方の男の口から返事は聞こえてこない。返事を催促する代わりに、男が続けて言う。

「何か気にいらんのか？俺らしくないとも言いたげだな。」

「別にそついう訳じゃ……」

「フン……」

男は、啜っていた葉巻を左手の人差し指と中指でつまみ出した。

そして、少し後ろを歩くもう一人男の足元を狙って投げ捨てた。

「俺に不満を持つのは自由だぜ。」

そして、相手を眼光鋭く睨みつけながら葉巻をこれみよがしに踏み付けた。

まさか自分がこういう建物に入る時が来るとは思わなかった。何をどうして良いのか分からないけど、自分が百合より先を歩いてフロントに行くことだけは意地でも譲れない。よく言う男のプライドなのかもしれない。

頭が真っ白で何が何だか覚えてないが、おばさんと話したことと出来れば無人でカギを手にしたかった、とそのおばさんを恨んだことは覚えている。そして今ルームキーを一つ握っている。

「……………聞いてる？」

百合の声を耳元で聞いて我を取り戻す。

「あ、ごめん。えっと……………何を？」

真面目に聞き直した僕を見て、百合は頬を膨らませて笑った。

「緊張してたね。」

「うん。僕……どうやってあのおばさんからルームキー貰った？」

「さあ……私だって初めてで緊張してたから……」

百合も初めてだ。まして女の子だ。僕以上に緊張してたって不思議じゃない。

「でも、シンが制服で私が私服だから……あのおばさんはどう思ってたんだろうね。」

確かにどう見えるのかは興味深い。そして今更になってだが、制服のままの自分に自分が驚く。

ルームキーを使って、ドアを開く。初めて入ったその部屋は、おおよそ親友から聞き及んだ通りのものだった。中央に大きなベッド。左右にガラス張りで仕切られる空間があり、左がシャワールームで右が窓。ただしやや都市部を外れたこの辺りで、大した景色は期待出来ないだろう。丸い関節照明は自己主張の激しいピンク色を全面に押し出し、部屋全体が多かれ少なかれこの色に影響されている。

「なんか……」

百合の言葉はそこで途切れたけど、なんとなく次の言葉は予想出来る。

「……落ち着かないね。」

だから、苦笑いを添えて僕が口にする。百合の代わりに。

「……うん。」

百合も苦笑いで返したが、その中に恥じらいの色が見える気がする。もつとも、こんなピンクの空間の中で、眼によって見抜いた”恥じらい色”が真実かどうかは疑問ではある。閑話休題。

人二人分ぐらいかな。微妙な距離感を保ったまま、今僕らは棒立

ち状態だ。時折目を合わせるものの、それで事が運ぶでもない。どちらも何かを待っていて、その何かが待てど暮らせど来ないことも分かっている。目標はあるけれど、助走段階が分からないのだ。こういうことは女の子側発信にさせちゃ駄目だ、という身勝手な発想に突き動かされ、僕は唐突に百合に抱き付いた。

「あ……」

百合が両足の力を抜いて、僕が彼女に覆い被さる格好で僕らはベツドに倒れ込んだ。ラッキーパンチを皮切りに、僕は顔を近付けて一度短いキスをした。百合は黙ったまま笑ってゆっくり目を閉じた。彼女の肩に手を掛けた所で、その目が急に見開いた。

「シャワー！」

素頓狂で大きな声で、百合はその一言だけ発した。その声が、やはり彼女にも全く余裕がないことを物語っている。

「あ、先にそうだね。」

負けないぐらい素頓狂な声で僕も返す。何かの映画のワンシーンを脳内参照した結果だ。

「百合………先に。」

「……うん。」

二人とも声のトーンは随分と正常化した。ぎこちなさは消えない。

先に百合。遅れて僕がシャワーを浴びて戻る頃には、お互い少し落ち着いていた。

鎖骨は見えるが胸の膨らみは見えない。百合が真っ白な布団にくるまっている光景は、どうしようもなく僕の男の部分に訴えかける。

「おかえりなさい。」

一瞬ニコツとしたその顔も、まだ湯いていない髪の出すツヤも、

傷一つない首筋も、とにかく全てが綺麗だ。今使っている”綺麗”
じゃ言い表せないぐらいに”綺麗”だ。色っぽいとか妖艶だとか、
色々な言葉を試してもしっくりこなくて、結局ありのまま素直に言
う。

「綺麗……だね。」

「ありがとう。」

足が少し震えているのが自分でも分かって、それを早く隠そうと
百合の隣に自分の体をねじ込む。そつと顔だけを左にいる百合の方
を向けると、ギョツと目を閉じて待機している。足に続いて微かに
震え出した右腕を無理繰り伸ばし、真直ぐ天井を見上げている顔を
少しこちら側へ引き寄せる。そこからキスまでは自然だ。何も悩ま
ずに済んだからだ。唇がそこにあって、僕の唇は自然とすいよせら
れて行く。柔らかくて温かい感触を2度交え、ためらいがちに出し
た舌は二人同時に重なる。回している右腕に合わせて、胸も足も半
分百合の体に覆い被さる。自分の胸の少し下辺りに、得も言われぬ
程心地良い柔らかな感触が訪れる。そして、まだ少し震える2本の
足が、震えている別の2本の足と重なった。

「ゴメン……」

一度キスを中断し、百合を見つめる。彼女も閉じていた両目を僕
に向ける。

「情けない話だけど……何か怖いっていうか、緊張してるっていう
か……」

打算も組み立ても存在しない。そんな余裕があるわけがなかった。
素直に自分の口について出た言葉に、百合も素直に返した。

「私も……震えてるの分かるでしょ？」

そう言われると、足だけでなく僕の首筋に回された彼女の両腕も

少し震えている。

「大丈夫……………大丈夫。」

百合は自分と僕に向けて、二度そう言った。それから再び僕は唇を重ねた。僕はまた百合の体を下にして覆い被さる。今の百合の言葉が作用したのかどうかは分からないが、二人とも震えはおさまっている。右手も左手も、欲しいままに彼女を味わっている。上下左右せわしなく動く両手。打って変わって、じつくりと確かめるようにじゃれあう両足。僕は初めて、この世界で百合と二人きりになった気がした。時々唇を離すけど、またすぐに激しくからみ合う。離しちゃうともつたいたい気がするのだ。この濃密な数分間が、永久に続けばいいのに。

どれほど求め合っていたのだろう。何度快感の頂点を味わっても、飽き足りることはないように思える。3度目は流石に僕もちよつと疲れが見えて来た。百合がジツと僕を見据えた。黙っているけど、僕への心配とお願いがこもっていることは簡単に分かる。

「……こういうのも良いですよ。」
少し悪戯っぽく笑った百合は、体勢を変えて僕を下にした。両手を僕の胸について彼女は何度も踊っている。

見上げる百合の顔は紅潮していて、付き合っこのかた見たことがない幸せそうな顔だった。充足感に満ち溢れるその顔を見ながら、僕はぼんやりと思索した。

百合は待っていてくれたのだろうか。

女の百合からは言い出せず、ずっと辛抱していたのだろうか。

同時に、昇天ってそんな意味もあるのか、などとムード台無しのこととも考えていた。天にも昇る気持ちはこのことなのか、と。今ならば空だって飛べる。みたいな数多くの歌詞の意味を、今ならちゃんと理解出来る。

窓硝子が映す暗黒の闇は、二人の熱気が結露を呼んで、真っ白に変わって行った。

Strike

「身元が割れました！」

男達が居並ぶ灰色の空間　タイガー・リリー対策室本部の入口から、そんな声が響いた。若手でもベテランでもない、中堅層の刑事が、昨日の爆破事件から一夜明けてようやく手にした情報を手にしている。

整然と並べられた会議用の長机の列の隙間を縫って、彼は指揮官である斉藤の前へ向かう。斉藤だけでなく、隣に座っている藤平を含めた周りの刑事ほぼ全員が、彼の次の言葉を待っている。

「福原　マツエ　67歳。虫歯の治療痕が決め手です。正直、これが無かったなら分からないままだったでしょうね。奇跡的に、あの爆発で亡くなったのは彼女一人だけです。」

言いながら、科捜警から送られて来た解剖所見のファイルを手渡す。受け取った斉藤は、注意深くそれを見ながらも、意識は判別すべき別の事象をしっかりと捉えていた。

「……………どうしました？　木嶋さん。」

事件現場となった波屋橋署の所轄刑事　入電後すぐに斉藤らを先導した大ベテランの山本　に次いでこの面々で刑事歴が長いのがこの木嶋だが、被害者の名前を聞いた瞬間の彼の表情筋の変化を、斉藤は見逃さなかったのだ。

「いや……………」

確証は無いが、何か心当たりがあるらしく、言つのを止めかけてやはり口にする。

「被害者の名前、聞き覚えがあるんですよ。20年前ぐらいに、伝説の詐欺師がいますね。」

木嶋の語り部を聞いた何人かの刑事が、そう言えば、といった具合に記憶の糸を手繰り寄せる。

「いましたね！」

「あの女の子も確か”福原”だった！」

木嶋の中で不足していた確証が埋め合わされ、彼は断言した。

「警視、おそらく間違いありませんな。マエを調べりゃ、すぐ引つかかると思います。」

斉藤は、木嶋達の言葉を聞いてすぐ、彼の左側 藤平が座っているのとは逆方向 に居るやや若い刑事に告げる。

「至急、前科者リストをあらって下さい。」

無言で頷いたその刑事は、現段階この部屋で紅一点の婦警が、ホワイトボードに”福原マツエ”と記すのを背にしながら走って行った。

婦警の手の動きに合わせて、キュツキュツと鳴る音をBGMに、斉藤は残った刑事達と会議を続行する。

「聞き込みの方は？」

「有力な情報が一つ……」

これまた若い刑事が挙手して発言する。

「爆発があつた直前、被害者……福原が乗っていた車両に、緋色の服を来た二人組が乗り込むのが目撃されています。髪もほぼ同じ長さで、顔をハッキリ見た人は居ないようなので、性別は分かりません。」

「しかし、その二人は爆発には巻込まれていないんですね。」

「ええ。同じ車両に乗り合わせていた、福原以外の乗客5名を、拳

銃で脅して隣の車両に移動させています。福原一人残し、二人組も爆発の直前に脱出したみたいですね。」

何とも不可解な行動ではあるが、辻褄が合う仮説が一つある。

「最初から、狙いは福原マツエただ一人の殺害だった……と、考えるのが妥当みたいですね。十中八九そうでしょう。」

斉藤がこう言った後に、しばらく黙っていた藤平が続いた。

「じゃあ、その緋色の二人組がタイガー・リリーで決まりだな。」

「ですね。標的以外に被害者を出させない……思想の下の犯罪……タイガー・リリーの声明文と比較しても、合点がいきます。」

ホワイトボードには、新しく”緋色の二人組”が、奇しくも緋色で書き加えられた。

ガサガサという音が、僕を眠りの世界から連れ出した。ゆっくりと目を開ける。まだそんなに明るくはないが、夜は過ぎたらしい。左横を見るが、百合の姿は無い。上半身を起こすと、ベッドの脇に佇む色気たっぷりの百合がいた。

「…………おはよ。」

何だか気恥ずかしくて、小さな声でぶっきらぼうにそう挨拶する。

「…………！？」

百合は声を出さなかったが、驚いてただでさえ丸い大きな目の面積を更に広げているので、きつと台本があるとすれば”！？”のマークが使われるであろう。

「見ないで！」

大声でそう言いながら、両方の乳房を右手で隠した。顔を真っ赤に染める特典付きだ。

今度はこちらが驚く番となった。見ないで？ 昨日、嫌という程僕はソコを見た。ソコを愛撫した。なんて考える自分に、もう一人の自分が待ったをかけた。そんな性的な考えを抱く自分と、ただただ恥ずかしそうに俯く清廉な百合を比べて、僕もやはり薄汚い男なのだと恥じた。

「ゴメン！」

「ゴメン！」

二人同時にそう言った。

「見ないから……ソレ、早く着けちゃって。」

レースの付いた可愛いデザインブラジャーを指差しながら、顔は百合の方を見ないように背を向けて、視線はベッドのシーツへと落とす。

「変……だよな。」

百合がこぼす。

「ん？」

僕はただわけが分からないまま聞き返した。まだ百合の方を見てはいない。

「昨日散々見たところを隠すなんて……意味わかんないよね。」

ホックがはまる音が、カチツと鳴った。

「女の子って、そういう生き物なのよ。」

そういう物なのか。知らなかった。僕はずっと女の子を避けて来た。だから知る由もなかったんだ。

嫌っているから、女の子を避けていたんじゃない。僕自身が怖いのだ。僕が僕自身を。男の身勝手な欲求で、女の子を汚してしまうことが恐ろしかった。誰かが好意を寄せてくれる度、その子との未来に明るい色は見出せなかった。

もし誰かの告白にOKしたとしよう。思春期の僕は当然やりたくなる。そこに愛など微塵も無い。ただの欲望。だが、相手の女の子はそれを愛情と受け取るだろう。

限らないもの。それは欲望

昔そんな歌を聞いた。そう……欲望は遂げられると、次の新たな欲望を生み出して消えて行く。そうして生まれた欲望パート2は、親の欲望パート1の時代に抱いた女の子を抱いても遂げられない。これを分かっていた。

だからいつそ拒絶した。最初から僕になんか好意を抱かないで済むように、身近な女の子達を遠ざける用のバリケードを築いた。

しかし中には、大崎城に籠城戦を決め込むこちらの思惑をも超越する、手強い女の子も居た。その子は、告白と同時に自分の体を差し出した。

” お好きにどうぞ ”

そんな甘美な響きのある申し出がなされたのだ。どうぞ都合の良い女扱いをして下さい、という訳だ。だが、僕は甘美なのは香りだけで、その本質は毒液であることを悟っている。そこに辿り着く年齢が、僕の場合は早過ぎたのだろう。

僕は悲しくなった。何故この子はここまでするのだろう。何故わざわざ傷付きたがるのだろう。そうまでして手に入れたい男が、何故この僕なのだろう。

僕はその子に懸命に諭したが、聞き入れて貰えはしなかった。それどころか、自分の欲求通りにすら動けない意気地無しだ、と僕のことを罵った。

僕自身が傷付く分にはいっこうに構わない。ただ、僕のせいで傷付く人を見てはいられない。まして、傷付くと分かっている次の段階に踏み込もうとするなんてことは論外だ。

そんなこんなを思い巡らしていて、3年という期間の意味が僕は今になってやっと分かったのだ。

「もういいよ。」

下着姿の百合が、両手で僕を頭ごと向き直らせた。僕より早く起きて、シャワーを浴びていたんだろう。近付いた顔から、なんとも清らかな香りがする。

そして、その香り一つで、僕は安堵した。良かった。本当に良かった、と。百合は汚れていなかった。怖かった。百合が汚れること。

「怖かったんでしょ？」

「え……」

”眼”を持っていない百合に、まるで”眼”を使ったかのように、自分の心境をピタリと言い当てられて僕は狼狽する。僕が”眼”を使うとき、使われる相手はこんなに気味が悪いのだろうか。

「普通、シンぐらいの時って……」

そう言ってから少し感覚が空く。百合の僅かなためらいの表れだ。

「……女の子とやりたくて仕方がないよね？」

「だね。」

ノーと言う理由もない。そうだ。この僕だってそうだった。

「相手が百合みたいなお姉さんなら、俺達思春期男子共は願ったり叶ったりだろうね。」

改めて見る百合の下着姿は、何とも形容し難い程にすさまじく色っぽかった。男子には分かる。朝特有の生理現象。とは別に、僕は下半身が反応するのを自分で感じている。

「でも、シンは無理強いはしなかった。」

僕がちよつと変な顔をしたからなのか、その後すぐ首を振って続ける。

「ううん。違うの。シンがそんな男の子じゃないってことぐらい、分かってるのよ。」

「……ああ。」

百合がそう分かってしてくれてるのも、僕はどこかで分かっていたさ。

「私を壊しちゃうみたいで怖かった……そうなんですよ？ 違う？」
部分点なんて関係無し……百合の言葉は百点満点の解答だ。

「怖かったよ……怖かった。」

噛み締めるように僕は言った。この3年間を振り返り、それらを愛おしみつつも恨むように噛み締める。

「……怖かった。」

「もうとつくに壊れてたのに、私。」

随分と落ちたトーンの声に一抹の不安を覚え、僕は百合を見た。

「シンと付き合った時点で、私もう壊れてたのに。」

心配していたような顔ではなく、百合は茶目っ気たっぷり顔だった。

「何だよそれ。」

僕は笑った。その笑顔を見て、百合は2歩歩み寄って僕の目の前に来た。

「抱いてくれてありがとう。」

百合は僕の顔を胸いっぱい抱き締める。

「……頑張ったね。」

頭頂部に冷たい物を感じ、僕は百合の胸の谷間の間から目だけを脱出させ、百合の目からつたう涙を見つける。その嬉し涙は、僕を世界一幸せな気分へ変えてくれる。

「あなたが辛いこと……私が一番わかっているのに……」

「……何カップ？」

埋もれていた柔らかな谷間から顔を完全に出し、大真面目な顔をして聞く。

「Cカップ……」

へえ……Cって十分大きいんだな……なんて昨夜のフラッシュバックと共に考えていると、軽く頭を小突かれる。

「って何を聞いとんじゃ！」

「へへへ。」

「……もっと大きい方が好き？」

頭を小突いた真相は、この台詞にありそうだ。聞いている本人は真剣だ。

「いや、大満足。美耶ちゃんぐらい大きいのが、俺はちょっと苦手なんだ。」

百合の妹 水原 美耶は、Eカップである。僕と同じクラスに
いるため、男子共の視線を常に釘付けにしていることは既知である。
百合のサイズを知らなくて、美耶ちゃんのサイズを知っているのは、
僕の同級生達もとい、熱狂的な美耶ちゃん信者達の、頼んでもいな
いの僕になされた情報提供による。

「へえー」

百合が意外そうな声を出す。

「そりゃあ絶対巨乳主義みたいな奴らも中にはいるけどさ、男は基本的に揉めりゃあ良いんだよ。揉めりゃあさ。」
「言った後に」こんな解説必要だったか？」という疑問が生じたが、とにかく僕は笑顔を作って解説を終えた。

「ふうん……」

それでも百合はやはり意外そうにしていた。

僕の通う イシナメ 県立石滑高校は、都心部から北に外れた所に位置する。冬場は雪が降ることも珍しくはない。この学区では2番目に高い偏差値69を誇る進学校で、一口に言ってしまうえば”お固い奴ら”が大半を占めている。ちなみに、学区一の偏差値75を誇る高校とはそこそこ開きがあるくせに、ここに通う生徒はプライドが無駄に高い。教師陣も然り。滑稽だ。

石滑市は、朝露が光る冬の早朝に、岩場で行なわれた戦国時代の小さな戦から名前が付けられたらしいが、真実は定かでない。大体、朝露で濡れた石に次々と足を滑らせて敗北したなんて馬鹿馬鹿しいし、それを計算に入れる軍師が居たというのも何やら怪しい。

さて、そんな”石滑”の字を堂々と使っている校門前に今僕はいる。幸せの絶頂のような心地で。

煉瓦作りの校門を越えると、すぐ目と鼻の先に正面玄関がある。だがここは体育祭や文化祭、何処かのお偉方や保護者の皆様方がお見えになる機会でない限り、閉ざされている。生徒が向かう通用口は、その正面玄関をグルリと時計回りに迂回した先にある。舗装された迂回路の両側は桜並木となっていて、春の美しさを代償にして、初夏には毛虫の大群をお迎えしている。

僕はいつも登校が早い。7時過ぎには到着し、朝練をしている。そのため並木道を歩く時は大体一人きりなのだが、人生初の”学校への朝帰り”を果たした今、並木道は生徒達でこった返している。僕にとっては見慣れない風景だ。

百合がルームサービスを頼むのは絶対に嫌だ、と譲らなかったことで、僕らは朝食をレストランで優雅に食べた。不本意ながら、百合の奢りで。ホテルの支払い時に気付いた時には、僕は財布をなくしていたからだ。

ドツドツドツドツ！

背中越しに聞こえる 次第に音量を増す、大きなストライド。紛れもなくトムだ。

「よ、シン！」

僕の背中を平手で叩くと、勢いそのままに僕の一步前が出る。クルリと振り返った少し色黒の男前は、今日も絶妙な感じに顎鬚をたくわえている。体格も良く、二重が男前なこの男が、僕が唯一校内で心を開く親友 杉原^{スギハラ} 知則^{トモノリ}だ。顎鬚を生やし、中学時代から野球で注目され、挙げ句の果てに1年の自己紹介の折には”高校には彼女を作りに来た”発言をしたことも手伝って、もはやこの石滑高校の型に合わない生徒となっている。我が野球部の4番にして、僕の女房役を務める男だ。

「今日はどうしたよ。随分おせー登校じゃん。」

トム（杉原のあだ名）の実家は中華料理屋で、こいつは朝の仕込みを手伝ってから登校するので、野球部でバッテリーを組んではいても、朝練で共に汗を流すことは無い。

さて、僕の無反応ともとれるリアクションも、トムは慣れっこのので、いちいちそれを取り上げたりはせず話しかけて来る。

「いやあ……」

正直、昨夜の喜びをこいつには言っても良いのだが、何せ切り出し方が分からないで困る。

「ん……」

トムが鋭い目を光らせる。こいつは末っ子で、平時は、能天気と自由奔放と勝手気ままを見事に体現しているやつなのだが……時折野生の勘的な何かを発揮し、やたらと鋭敏な時がある。今まさにそんな時の目だ。

「シン、お前香水の匂いがするぞ。」

お前はどこかの新妻かよ、と心の中で突っ込んだが、僕は内心ヒヤヒヤだった。トムが嗅ぎ当てたのは、間違い無く百合の香水の匂いだろうから。

「しかもこれ……たまにお前がつけてるやつじゃねーし！」

基本的に面倒だし、男がつける必要に疑念を持ってはいたが、これも嗜みなんだと納得して、僕はたまにブルガリのプールオムをつける。百合曰く、「メンズの香水は基本はコレ」らしい。

「声でけーよ。」

トムの口調につられて僕が言う。ぶっちゃけ、もう限界だった。だから、満面の笑みが自然とこぼれた。

「シン……」

察することがある。トムの顔はそんな風だ。何せ女をとっかえひっかえ抱いて来た百戦錬磨のこいつのことだ。僕の笑顔の源を探り当てることに関しては、苦労しなかったと見える。

「お前、とうとう百合さん抱きやがったな！」

さながらスクープを掴んだ新聞記者の如く、トムは僕を指差した。僕は、さながらスクープを掴まれて開き直ったアイドルの如くピースサインを作った。

「ひゃっほー」

トムは自分のことのように大喜びし、意味不明な振り付けでその場で回る。そうかと思えば、僕の顔面に自分の顔面を超接近させ、

ニヤニヤして聞いて来る。

「で、感想は？」

「やっぱり僕の大事な人だよ。百合は。」

大真面目にそう答える。これが、昨日百合と一つになって思った一番の感想だから。

「なんじゃそれ？」

トムが期待していたような答えではなかったのか、素頓狂な声を出す。

「なんかつまんねー ブーブ〜」

トムは、大きなスポーツの祭典でよく見掛けるようなブーイングまでやり始める。

「普通さあ……気持ち良いとか何発でもやりたいとかさ、今日も帰ってやりまくりますとかさあ……」

どんな解答を期待してんだこいつは。

「俺の初めての感想てのは、大体そんな感じだったぜ。」

ああ、やっぱりこいつは素直で憎めない。だからトムとは親友になれたのだ。ひねくれた僕には、トムの純粹さが心地良い。

「ま、またやりたいつてのは思ったよ。」

徐々集まり始める並木道に行く女子達の視線を考慮し、この話を切る意味もあって、僕はトムの肩を2度叩いた。その後トムを通り越す。

「良いねー良いねー 若いねー 初々しいね〜」

話は切れたが、こいつの妙なテンションは今も継続中だ。親戚のおじさんみたいなことを言いながら突然走り出し、僕らの前を歩く3人の女子のスカートを神業的な早さでめくり上げた。

「ピンクに水色〜仕上げは黒〜 女子高生のパンツはいかがですか

濃緑にワインレッドのタータンチェックの制服のスカート3枚の着用者からは、当然猛抗議が始まる。

「サイツデー」

「本当に良い加減にしてよもう！」
トムのスカートめくりは、かなりの頻度で行われる。最近では見切りをつけられたようで、とうとう生徒指導室にすら呼ばれなくなった。

「今日も朝からごちそーさん！」

「ゴメンね、みんな。」

そして大抵は僕が尻拭いをする。そういえば、僕のいない時の事後処理はどうなっているんだろう？

「シンさ、何でトムと友達なの？ 全然タイプ違うよね。」
本日のお召し物は水色のギャル。クラスは違う。この娘が言ったことはよく他の娘にも突っ込まれる。

「そうそう。わっかんないなあワタシ。」
本日のお召し物はピンクの優等生の里美ちゃん。同じクラス。

「まあ、違うから良いんだよ友達って。トムは、素直で良い奴じゃないん。」
これが彼女達にどこまで伝わるかは未知数だが、偽りない答えを述べる。

「ま、エロいけど。」

里美ちゃんが鋭く切り返した。

「はは。」

そこは僕も弁護のしようがない。苦笑する。

「ま、俺もトムとつるんでるから、良いモン見られるしね。」

人差し指で交互に二人の下腹部を指差してから、抗議される前に逃げる。既に下駄箱に居るトムを追いかけ、小走りの逃走。

「こらシン！」

里美ちゃんの怒る声が後ろで聞こえた。僕はそれに答えはせず、振り向きざまに別件に言及する。

「もう聞き終わったんだったら、真智ちゃんに回しといてね。」

「分かってるよ。」

里美ちゃんも、本気で怒ってるわけじゃないから、別件の方に応じる。里美ちゃんはともかく、次に控える真智ちゃんはおっとりしているから、貸しているポルノグラフィティのCDが戻るまでにはしばらくかかるだろう。

「俺のフォローは終わった？」

悪びれもせず、既に上履きを履いたトムが聞く。

「お前は得だよな。」

僕も自分の下駄箱から、上履きを取り出す。僕の下駄箱はやや低い位置なので、屈みながら話してトムを見上げる。

「あんなしょっちゅうめくってたら、普通嫌われるよ。」

「はっはっは。」

トムは腕組みをして笑う。

「威張るとこじゃねーよ。」

上履きを履き終えた僕は、立ち上がってすぐに漫才でいう”なん
でやねん”張りにトムの厚い胸板に突っ込みを入れる。

「なあ……」

「どした？」

僕の様子の変化を感じ取り、トムは僕の語りかけに真面目に耳を
傾ける。

「放課後から、新球の練習始めるからよろしく。」

「変化球増やすのか？ でも何覚えるんだよ。」

後ろから入って来た男子生徒が通れるように、トムは少しのけぞ
りながら質問する。

「カーブ。縦のね。」

「でも……」

トムの言いたいことは予想がつく。

「お前、一回試して駄目だったじゃん。曲がるのは曲がるけど、ど
うしてもコントロールがつかなくてさ。」

「やっぱりだ。」

「今なら出来る気がするんだよね。」

自信たっぷりになんか言うが、根拠は全く無い。だけど今朝は、何
でも出来そうな気分だった。

「お前が言うんだから出来るんだろーよ。」

トムは一度大きく頷いた。

「じゃあ放課後……今日一日でマスターするつもりで行くぜ。」

「おう。」

僕とトムは、ほぼ同時に右の拳を突き出し、軽くコツンとやる。

「授業中寝ると駄目だぞ。」

僕はトムにそう言いつつ、下駄箱を出て右側へ歩き出す。

「お前にだけは言われたかねーよ。」

笑顔のトムは、僕と反対側へと歩き出している。

「じゃ、放課後。」

「あいよ。」

それぞれ別のクラスへ向かって歩き出す。しばらくして、学校のチャイムが鳴った。

「次のニュースです。今朝、奈良県家我市の師禁寺から時価7000万円相当の如来像2体が盗まれました。警察は、先月から京都・奈良の寺社で続く連続窃盗事件と関わりがあるとして捜査しています。」

男のイヤホンからは、ラジオでニュースを読み上げるアナウンサーの声が漏れている。リクライニングチェアに気怠そうにもたれかかり、左手に持つティーカップを時々揺らす。黒のアイマスクをしているため目は見えないが、時折頬をゆるませて何か楽しんでいる様子だ。

「でしたが、解析は難しいとのこと。警察は、インターネットの使用方法に改めて注意を喚起すると共に、たとえ威力が弱いものでも試験的に爆弾ダイナマイトを製造・使用することは禁止されている、と再度呼び掛けています。」

ちようど3つめのニュースが読み終わられた時、男の部屋を誰かがノックした。

「開いてるよ。」

男はアイマスクを取らず、もたれかかった体勢のままノック音の主にそう伝えた。

「何の用だ？」

アイマスクの男より声の調子が若い。入室した男は、不機嫌そう

に問う。

「相変わらず……偉そうだな君は。」

カチャツと音をたて、ティーカップがアイマスクの男の前にあるテーブルに置かれる。

「ま、良いや。君、やっと出番が来たよ。」

背中をリクライニングチェアから離し、左手を掌を空に向ける形で差し出す。

アイマスクの男より若い男は、着用していた緋色のシャツを脱ぎ捨て無言で立ち去ろうとする。

「待てよ。」

「あ?」

険悪な雰囲気が漂う。

「長かった。温めて温めてお前っていう切り札を行かせるんだから……」

「安心しろ。要求にはしっかり応えてやるさ。」

さっきの不機嫌な声より幾分高めの声は、アイマスクの男の発言を中断させて宣言した。それだけ言うと、若い方の男は今入って来たばかりの扉から出て行ってしまった。

ボタン……

扉が閉まる音を聞き、男は八重歯を見せてニンマリとした。そして何かに取り憑かれたような暗い声で呟く。

「もうすぐだ。もうすぐだ。」

呪文を唱える魔術士のように、何度かその眩きを繰り返し、やがて再びリクライニングチェアにもたれかかった。

「いつでも良いぜ。」

通用口とは逆　正面玄関の右奥に位置する広い運動場　その野球部に与えられたスペースにあるマウンドで、僕は、そう言った

トムの構えるミットを見つめる。

野球部と対角線上の場を与えられているサッカー部の顧問のよく通る怒声も、その横で可愛い掛声でランニングをしているテニス部の女の子達の声も、外部の音を何もかも遮断する。

フウ……

一つ息を吐いて、真上　空を見上げる。僕ともう一人の僕の二人きりの空間を作り出す。

”さ、行こうかシン。まずは握りだ。中指と親指を縫い目にかけるんだ”

やったよ。

”人差し指は添えるだけ”

分かってる。

”投げる瞬間まで中指を3塁側にロック”

こうか？

”良い感じ”

で、投げる瞬間に思いっきり中指をひねる。

”うん　中指と親指の間を抜きながらね”

どうだ!？

パン！

トムのミットが音をたてる。確かに変化はしたものの、ボールはすっぽ抜けた気味にストライクゾーンから高く外れた。それに、曲がりも小さく球速も抑えることが出来ていない。

「まだ高いな。」

そう言っただけでボールが返球する。

「それに、その速さだとスライダーと大差ないぜ。」

率直で正しい指摘だ。緩急を使ってカウントを取れるボールを覚えたい。それがこの縦カーブを習得したい要因の一つだ。確かに今のなら普通にスライダーを投げる方がよっぽど良い。

4回、ボールを握ってから投げるまでの動作を確認のためにスローストライクで繰り返し返し、その後また二人きりの世界に入る。

「もっと低く」

分かってるさ。でもさっきは出来なかった。

「狙いはストライクゾーン低めじゃないよ」

「……え！？」

「ホームベース手前でワンバウンドさせるつもりで投げるんだ」

やってみる。

パンツ……

外角低目……ほぼ狙った通りの位置にボールが収まった。しかしもつと球速差が欲しい。

「低さは大分と良いぜ。後は、もちつとブレーキが利きゃあ完成だな。」

僕のイメージしている変化球と、トムが思っている変化球はやはり一致している。あと一息だ、と言わんばかりのさつきより強めの返球が来て、それが僕らの思いの共有を裏付けている。

一度空を見上げる。そして三度、例の世界へと舞い戻る。

”後は緩急だね”

そうだね……何処が駄目だった？ 何が足りない？

”まだ、投げようとし過ぎなんじゃないか”

どういうこと？

”投げるんじゃないかって、抜くんだよ”

抜く……か。

”回転を与えるだけで良い”

そうだな。そうすりゃボールが勝手に曲がってくれる。

”そうだ、行け、シン！”

ノーウィンドアップモーションから左足が上がる。投げる寸前まで中指と親指は固定。リリースするまではボールは右足の腿辺り。

打者から見えない位置へ一旦引き下げる。そしてテイクバック。引き下げた位置から一気に肘を上げ、真上から綺麗に投げ降ろす。投げることではなく、抜いて回転を強く与えることに重点が置かれた新たな変化球は、一度フワリと高く舞い上がり、ややスライド回転してストライクゾーン外角低目いっぱいに落ちた。3度目の正直。

「来たあ！」

僕は思わず叫んでいた。イメージ通りの縦のカーブ。トムも手応えを感じたのだろう。ボールを補球した外角低目から、見慣れた焦茶色のミットを動かさず、自由に動かせる右手を突き上げて言った。

「ストライク！」

太陽と月

少し気分を直そう。コーヒーでも飲もうか。

ぼんやり思いついた斉藤は、ここ数日間入り浸りっぱなしの会議室を出た。ドアを閉めて左側　突き当たりまで歩けば紙コップの自販機がある。

廊下で、とある若い刑事とすれ違いざまに斉藤はピタリと動きを止めた。

「ん？」

どこかで彼に会った経験があるのか。何か引つかかる。濃い茶色のやや長髪　切れ長の細い目のその容姿には確かに見覚えがある。

「久しぶり、斉藤くん。偉く出世しちゃったみたいけど。」

斉藤の記憶の片隅にいるその男は、斉藤のことをハッキリ覚えていたようだ。

斉藤は、それと悟られないように首からぶら下がっているプラスチックカードケースの中の名札を確認する。

大日方オヒナタ 裕亮ヒロアキ　名札に記載されている氏名を読み取り、直ちに

脳内検索にかける。

「あ、ああ！」

該当者は一名しかいない。

「大日方！　大日方じゃないか！　大学出て以来音沙汰無しだったから、一瞬分からなかったよ。」

大日方裕亮は、斉藤の大学で同じく心理学を専攻していた男だ。

思い出してくれたことに安心したのか、中々思い出してくれなかったことに少々ムツとしたのか、彼はよく分からないような顔をした。

「ま、覚えてなくても仕方ないよ。」

「警察の人間なのか？」

「ああ。一般の捜査とは違う捜査をする特別班にいるんだ。心理学の知識もちよつとは役立つてる。」

そのまま長話に突入しそうなやりとりだったが、廊下を二人のキヤピキヤピした婦警の話し声が遠くから近付いて来る。斉藤も大日方も、彼女達が通り過ぎるまでなんとなく話を中断する。

「あ、斉藤警視……」

二人のうちの一人が、斉藤に羨望のまなざしを向けている。

「お疲れ様です！」

元気いっぱい挨拶だが、可愛い声は計算されている。彼女自身の”女の部分”を誇張するように。

「ありがとう。」

爽やかな笑顔を返した斉藤だが、その声の質に潜む物を見抜いていないわけではない。分かっていても分かっていないように振る舞い、名も知らないこの婦警を傷付けまいと考えている故の行動だ。

近付いて来た二人は、今度は逆の方向へ遠ざかって行く。二人の姿が小さくなって、話し声の一部が聞こえた。

「やっぱり斉藤さんカッコいい！ やばいわ〜」

「相変わらずモテてるじゃん。」

それを聞き届けてから、大日方は会話を再開する。

「それで？」

斉藤は自分から話題を変えた。あの婦警とどうにかなりたいわけではないし、自分がモテるなどと他人に指摘されることには、ずっとうんざりしていたからだ。

「何やってるの？」

「何って？」

大日方は、婦警達が通って一旦思考が止まっていたらしい。素直に聞き返した。

「特別な捜査やってるって言うていたじゃないか。」

斉藤の方は、思考を大日方との会話に焦点を合わせ続けていたのだ。女性への興味の差なのかもしれない。

「ああ、捜査ね。」

大日方の方も、素早く自分の思考を巻き戻して、斉藤に答える。

「”蒸発”・”失踪”・”行方不明”・”無戸籍者”・”ホームレス”……」

次々に単語を述べる大日方は、その後少し黙った。彼の中では、これらの単語は何らかの線で繋がっているらしかった。斉藤は、彼が単語一つ一つを同じ音程と同じ間合いで発音する様子を聞き取った。「どれも違うな。」

やがて口を開いた大日方は、何かを小馬鹿にするみたいな笑いを見せた。

「わかりやすく言うと、”神隠し”の捜査さ。」

「”神隠し”？」

斉藤は、いつもより自分の声が高いことは自身で認識しながら、大日方の言った興味深い単語を咀嚼する。

「……誰かが突然消えてるっていうのか？」
そして自分なりの理解を相手に表明する。あまりに直訳ではあるが、これぐらいしか思い浮かばない。

「そ。」

返事は一言で素っ気無い物だったが、その方がわかりやすくて良い。

「あんまり言えないんだ。上に止められてて……」

大日方は、人差し指を上突き上げた後、顔と仕草の両方でおどけながら両肩をすくめた。

「なら追求はしないよ。」

斉藤もまた、学生という身分から社会人という身分に変わって随分と経つ。組織の内部の事情と苦労は、嫌という程わかる男になった。そしてまた、この大学時代の知り合いの大日方も、そういう組織の一部に組み込まれているのだ、と改めて鑑みるのだった。

「じゃ、もう行かなきゃ。会えて嬉しかったよ。」

大日方は立ち話を切り上げ、右手を挙げて歩き出す。

「こっちもだ。またゆっくり話そう。」

昔の知り合いに会い、少し心の換気が行なえた斉藤も、同じく手を挙げてそう答え、大日方と反対方向に歩き始める。

残暑の日差しを窓から感じ、斉藤は買ったばかりの紙コップのアイスコーヒーを一口含んだ。

「もう………秋か。」

「おい！」

誰かが僕を呼んでいる。でも誰だか分からない。

「おい、大崎！」

やっぱり呼ばれている。しかし待つてくれ。僕は今忙しい。

「……起きんかコラア！」

だからこっちは眠るので忙し………ん？　そこで自分の挨拶曲げられた主張と違和感に気付き、目を覚ます。目の前には、この2学期から赴任したばかりの英文読解の教師が仁王立ちしていた。

「あ………すみません。」

褒められた行為でないことは自覚している。机に俯せになっていた上半身の体勢を整え、黒板に書かれている教科書のページを開く。もはや怒りは消え、呆れを感じているらしき教師の右奥　美耶ちやんが、斜め後ろを振り返る格好で僕に何とも言えない笑顔を送っている。

「まったく……ちゃんと聞いてる。」

密かに授業態度の点数を引く程度が関の山だろう。元々そんなに真剣に注意する気のない教師は、言っただけで教壇の方向へ引き返す。それで事無きを得る筈だった。少なくとも僕はその段取りだった。

「シンは英文読解学年1位なんだし、別に起こさなくたって良いじゃん。」

美耶が言った。地味に不機嫌だ。

「……ん？」

教師は、眉毛をピクリと吊り上げた。現時点では美耶の方を見てはいるが、その不快感の標的は僕のようなのだ。気に食わないのは僕で、美耶ではないのだから。

そうは言うが、美耶も学年2位だ。僕とは毎回大体3・4点差で追走している。僕の点数と3位との間は、ほぼ毎回10点差開くので、この教科は事実上僕と美耶の一騎打ちなのだ。

美耶は、教師がこの勢力図を知らないと思っただろう。一番強い感情は、姉の彼氏が何も反論せずに引き下がることへの怒りなのだろうが……

全く……女の子ってのは理性より感情が先行するから手に余る。美耶ちゃんなりに僕のプライドを尊重してくれたのだろうが、これまでずっと僕は石滑イソカ高校で目立たずに暮らしたい、と願って来たんだ。

「だったら大崎……」

教師が低い声で僕の名を呼ぶ。僕の見立てでは、この教師は美耶が言ったことぐらい既に知っている。他に眠っている生徒が2人居

る。しかも1人は教壇近くの前列でそうしている。わざわざ僕を選んでる。この教師の狙いはハナから僕で決まっていたのだ。

「お前、この問題日本語に訳してみる。」
ほら来た。

「応用の5番だ。」

しかもご丁寧が一番の難題を指定した。応用は、普通の授業ではスキップする所だ。

前までの僕なら、高校2年生が分かりそうな単語だけ掻い摘んで訳し、適当な訳を言って、まだまだ大学受験レベルじゃない生徒のフリをして、目立たない為の芝居を敢行していたことだろう。そうやって何度も偽って来た。教師連と級友達と 自分を。

しかし百合とのあの夜以来、僕は偽ることを少しずつ卒業していった。今、またその機会の一つが訪れている。

「結論を述べる前に、前置きとして言わせてもらえば、文化の衰退という論じやすい事象においても、10年前のそれに対する認識とは異なる程に、物事への理解の推移は急速的なのだ、という事を思いに留めておいて頂きたい。」

僕は一気に日本語訳をまくし立てた。

「訳しましたよ。」

僕が訳を言っている後半、教師の歪んで行く顔は、見ているこっちが痛々しかった。庇ってやるつもりは毛頭無い。寝ていたことはこちらに非があるが、同じ立場の生徒から敢えて僕一人を選び出し、自分のエゴに授業の時間を用いたのだ。

「……くそ。」

グウの音も出ない。だが自分の教師としての面子もある。

「生意気な奴だ！」

負け惜しみ以外の何でもない捨て台詞を吐き、教師は教壇へ戻って行く。

折節、僕はまた机に突っ伏した。今夜のバイトに備えて。

大体のクラスメートが、僕の寸分違わぬ訳に驚いていた。幾らこの教科1位とはいえ、流石にこれは解けないだろう、という目算は大きく外れた。その目算は、これまで見てきた偽りの僕に基づいており、決して間違いではない。美耶ともう一人 留学生のラボク・ステファン は、僕と教師の様子が可笑しくてたまらないのか、声を必死に押し殺して笑っているのが見えた。その光景が、放課後のチャイムが鳴るまでに今日僕が校内で見た最後のものとなった。

夢の向こう側で、学校のチャイムを聞いた。僕は、枕代わりの固い机からムクツと起き上がる。席を立ち、伸びをする。

ほとんど意識せず、ズボンの右ポケットから携帯を取り出してスライドさせる。2回着信があつたみたいだ。ボタンを操作する。バイト先の店長からだつたようだ。2回目にメッセージを残してきている。迷わず再生をする。

『あー……大崎くん？ 悪いんだけど、俺、明日の夜に予定入っちゃつてさ。今日の夜は俺入るから、シフト変わってくれない？ 連絡、待つてるわ。』

プツツという音と共に再生が終わる。

「シン！」

美耶ちゃんが満面の笑みでやって来た。

「やっと見せてくれたじゃん……本気。」

そう、美耶は僕の実力を知っている。美耶が学年2位なのは、何を隠そう僕が家庭教師だからだ。

「うん……まあ。」

適切な言葉に出会えず、一応肯定だけはしておく。喜んでくれている美耶との温度差が、僕の歯切れを悪くさせている。

「どーゆー風のふきまわしですか？」

百合を童顔にしたようなキュートな顔を、僕を下から見つめたいがために斜めに倒す。おちよくつとんのかお前は。

「知ってるもんねー、ワタシ。」

美耶が言い終わった刹那、僕の携帯にメールが来る。怪しみながら液晶画面に目をやると、案の定送り主は美耶だ。

”お姉ちゃんとヤツたからでしょ？”

美耶はメールを打つ早さが異常だ。嘘か本当か、1分間に7通メールを送ったこともあるらしい。このメールも、僕と会話をしながら即座に打つたんだ。

「当たり前？」

美耶は悪戯っぽく聞く。左に傾いていた顔を、今度は右に傾けて

「あのなあ……」

注意しようとして離陸はしたが、着地点が分からない。僕はすぐ言葉に詰まる。

「シンン！」

その時、僕を呼びながらトムが走って来た。教室の入口から、僕らの方を指して来る。

「トム、助かったよ。」

「何が？」

少し荒い鼻息で、目を丸くしたトムは僕と美耶がいる所に辿り着いた。

「いや、こつちの話。」

「じゃ。」

相変わらずニヤニヤの美耶だが、トムが来たので僕に手を挙げる。こんなでも、美耶は空気を読むという面では賢い。

「シン、後はそのバカと仲良くやりなよ。」

スキップをして、教室の窓辺に存在する女子友達の群れへと移動

する。

「バカ言っな！」

トムは怒ったが、美耶が言葉を使わずにアツカンベをして応酬した。

「何だアイツ……」

「ハハ……トムはいつも美耶にからかわれてんな。」

こう笑っている僕も、さっきまで美耶にからかわれていたじゃないか、なんて突っ込みはしないで欲しい。

「シンさ、今日の夜ってバイトある？」

トムはこう切り出した。

「ある……」

そこまで言っつて、さっきの店長のメッセージを思い出す。

「いや……あるけど、シフト、明日の夜と変わってくれて言われなさ。」

「じゃあそうしろ！ 今すぐそうしろ！ 何が何でもそうしろ！もしAVが落ちてもそうしろ！」

「分かった分かった。今電話しとくよ。」

なだめて納得はするが、突っ込むことは忘れない。

「って……最後のシュチュエーションは何だよ！」

「いやあ……昨日落ちててさー しかも俺の大好きな娘のやつ。」

「知るか！」

照れ笑いのトムをしばし放置し、着信履歴から店長にリダイヤル

する。

「もしもし、大崎です。」

『おお、シン！ 悪いねー……お願いして良い？』

「良いですよ。僕も今夜用事出来そうだし、ちょうど良かったです。」

「

『そっかそっか。俺は助かるわ。じゃあそっということでもよろしく！

さいならほい！』

店長は、いつもの”さいならほい”で電話を切った。

「で、夜に相談でもあんのか？ また勉強教えてってか？」

僕は時々トムにも勉強を教えている。どん尻に等しい成績で何と
か入学したトムは、そのポジションを他者に譲らずに、25点の赤
点ストレスの点数オンパレードでどうにか現状生き延びている。

「いや、カーブ覚えたしさ。お祝いしよーと思ってよ。百合さんも
呼べよ。俺んとこ、今日は定休日だから貸し切りに出来るし。」

トムの母親の中華料理は、かなり美味だ。店をかまえるだけのこ
とはあって、僕もたまに無性に食べたくなる。中学時代から、よく
押しかけてはご馳走になっていた。

「久し振りに……行かせて貰うかな。」

「っしや決まり！ 練習頑張っぞおー！」

「忙しいやつ。」

僕の返事を聞くや否や、脱兎の如く駆け出すトムを見て、僕は呟
く。そして自分も野球部へ向かった。

今日の練習では、覚えてたのカーブを使って色々な配球パターンを試した。野球部の皆とは言っても僕を入れて2年生9名と1年生2名しか居ないのバッティング練習を兼ねて、実戦形式の練習を実施した。カーブの後のストリート、或いは逆にストリートの後のカーブは、面白いように決まった。十分に秋の大会で使えそうだ。

「百合さんには言ったか？」

夕日が見えるグラウンド　野球部の中で最後まで残ったのは僕と、今僕に話しているトムだ。

「メールした。」

夕日は既に沈みかけている。暗くなるのが早くなった。携帯をス

ライドさせると、まだ5時半なのに画面の周りがボヤーツと光る。
「直接トム家に来るってさ。仕事終わりに。」

「了解。んじゃ、先に行つて始めときますか。」
スパイクを袋に入れてエナメル質の鞆に押し込み、トムは顔を上げた。

「久々に飲むぞ〜」

「お前……飲みたいから俺らを呼んだんなら、ぶっ飛ばすぞ。」
歩き出したトムの背中に向けて言う。

トムは酒に強い。そして飲むのが好きだ。トムが幼い頃に亡くなった親父さんのDNAを引き継いだらしい。ただ、トムも僕と同様曲がりなりにも未成年だ。トムの母親は、誰かが来た時だけ飲酒を大目に見てくれる。実のところ、僕の飲酒デビューは中2の時の杉原家だ。

「お前も飲めよ。あ、あと百合さんが酔うとこ見てみたいなあ〜」
ケースに入っているバットをぐるりと振り回し、挑発するように僕を見ている。

「百合を酔わせて何がしたいんだよ!」

僕は素早くトムに追い付き、トムが振り回しているバットを右手で掴むと、左手を回して、バットの右手で掴んでいない方を掴む。そうやってトムの首根っこにバットをあてがう。

「変なことしたら許さんぞ〜」

「うっひょー! 愛する女のためなら男ってやつぁ怖いね〜」

何故か時代劇風な言い回しはさておき、僕は更に首を絞めてやつ

た。

「分かつ……分かつたつてシン………苦しい。」
「ここでようやく解放。」

ゲホッ……

少々やり過ぎたか。トムは一度咳き込んだ。

「悪い。やり過ぎた？」

「いやいや……」

腰から上を少し屈めたまま、右手の掌をヒラヒラとやったトムは続けた。

「シン、ちよつと力強くなつてないか？」

「そうか？」

自覚は無い。無意味なのは承知の上で、両の手の拳を握ったり広げたりする。

「ま、地道に鍛えてはいるけど。」
立ち上がったトムに言う。

「その分だと、まだまだストレートを速く出来るかもな。」

すっかり夕日は消え、校門を出て、暗くなった駅までの道を二人で歩く。おふざけモードは自然消滅して、足音だけの時間が僅かな間続く。

「後は……」

電車に乗ると、トムは駅に着くまで眠ってしまったらう。夜はバイトする予定で、昼間を睡眠に充てていた僕とは状況が異なる。話があるなら、駅に着くまでのこの短い道のりの途中に聞いておこう。

「後は？」

もう一つ変化球を覚えろ、的な要求をして来るんじゃないかなるか。

「足が早くて、打率も良いような奴が一人欲しいな。」

そっちか。でもトムの言う通りだ。幾ら僕とトムが秀でていたって、今の野球部じゃ県大会ベスト4が精一杯ってとこだ。

「そんなイチロータイプの子ウチにいないよ。野球やるっただけでも珍しいのに。」

「ですよ〜」

もしそんな奴の入部が実現すれば、やりようによっては甲子園に行けるかもしれない。他の部員達だって、結構一生懸命やってくれている。石滑高校という環境にしては、ビックバン級の奇跡だ。

「転校生でも来ないかね〜」

論議しても答えは見えていないからか、トムはとうとう非現実的な願望を口にした。僕は反応はせず、見えて来た改札口に定期券を入れた。

家に着いてからのトムは、飲み飲み、食いに食った。幾ら強いとはいえ、このペースだと百合が着く頃にはすっかり出来上がっているに違いない。

「お前……飲み過ぎ。」

「シンくん、もっと言ってやってよ。」

このいかにも肝つ玉母さんな女性が、トムの母親 杉原 麻里

だ。夫を亡くして以来、一人で店を切盛りしながら4人の子どもを育てて来た。トムは4番目の末っ子で、特に手が掛かるらしい。人前に出る商売だから、ということ、いつも小綺麗に化粧をして髪もソバージュに整えている。

「食費泥棒つてのは、こういう子のことなんだろうね。」

言っていることは裏返し。トムを見つめる麻里さんは、いつも愛情に満ちた目だ。

”食費泥棒”の肩書きにふさわしく、あまりに食べることに集中しているトムは、さつきから発言機会が全く無い。常に口の中がいっぱいだから、喋ることが不可能なのだ。

「百合さん、まだ来ないね。」

麻里さんは、さつきから店内の鳩時計に目線を送っている。百合を心配してくれているのだろう。

「こんな街でも、最近は痴漢も出るみたいだし……」

「百合なら大丈夫ですよ。」

自信がある。あいつに手を出すやつは生きて帰ることは出来ない。根拠もある。

「あんな美人に夜道を一人で歩かせるなんて……シンくん女の子の扱いそんなに下手だった？」

曖昧な微笑みが見え隠れするのは、きっとトムが麻里さんに不要なことを吹き込んだからだ。

「でも、百合さんは本当に大丈夫だぜ。」

何分か振りにトムが発言する。

「空手やってっからな。」

そして発言した時間を惜しむかのように、さっき麻里さんが置いたばかりの天津飯を口いっぱいにかきこむ。

「あら。おばさん、それは知らなかったわ。」

本当に驚いている。無理もない。あの美貌で空手の段保有者なんて、どこぞの漫画のヒロインでしか有り得ない設定だ。

「そうなんです。しかも段持ち。」

食べ終えたチューリップの骨を並べて、僕は言う。僕も食べていないわけじゃない。トムが食べまくっている状況下で、麻里さんの会話の相手が僕しか居ない。必然的に食べることより話すことが優先されている。

「へえー 百合さん強いんだね。」

腕を組んで大層感心した様子の麻里さんは、こう続けた。

「浮気なんかしたら怖いね。」

ちょうど飲んでいた水を噴出する、みたいなお決まりの事件は起こらないが、急に飲み込んだ一部が食道以外の場所に入り込んだよ

うで、僕は咳き込んだ。

ゴホッ……

「嘘よ。何も咳き込むことないじゃない。」
「そんな気はさらさら無いし、別にやましいことも無いけれども、
どうにもこうという話の展開は苦手である。」

まだ咳き込んでいるその時、店の引き戸を開けて、ベージュの薄手のニットを羽織った百合が来た。青いボタンを模した飾り付きの黒のパンプスの音が響く。

「あれ？ 仕事終わりに来るんじゃないの？」

「麻里さん、こんばんは。お邪魔します。」

僕の質問に答えるより先に、麻里さんに挨拶すると、独特のふんわりとした笑顔を見せる。

「いらっしやい。久し振りね。元気してたかい？」

「ええ。いつもシンがすいません。」

一通りの問答が済み、百合は僕の方を見た。今日の髪は”実樹バングス”なのだろうが、まだミディアムショートの丈しかないから、計らずもオリジナルの”百合バングス”になっている。

「仕事終わってから余裕があったから、着替えてきたの。」

「そっか。」

「どうせなら私服の私、見たいでしょ？」

そう言っただけでモデルのポーズを真似る。

「あーそうですね。」
苦笑いの後の棒読み。

だがその僕の顔はすぐに引きつる。百合が、上段蹴りの要領で、淡い水色のジーンズで覆った長い脚を振り上げたのだ。勿論、僕の顔面に寸でのところでピツタリ止まっている。

「本当に空手やってるんだね。」

様子を見守っていた麻里さんは、再度感心した。

「あ、すみません。来て早々に……」

声の主に詫びて、百合はスラリとした脚を下げた。申し訳なさそうに一礼する。

「良いんだよ。こんなシンくん、滅多に見られないから、面白くて。」

麻里さんの視線は、百合に向かって両手を合わせ、しきりに「ごめんなさい」をしている僕に送られる。

「さ、座つて。今そこに出てる以外で、何か食べる？」

麻里さんに促され、百合は僕の横に座る。

「じゃあ……」

2度3度と視線がテーブルを周回する。多分百合は気付いていないが、物を考える時に唇をキュツと結ぶ。今もそうだ。

「ポイポイ回鍋肉、お願いします。」

「あいよ。」

注文を受けると、知り合いでも営業癖が出るのか。それを気に掛けていているのかな。麻里さんは口にした後に、恥ずかしげに笑った。

「シン！」

全くもって意味が分からないが、トムが急に僕を怒鳴りつけた。

「な……なんだよ？」

「あ、百合さんこんばんは〜」

本気でズッコケそうになる。挨拶のタイミングはとっくに過ぎて
いるし、僕に何か言おうとしていることがあるのに、華麗に置き去
りにしやがった。しかも、百合に気を遣ってなのか、妙に間延びし
た声で挨拶をするもんだから、こっちとしては何時にも増して調子
が狂う。

「こんばんは。」

ニコリと百合が一礼する。こういうのが大人の女性の落ち着きな
のだろう。

「で、シン！」

名前を呼び付けられるのはある程度予期出来たから、何も言わな
いでトムの台詞を待つ。

「お前はもつと素の自分を出せ！」

さっきの麻里さんの”こんなシンくんは滅多に見られない”とい
う言葉に触発されたんだろう。恐らくは。

「無理だよ……」

トムの言いたいことは分かるし、多分トムが正しいとさえ思う。
でも”眼”を持つ僕には出来ない。

世の中には、何種類もの人間が居る。賢い者。愚かな者。素直な
者。悪意のある者……先入観や偏見で、相手の本質を見誤るぐらい

ならまだ良い。しかし”眼”は、出会って数秒で完全無欠な分析をもたらす。ミスは無い。こちらを利用しようとしている者に、何故自分をさらけ出せようか。気付かずに騙されかけている者を救う時どうして本当のことが言えようか。僕より優れていると勘違いしている者に、僕より劣っている真実を突き付けて安易に傷付けることなど出来ようか。

「お前だから……百合だから……素の自分でいられるんだよ。」
落とすように言った後にハツとする。なんで今こんなことを口走ってしまったんだろう、と自責の念にかられる。

僕は酒に強くない。頭が常に回転しているせいか、強くはないがいつもは酔いはしない。でも、気が付かない内に酔っていたのかもしれない。間違いなく酔っているトムはともかく、まだ素面の百合は、今のを聞いてどう思うのか。

「トムくん、だいぶ酔っ払ってるね。」

百合は、僕が百合の方を見るなり取り繕うようにトムに話し掛けた。

「俺は百合さんに酔いそ……」

そこまで言ってトムは背もたれに倒れかかった。全身の力が抜け、軀をかいて寝ている。トムの席の前には、空のビール瓶が8本並んでいる。

「口説くんなら最後までちゃんと口説いてよね。」

テーブルに両肘をついた百合は、聞こえないリクエストをトムに出す。声が若干低いのは、トムのことを言いながらも神経は僕の方に伸ばしているからだ。

僕は無力だ。何て言ってあげれば良いのか分からない。百合の気

遣いに応えてやれもしない。

「はい、回鍋肉お待たせ」

八方塞がりの僕を、出来たての回鍋肉を運んで来てくれた麻里さんが救った。

「わ。美味しそう！」

割り箸を開いてはしゃぐ百合は、僕に”気にしなくて良い”と訴えているようだ。

「シンも食べるよね。」

「……ああ。」

年上の彼女って、皆こんなに機転が利くものなのか？ 百合はその点よく出来た女だ、と考えるのは、惚気ではないだろうか。

「麻里さん、こいつ、寝ちゃいましたよ。」

「ほんと……」

笑顔のまま口を開けて眠るトムは、何とも幸せそうだ。

「幸せそうな顔して。」

麻里さんも同じことを思ったらしい。

「ずっと喜んでたのよ、最近の知則。」

「何をですか？」

むくれてる百合を尻目に、僕は少量の回鍋肉を百合の前の皿から奪い取りつつ尋ねる。

「シンくんのことよ。」

「僕……の？」

気楽に何気なく聞こうとしていた僕は、箸を持つ手を止めた。

僕の機能停止状態の隙について、百合は僕の飲みかけのビールをひったくって、グラスに残ってた分全部を飲んでしまった。仕返し出来て満足したのか、これみよがしに威張っている。

「あいつがやっと本気で野球をし始めた。そう言ってたわ。」

「……」

僕は押し黙る。例えば、僕自身の勝手なモラトリアムに、トムの3年しかない高校生活の約半分も浪費させている。

「それとね。」

麻里さんは続ける。

「貴女のことよ。百合さん。」

「ふえ？」

今度は、虚を突かれた百合がフリーズする。それでも今回は、さっきの仕返しの仕返しをする元気が僕にはなかった。

「シンくんがシンくんらしくなったのは、百合さん　貴女が居るからだって、知則はいつも言ってるわ。」

「……」

百合も黙り込む。二人して黙ってしまうカップルってどうなんだろう？

「男友達としては助けてあげられるけど、あいつは女でも抱かなくや変われない……なんて下世話なこと言ってたわね。ふふふ。」
途端に百合が恥ずかしそうに俯く。ちよつと待て！　そんな仕草を見せたら、”経験しました”って麻里さんに報告してるのと同じ

じゃないか。

同時に感じる。やっぱりトムは親友だ。下世話なところもあいつらしいけど、僕が変わるには荒療治が必要だってこと……とうに見抜いていたんだ。

「あー駄目ね。こんなこと勝手に言っちゃうと、あの子怒るから。」
僕も百合も、それぞれの立場とそれぞれの理由で、麻里さんに言葉が返せないでいる。麻里さんは、何かを打ち払うかのように動いた。

「さ、この話は終わり。知則を自分の部屋で寝かせるわ。」
叩き起こされたトムは、眠気眼でムニヤムニヤ言いながら、自分の足で店の二階　杉原家の居住スペースに上がって行った。麻里さんも後に続く。

「シン、もつと食べれば。どうせトムくんが喋ってる間、シンあんまり食べてないでしょ。」
お見通しか。

「うん、まあね。」
二人きりで会話するのが途端に気まづくなっていたから、僕は百合のこの申し出にすんなり応じることにした。

けっこんな間寝ていたと思う。酒を飲むと僕は眠くなる。気づくと、さっきはトムがいた席に麻里さんが座って百合と話している。直感で、男が踏み込みにくい話の最中なのだと推定し、起き上がるタイミングを待つことにする。

「あれは本音よ。私もそう思うもの。」

「私……自信なくて……」

僕がうつ伏せ継続中につき、音声のみで把握するしかない。百合の相談を麻里さんが聞いている、という構図が思い描ける。

「百合ちゃんはどう思うの？ 最近のシンくん、変わった？」

「少し変わったとは思いますが。でもそれが私の影響なのかどうかまでは……」

「考えすぎなのよ。」

「え？」

「年が離れてるからとか、学生と社会人だからとか。」

「……」
何も言わないということは、百合がその類のことで悩んでいたことの証拠だ。

「どんな恋人同士でも、同じよ。その人といれば、本当の自分になれる。それが……恋人。」

深い。人生経験の成せる助言だ。同じことを僕が言っても、説得力に欠ける。

「男の人はみんな月なのよ。」

「月？」

「そう、月。才能も力もあるのに、不安定だから満ち欠けするの。しかも自分じゃ輝けない。女の人っていう太陽の存在がなくなっちゃね。」

「You're my sunshineってそういう意味なんですよ。」

百合、それは違うと思うぞ。まあ、麻里さんの言っている意味を理解したことは伝わったが。

麻里さんは、オトボケ発言には触れず百合を温かく見守っている。見守っているような気がする。見えないから確かではない。

「私、太陽になれるかな。」

やがて百合がそう言った。元気な声で。

「なれるよ。」

麻里さんは、百合の背中を押そうと言葉を選んでくれている。

「シンくんは賢くて大人びてる。でもそれが仇になっちゃってるの

ね。笑っていても、いつもどこかに影があった。絶対に満月にはならない月ね。」

「満月……」

「でも、最近影が少ないの。満月になる日も近いわ。それは太陽次第ね。」

麻里さんが立ち上がる音がする。どうやら百合の側に移動したみたいだ。

「私、そんな……麻里さんが思ってくれてるような女じゃない。」
震える声で、絞り出すように語る百合の背中を、麻里さんは優しくさすった。

「私と知則の知っている百合ちゃんは、美しい太陽よ。」
僕は完全に、起き上がるタイミングを見失った。

狙撃手

「警察は、現横井商事専務の渡辺郁夫容疑者47歳を書類送検ワタナベイクオしました。調べによりますと、渡辺容疑者は、被害者の22歳の女子大生に電車内でわいせつな行為をしたということで、女性の近くにいた男性の証言もある模様です。横井商事社長の……」

そこで、視聴の中断を余儀無くされた無精髭の男は、イヤホンを外す。今日はアイマスクはしていない。きつかけ抜きで、彼は言う。「大崎の監視の定時報告は、さつき終わったよ。」

今し方入室したばかりの女性が、自分に告げられることを見越して先手を打つ。

「それじゃあ、そろそろ私も動き出す時ね。」

どこか迷いがちな女性の声は、男を説得へ促す。

「ふむ。君には期待しているから、この大事な役を選んだ。上手に動きなさい。」

ポニーテールにくくった髪を振りほどき、言われた女性は虚ろな目で男を見つめる。

「君自身も、やりがいがあるだろう?」

男の視線と声が一段と鋭さを増す。まだ良心の余地があった女性にとっては、悪に墜ちる最大のきっかけ。弱点を一突きにされる格好になる。

「期待……やりがい……」

「心配しないでくれ。君の復讐の手助けを、ほんのちょっとコチラがやるだけのことさ。」

もう一押しだ、と確信した男は、トドメの一撃を繰り出した。

電気は消え、皆の姿はない。パチツと開けた目には、杉原飯店の天井の内装が見える。

ああ……あのまま僕はまた寝たのか。

麻里さんがかけてくれたと予想できるタオルケットを払いのけ、ゆっくり起き上がる。僕は、店の座敷席に寝かされていた。麻里さんと百合で運んでくれたのか。

窓からの月明かりが、すぐ横のテーブルにある置き手紙の所在を僕に教える。それぞれ、麻里さんと百合からだ。

何だか麻里さんに悪い気はするけど、結局は百合のぶんを先に手に取る。

”遅くなるし、美耶もいるから私は帰るね。夜中起きて何か飲みた
いなら、お金置いとくからそれ使って。今度のデート、財布買いに
行く？ じゃあね。 ゆり”

手紙があつた位置の真横に、きっかり¥120が並んでいる。ア
イツらしい。

そついや、あの地下鉄の事件以来、僕は財布無しだ。あの混乱に
乗じて、スリにでもやられたのか。

銀のを1枚、銅のを2枚右手に取って握り、左手には未読の麻里
さんの手紙を持って、僕は座敷席から降りた。靴の踵のところを踏
んだ履き方で進み、入口の引き戸の鍵を回す。二階で眠る麻里さん
とトムを起こさないよう、細心の注意を払って引き戸を開ける。

外に出た僕を迎えたのは、見事な満月だった。それを見上げた僕
は、さっきの麻里さんと百合のやりとりを思い浮かべる。

僕は満月になれるだろうか。百合の光を、存分に反映出来るだろ
うか。

店のすぐ横に設置されている自動販売機に、百合が置いていった
コイン3枚を入れて、酔い覚ましに甘い物を飲もうとする。右手の
人差し指は、カフェオレの所で一旦止まったけど、二つ横のミルク
ティーを選ぶ。

理由は単純明快だ。いつも百合がミルクティーを飲むからだ。僕

はこんなにも百合に依存しているのか、と少し笑えたりもする。自分の彼女が好きな飲み物を、その彼女が居なくても飲む。

「ふっ……」

誰の耳にも届かない、小さな笑いを一つこぼす。ガシヤリと鳴った後、しゃがんで缶を取り出し、タブを引っ張る。

ポケットから取り出した手紙を左手に持ち、右手のミルクティーを一口飲む。百合の味がする。フウ、と一息ついて、自動販売機によっかかって手紙を読む。

”寝てるみたいだし、座敷で良かったら今夜は泊まって行ってね。お家には連絡しておきました。それとこれは老婆心だけど、いくらしっかりしてて年上でも、百合ちゃんも女の子だからね。”

百合の丸文字より達筆な文字の手紙を全て読み終える。百合も女の子、とはどういう意味だろう。僕が盗み聞きした時に、百合が口にしていた悩みのことかな。何か別のこともかもしれない。いずれにせよ、依存するだけではなく依存させてあげたいとは僕も思う。明日から機会を探してみよう。百合が僕に甘えられそうな機会を。

残っているミルクティーを、満月を眺めながらゆっくりと飲んで行く。愛用の緑の腕時計を見ると、蛍光塗料の針は午前3時を示している。

もう一眠りしよう。そう決めて、最後の一口を飲み干すと、空き缶を捨てて店内へと戻る。再びゆっくり静かに引き戸を閉めて、さつきやったのと逆方向に鍵を回す。

カチャリ……

音を境に、僕は折良く眠気を覚え始めた。さっきのミルクティーの効果もある。

とつくに踵が変形した靴を脱いで、またさっきの座敷席へ上がる。即席の寢床を作る。2枚の座布団を敷き布団に、タオルケットを掛け布団にして。

さっきミルクティーを飲んだけど、コーヒーを飲んでも僕は眠れる。だって、カフェインに眠気を覚ます効果は無いのだから。未だに知らない人は多い。でも科学的にハッキリ証明されている。なのにノンカフェインの商品が、未だに堂々と売り出されている。ある意味詐欺じゃないのか、と義憤に駆られる。

眠気があるのに、頭はやたらとキレる。そんなカフェイン蘊蓄をあれこれ考えている時間を超えて、僕は遂に眠りに落ちた。

やってみると意外にしんどい。偽りの自分の方がしっくりくるまでに、偽りが染みついていくことを実感する。

仮面をつけた姿が だんだん様になって行く

僕の大好きなアーティストが歌っていた。まさしく、僕のこれまでの高校生活の要約だ。

授業中に眠らないと決めてからというものの、何度か迎えた山場を踏ん張って来た。ノートも取るし、教師の説明にも注意する。やっていることは、この学校では極々普通のこと。だが、入学して以来そんな僕を見たことなんてなかった級友達は、珍しい生物でも見るかのように僕を見た。

こっちが本当の僕だ。仮面を脱いだ僕だ。

一つ苦痛だったのは、自分とはつくに分かっている勉強内容を、やたらめったらノロノロと解説するのを聞かなくちゃいけないことだ。現に、今も数分で公式の使い方覚えさせる狙いなんだろうが、同じパターンの例題を解説している。この時間内で3つ目を数える。いい加減にうんざりして来た。

教師が解説を終えた。僕は、やれやれと思う。教師は、教室の入口のドアを見つめて数秒固まり、そこに歩いて行く。僕も、同じくラスの皆も、何事だろうか、と一様にそこに視線を送る。

スーツを着た二人の男が、二言三言教師と交わした。数学教師は、こちらを振り向き、真直ぐに僕を見て言った。

「大崎、警察の人だ。」

教室がざわつく。美耶ちゃんが、心配そうに僕を見ているから、僕は作り笑顔で応じる。

夜中まで遊び回っている生徒達がマジョリティーの高校ならともかく、ウチの高校で”警察”なんてキーワードが飛び出したもんだから、クラスも数学教師にも動揺が見受けられる。しかも、僕は授業態度が良いとはいえないが、決して素行が悪いというのでもない。教師の側としても、僕と警察は結び付きにくいのだ。

僕はというと、割と落ち着いていた。心当たりがある。多分、こないだの爆破テロの捜査か何かだろう。”眼”を使うまでもない。

不安と好奇の入り交じる視線の中、僕はドアの前に立った。

「こんにちは。授業中にすまんね。波屋橋署の山本だ。」

人当たりの良さそうな中年の刑事が、警察手帳を見せながらそう名乗る。

「同じく、工藤です。」

それに倣うかたちで、眼鏡をかけた若い刑事も名乗る。

「先日、地下鉄で起きた爆破テロの捜査でちょっと回っていてね…」

「読み通り。やっぱりそうだ。」

「少しの時間、話を聞かせてもらって良い？」

相手が高校生だからなのか、話しやすそうに山本さんは用件を告げた。

「はい。」
間髪を入れず、僕は同意する。

「じゃあちよつとコチラに……」

山本さんに誘導され、僕は廊下に出た。右手で教室のドアを閉めて、少しの距離を歩いて二人に付いて行く。やがて、他の生徒の目に触れないよう配慮してなのか、間違っても誰も来ないであろう廊下の突き当たりが、話し合いのステージとして選出された。

「みんなに確認してることなんだ。」

刑事の常套句だ。容疑者にも使われることもある言葉だ。ただ、今回はその言葉通りの意味だろう。

人生で何度もない特殊な状況下で、僕は”眼”の発動を決めた。

楽しむことにしたのだ。警察を”眼”で見るなんて機会に、この先再び巡り合えるとは思えない。

「大崎くんは、あの事件の時、爆破された車両に乗っていましたが？」

山本さんは、穏やかで澄んだ声で尋ねる。”眼”が示す色は

水色 偽りのない、純粋な色だ。

「はい、乗ってました。でも波屋橋駅に着いた時に居たのは、別の車両でした。」

当日を思い返し、ゆっくりめに話す。

「なるほど。では、この写真の女性には見覚えありますか？」

すげえ……本当に刑事ドラマみたいだ。ちよつと興奮している幼稚な自分と出会う。答えることは怠らない。

山本さんが、スーツの内ポケットから出して僕に見せた写真には、

あの日会ったおばあさんが写っている。重い荷物を運んであげた人だ。

「はい。覚えてます。僕、おばあさんが重そうに荷物を持っていたので、運ぶのを手伝いました。でもあの後……」

そう。あの後、おばあさんが居た車両で、例の爆破テロが起きた。

「話してくれてありがとう。」

山本さんは口角を上げて、そつと僕に笑いかけた。それ以上は聞く必要がないのか、僕の説明は途中で終わった。

「一つだけ良いかい？」

それまで、事情聴取を後ろで見守っていた若い刑事　確か工藤と言った。彼が口をはさんだ。一歩前に進んで。

”眼”が、工藤さんの回りに紫色の縁取りを作り上げる。偽り・悪意の色　彼は何かを隠している。だが、それはきっと僕には関係の無いことで、手出しすべきでもないことだ。

「何ですか？」

僕は、山本さんに答えていた時と同じ答え方を心掛けた。”眼”の発動時、口も影響される場合があるからだ。見知らぬこの刑事さんに不快な思いはさせたくなかつたし、逆に不審がられることも避けたい。

「このおばあさんと別れてから、大崎くんは、何かを無くしたり……無くしたことに後で気付いたり……そういうことはなかった？」

これを言っている間も紫色は消えなかったが、何かの捜査上の秘密かもしれないし、実際心当たりがあるのだから申告すべきだろう。

「財布を無くしました。」

僕は正直に告げた。彼の目論見など知るわけもなかった。この時は。

「そうか。ありがとう。」

山本さんに比べると、やはり取っ付きにくさがある。ぶっきらぼうだし、穏やかさに欠ける。経験の差なのか。工藤さんは満足したらしく、再度山本さんの斜め後ろに下がった。

「ありがとう。時間を取らせてごめんね。もう、教室に戻ってくれて良いよ。」

手を振る山本さん。

「お疲れ様です。」

お辞儀をして、僕は二人の前から去ろうとする。一瞬だけ、敬礼でもしてみようか、なんて馬鹿げたことを思いついた僕を、もう一人の僕が戒めたため、実行には移されなかった。

「あ。」

山本さんが何かを思い出したように声をあげた。

「斉藤警視が、”よろしく”と。」

なぜ斉藤さんと僕が知り合いなのか。山本さんが密かに抱いているその疑問がよく表れた声だった。でも、山本さんは詮索はしようとはしなかった。

「そうですか。」

なんとなく嬉しかった。自然と顔も綻ぶ。声も明るい。

「じゃあ僕も伝言を……」

まだ数日しか経過していないが、その間に僕は大きく変わった。今なら言える。少年の日のあの時のように。

「僕の登場を楽しみにして下さい、って。」

山本さんが、僕の真意を汲み取れる筈はなく、ただ微妙な笑顔を見せて頷く。伝言が斉藤さんに届くことは保証出来るだろう。

二人と別れ、教室のドアから入ると、想定内の視線の集中攻撃に遭った。想定外だったのは、約1名の狙撃手の存在だ。

「バン！」

美耶ちゃんは、指で作った銃を発砲した。標的は入口付近に居る僕だ。

「警察が来るとかさあ……シン、覗きでもやった？」

「トムと一緒にするな。」

真顔で言った僕の言葉に、美耶ちゃんを含む数名が笑った。

空の色が、青から橙色に変わった頃、人々は家路に着く。ある者は家族が待つ場所へ。ある者は一人きりの空間へ。また別の者達は、家路ではなく寄り道する先を物色し始める。

この日、都市部のあるストリートにて、やはり先述のような見慣れた夕方の風景が展開されていた。大通りの交差点は、サラリーマンやOLや学生が行き交い、せわしない足音が響いている。中には何かの宣伝でティッシュ配りをしているお姉さん達もいて、中々に際どいお揃いのコスチュームだ。

彼女達のすぐ横を、緋色のシャツの二人組が歩いている。

「うつひょー」

感嘆の声だが、あくまでタイガー・リリーの任務中は小声である。

「たまらんね……あの食い込み。」

男は、ティッシュ配りのお姉さんの言うに忍ばれる部分を堂々と凝視している。

「男の人は好きですね!」

何かへあてつけるようにして、機嫌を損ねた女が怒る。

「何? 新入りさん……妬いてる? ひよっとしてモテない系?」

軽やかな口調の男は、慥然としている女をからかって楽しんでい

る。

「少なくとも、朱みたいな軽い人にはモテたくありません!」

”朱”というコードネームの男と行動を共にする女は、機嫌が悪くなる一方だ。歩いて行くにつれ、二人の周りを歩く人の量は、減少傾向にある。大通りを外れ、細い路地に入ってから、人の姿を見かけるほうが珍しい。

「雀もさ、俺と組むんならこういうのにも慣れるよ。」
朱は、「雀」と呼ぶその女の尻を軽く撫でた。

「……撃ち殺しますよ。」
雀の低く落ち着いた声色が、朱に真実性を訴えかける。

「おい、冗談だよ、冗談！ 仲良くやろうぜ、それに……お前が撃たなきゃいけないのは本気で酷い奴らだよ。」

台詞の前半は、さっきまでの軽く明るい口調だったが、後半は憎しみを露にした恐ろしい声だった。

朱がそれを言い終えた時、二人は歩くのを止めた。周りには、人の気配すら無い。二人が立ち止まったのは、営業しているかどうかさえ疑わしい、ビル形式のコインパーキングの前だ。

「指定されたビルはここみたいね。」

「ああ。」

朱は、携帯を開いてメールボックスを確認しながら答えた。そして待受画面へと画面表示が変わったその携帯を、一瞬だけ見て雀を急かせる。

「時間もあまり無いね。早く上がって、準備頼むよ。」

「了解。」

雀は、ヘアゴムを口に加えると、広がりっ放しにしていた長めの後ろ髪を両手でまとめ、慣れた感じでポニーテールを作った。直後、「港第四ビル」という掠れたインクの入口をくぐり、階段を駆け上がって行く。朱も後ろから続く。

橙色の次に空が選んだ色は、藍色だ。地平線では、残り少なくなつた滞在時間を惜しむかのように、夕日を作る桃色と、雲が作る水色が、見事なコントラストを成している。夕日はほほ沈み、街並みは薄暗くなつてきた。交差点の人の波も先刻よりはまばらになり、例のお姉さんたちもティッシュ配りのアルバイトを終えるようだ。

黄緑色のパーカーのような服を、胸にかかるファスナーを閉めずに羽織っているだけの男が、中に着こんでいるカッターシャツのボタンを一つはずしながら走る。彼が向かう先には、3名の同じコスチューム。

「お疲れさま。はい、今日の分。」

男は、優しい瞳で語り、茶封筒を3枚、それぞれバイトの3名の若い女性に手渡していく。

「事務所で着替えて、帰ってきてくれて大丈夫だよ。」

「……ありがとうございます。」

返した言葉は同じだが、その言い方は女の子によってそれぞれ違う。

一人は横柄な態度で、全く感謝の念を感じられない。茶封筒をひたたくると、その後は無言のまま少しカールした栗色のロングヘアを揺らして行ってしまふ。極め付けは、去り際に男を汚物でも見るかのような冷たい目で睨む、という行為だ。

残りの2人は、彼女とは違った。気を遣って、元気いっぱいに礼を言ってお辞儀する。先に行った1名を追いかける時にも、振り返って笑顔を振りまく。

「お疲れ様でした。」

言われた男の方も、自然と手を挙げて返す。その表情は和らいでいる。

「ちょっと理彩ちゃん、感じ悪いよ。」

2名のうち、先に追い付いた方の女の子が声をかけた。

「は？」

彼女　理彩の性格の問題なのだ。こういう人間は、往々にして相手がどうであれ接し方が悪い。

「あいつキモいっしょ。やらしい目でウチらのこと見てさ。」

”あいつ”というのが、給料を手渡しに来た男を指すらしい。

「アンタもウザいよ。お互い金が貰えりゃそれで良いじゃん。いちいち干渉しないでくれる？」

理彩は、彼女自身に忠告した女の子を声を荒げて叱った。

遅れて来た方の娘が、叱られたばかりの娘の手を握って笑いかけた。仕方ないよ、とか、何を言っても無駄だ、とでも言いたげに。

地平線から夕日が完全に姿を消し、街を支配する色は黒一色となった。

灰色のビル郡の中 どこにでもあるようなビルの一室から、理彩は出た。

過激なコスチュームから、今はもう彼女自身の私服へ変わっている。黒いヒールが階段を踏む度に鳴る音に、別の靴音が潜んでいることに彼女は気付いていない。

やがて外へ出て、大通りの方向を目指して歩き始める。遠くの方
目指しているその大通りでは、合コンにでも行きそうな男女が
入り交じった集団や、タクシーのテールランプが小さく見えている。
彼女はそちらの方向を見て、ぼんやりと歩き続けている。

大通りまで後20メートル……それは一瞬だった。

背後から近付いた男が、理彩に刃物を突き付け、もう片方の手で
彼女の口をふさいだ。彼女は成す術なく、暗く細い陰気な路地裏に
引きずり込まれた。かなりの大声で叫びでもしない限り、誰かその
場所に来ることは考えられないだろう。

その路地に差し掛かる手前の所には、二人の刑事が居た。

「野郎、尻尾を出しやがったな！ 今すぐに踏み込んで……」

「待て！ 一旦我慢しろ。現行犯で捕まえるぞ。」

先輩刑事が、後輩刑事を落ち着かせる。

二人は、逮捕劇に備えて容疑者の男と理彩ににじり寄る。物音を
たてないように、神経を磨り減らしながらも。相手が刃物を所持し
ていることもあり、使用しないことを祈りつつ、二人とも拳銃を構
えた。

男は、忍び寄る二人の刑事の存在などつゆ知らず、ここ何年も続
けてきた快樂の追求を再び実行しようとしていた。

「おい、理彩。」

低く冷徹な声は、確かに彼女の名前を呼んだ。この時点で理彩は、
今顔が見えないこの男は、自分を知っている人物なのだと分かった。
「そんな怖がるなって。殺しはしないよ。」

男がウィンドブレーカーを脱ぐ。フードで覆われていた顔が明らかになる。理彩がハッと息を呑む。目の前には、優越感に浸るバイト先のマネージャーがいた。

一つの舌なめずりの後、男は自分の顔を理彩の顔に近付けた。荒い鼻息と汗のにおいが、彼女の鼻に直接かかる。さつき茶封筒を渡した時の優しい顔の面影など、男にはとつくにない。この異常性欲者に、もはや理性は残っていないかった。手に持つナイフを、理彩の頬に何度も当てる。

「静かにしろ。そして何でも俺の言うことに従え。」

引きつった顔で、理彩は頷いた。彼女の目から、自ずと涙が溢れた。彼女はこれからの運命を悟ったのだ。

「脱げ。」

無機質な声で男は命令する。

「早くしろ！」

それでもやはり理彩は脱衣をためらった。実際には数秒しか経っていないのに、ひどく気分を害したように男は急かせる。

胸元に大きいリボンがついたワンピースを脱ぐ。彼女自身はそれを望んではいないのに。

悔しい。怖い。

怖いと思う自分が余計に悔しい。涙の量が増える。嗚咽も大きくなる。

「良いね。その顔、そそるね。」

対照的に、男は終止楽しそうだ。腹立たしい。喜んでいる男と、何もできない自分が。

「ほら、とつとと全部脱げよ。」

黒の無地のレギンスも、上下の水色のランジェリーも、自らの手ではぎ取られて行く。一番そうしたくない自分の手で。脅されていても、命が危ないと認識していても、理彩は自分の乳頭と恥部を手で覆った。

「邪魔なんだよ。手、どける。殺すぞ。」

男はそう怒鳴り、理彩の全身を舐め回すかのようにゆっくりと時間をかけて鑑賞した。

やがて男は立ち上がった。一段と笑顔に張りが出る。

「良い娘にしてたからな。」

今までとは違う優しい声でそう告げる。

理彩は、これで終わるかもしれない、という淡い期待を抱いた。だがすぐに、それは打ち砕かれた。

「ご褒美にミルクをやるう。」

男は、今日一番の笑みを浮かべ、ズボンのチャックを下ろした。

理彩の長い栗色の髪を手綱代わりに、頭頂部から強引に引っ張り、男は自分の股間に彼女の顔を宛がおうとした。彼女は、この理不尽な仕打ちを受け入れる覚悟　諦めの意思を見せ、苦悩ゆえに目を閉じた。

「そこまでだ！」

凜とした声と、ドスのきいた太い声が響く。息を潜めていた二人の刑事が、拳銃の銃口を男に向けて飛び出した。

「刃物を捨てて両手をあげろ！」

太い声の主　先輩刑事の方が、強く言う。

男は、抵抗はしなかった。ただただ狂ったように笑っている。克蘭、という音を立て、手にしていたナイフがコンクリートの地面

に転がる。先輩に顎と目で指示された後輩刑事が、凶器を奪う。銃口は定めたまま。理沙は、助かったという安堵と、3名の男性に自分の全てを曝け出している恥辱に咽び泣いている。凜とした声の主。後輩刑事は、そんな被害者女性の様子にいち早く気付き、目線を逸らしながら自分のスーツの上着を彼女に被せた。

両手をあげた男に手錠がかけられる。男は、一段と高い笑い声をあげた。

「な……なにがおかしい？」

後輩刑事は、遂に堪忍袋の緒が切れた。

「お前らも、コイツの裸楽しんだろう？　なんで俺一人が悪者なのさ。おかしくてたまらんね。」

これを聞いた理沙の表情はまた更に強張った。被せてもらったスーツを握っている両手に、今まで感じたことのない握力と痙攣を感じる。

「コイツ……」

もう限界だった。正義感の強い後輩は、今にも殴りかかろうと凄んだ。被害者の涙と、女性にとって屈辱的な仕打ちを娯楽とでも取り違えているこの男を、自分の拳で何発でも殴ってやろうと決めていた。

ズダアアン……

闇夜に、銃声が一つ響き渡った。

男は、心臓を撃ち抜かれ、ドサツという音と共に地面に倒れこん

だ。即死だ。

「…………え!？」

繰り出した右ストレートは、男の顔面に当たりはせず、ただ空を切った。横に居る先輩を見つめる。確かに拳銃を握っているが、自分のような熱血漢のタイプではない彼がやったとは考えにくかった。実際、本人も首を横に振った。

「お見事! 狙撃の腕は確かなようだね。」

さきほどの男が黒い点程度にしか見えない 港第四ビルの屋上で、狙撃を終えた雀に朱が賛辞を送った。しかし、どうやらその賛辞は雀の耳には届いていないようだった。

「許せない…………許せないあんなやつ! 女を物としか見てない。」

彼女は激しい憎悪を剥き出しにしてわめいた。

「警察に任せても、アイツは死なない。」

「そう、だから俺たちがやるんだ。歓迎しよう。新たなる同士よ。」
今度は、雀にも聞こえたようだ。差し出した朱の右手を、雀は握手をして見やった。

朱は、携帯メールで任務完了を知らせた。

「もう……あの娘のような犠牲者は……二度と出させない！」

雀は、狙撃時に使用したライフルを分解・収納すると、ヘアゴムを取ってポニーテールを解いた。

狙撃手（後書き）

カフェインの下りは本当です。作者自身も、詐欺じゃないかと思っ
ています。

転校生

空はすっかり秋空。時々まだ日差しが強い日もあるが、大抵はカラッとしていて過ごしやすい。頬をなでる風は心地よく、湿気はもう含まれていない。ごく稀に、キンモクセイ金木犀の香りも運んでくれる。

小野先生が、世界史の授業の後に僕を呼んだのは、そんな秋晴れの日の5限目だった。

「最近、真面目にやってるみたいだな。」

小野先生は、自分が野球経験もなく、部活を僕に任せっきりにしていることに、少し引け目を感じて話す術がある。話しかけるときの取っ掛かりとして、この話題を選んだ……まあそんなところだろう。この発言は、社交辞令の一種と見て良いだろう。

「まあ、元々不真面目ってわけでもないが……」

僕発信のコメントが無かったので、彼は自らの言葉を補足した。社交辞令の不発を悟ったようだ。

「何か用事ですか？」

これ以上伸ばすと、彼の精神が持ちそうにないからコチラから問う。別に僕はサディストではない。

「ああ……」

助かった、というのが彼の本心なんだろう。嬉しそうに用件を語り始める。

「実は、こないだの学校側の要求……私も行き過ぎじゃないかと思っ
ってね。」

これは意外だった。彼の用件は、僕を気遣ったものだったのだ。

始業式のあの日、目の前で地下鉄テロを目撃したその日、僕は学

校側にとんでもない要求を出されたまま下校していた。

僕は目立たないように生きて来た。賞など望んでは来なかった。永遠の二番手でも一向に構わなかった。それで僕は幸せだった。幸せだから、多くを求めはしなかった。僕の勉強における偽りの仮面も、そんな幸福論によって形作られている所があった。決して定期テストで一位を取ろうとしない。前回の点数で負けたあの子に今度こそ勝つてやろう、なんてことはまず考えない。要領良く、当日テスト前に5分程度見直して、そこそこの点数をどの教科も取る。結果的に、学年で6〜9位を常に彷徨っていた。

さて、僕の高校では、その順位でも期待がかかった。難関大学受験に向けての努力が、当然のようにみなされる上位10名に、本人の意思とは関係なく、僕は入ってしまった。

そんな僕が、たまたま入った野球部（あくまで学校側からの見解で、実際は僕とトムは入学後すぐに喜び勇んで入部した）で活躍し、落伍者のトムとつるんで雑誌になんか載ってしまったもんだから、学校としては非常に都合が悪くなったのだ。そして、学校側が下した結論は、何としても秋期大会は初戦で敗退させることだった。言うまでもないが、外部に与える影響も考えて、あからさまな負け方はしない、という条件付きだ。

”投手を僕以外にすること”　これが、小野先生伝いに僕が聞いた、学校側の秋期大会出場の条件だった。だからあの日、僕の神経はいつにも増して鋭かった。

「本当にあの条件、呑むの？」

僕は、不本意ながらも、その条件を呑んで秋期大会に出場する、と即日返答した。納得する気などさらさらなかったが、やっと野球

を楽しいと思ってくれた部員や、毎日欠かさず練習に参加している部員のことを考えると、不参加という結論は下すわけにもいかなかったからだ。

「もちろん。それで勝ってみせますよ。」
僕は言い切った。強く。

「それはちょっと……」
無理だ、と言いたいのだろうが、僕の感情も汲んでくれているのか口には出さない。

「点数は杉原くんが取ってくれるかもしれないが、君以外がピッチャーやるとなるとなあ……」
僕を傷つけないように、遠回しに諦めさせようとしてくれている。歯に衣着せた話し方だ。だが僕は引かない。作戦があるからだ。

「試合当日のオーダーは、先生が決めるように言われたんじゃないありませんか？」

きつとそうだと確信していたが、確認を取る。

「うん。大崎くんがピッチャー以外なら、後は適当に決めろって。」
やはりそうだ。あくまでも世間体を壊さず、僕には勉強を押し進めたいという魂胆なのだから、あまりポジションをイジることも出来ないのだ。

「じゃあ……僕が考えたオーダーを、そのまま先生が出して下さい。先生が自分で考えたオーダーってことにして。」

これなら勝てる。初戦さえ勝てば、次に当たるのは県大会ベスト4のチームだ。学校側も僕をマウンドに上げざるを得なくなる。この初戦さえ勝てれば、道は開ける。

「分かったよ。」

伏し目がちな先生は、バツが悪そうにしている。

「君には、悪い気がしてるんだ。僕一人じゃ、先生達に意見の一つも言えやしないし……」

小野先生は、見た目こそ”ガリ勉”だが、中学時代はソフトテニスの全国大会に出たこともあるそうだ。それが理由なのか、この高校の部活と生徒への指針には批判的だった。

「今度またオーダー書いた紙、渡しますね。」

僕は、先生を責める気になど到底なれない。むしろこんなに協力的にしてくれて、驚くと同時に感謝している。

「もう一つあるんだ。」

まだ微笑みをたたえている僕に、小野先生はそう言った。

「明日から転校生が来るんだけど……野球部希望者らしくてね。」
聞いている途中から、僕の脳裏をこないだのトムとの会話がよぎった。

「ポジションはどこですか？ 経験は？」

キスも狙える距離（もちろんソツチの趣味はない）までに、顔を先生の顔に近づける。僕の食いつきが想像以上に激しかったのか、小野先生は気圧され気味に僕を両手で制した。

「詳しいことは分からないんだ。戦力になる生徒だと良いね。」

6 限目開始のチャイムが鳴り、小野先生は職員室へ戻って行った。

「夜闇に紛れてズドンっか。」

短く刈り込んだ頭のこの刑事が、自分が担当していた捜査を任せていた二人から連絡を受けたのが昨夜のことだ。夏の名残りで持ち運んでいる扇子で自分の頭を叩き、男は考えをまとめている。

駆け付けた時は視界が悪く、細かな確認は夜が明けてからと決まった。昨夜の8時過ぎのことだ。こうして今朝、取り決め通りに現場に戻って来たのだ。

「さてと……取り敢えず、ヤツが死んだ時の立ち位置に付いてみようか。」

「あい。」

上司との長い付き合いが推測出来る。軽妙な相槌と慣れた間合いで、太い声の先輩刑事が移動する。途中、人型になぞられたチヨークの白線を跨いで通る。自分達が追っていた容疑者が人生最後に倒れ込んだ場所だ。

「お前は？」

「俺はここっす。」

先輩に比べるとまだ緊張気味に、凜とした後輩刑事が答えた。

「随分とヤツに近い所にいたんだな。」

部下の報告によれば、手錠をかけたのは先輩の方だ。とすれば、この後輩の位置は不自然な程容疑者に接近している、と言えよう。

「いや……あの時はスねえ……」

わかりやすく口を濁す後輩刑事に、上司は更に眼光を鋭くする。

「こいつ、またやりそうになっただんですよ。」

先輩刑事は、呆気なく秘密を明かして、前歯の銀歯を光らせてケタケタと笑っている。

「ハハ……言ってた通りだな。」

笑いは、上司にも移った。

「久々に熱い若手が入って来たってさ。」

「はあ……」

てつきり注意されると思っ込んでいた分、肩透かしをくらった後輩刑事は、何とも言えない顔で頭を掻いた。

「ま、熱いってのは場合によっちゃあ弱点にもなる。気をつけることだな。」

「はい！」

「で……お前がそこで、お前がこ……」

二人の部下の位置を、丁寧に指差して確認して行く。

「死体がここ……」

目線は白線へ、そして、路地裏の一角へと忙しく動く。

「鑑識が見つけた銃弾はあそこだから……」

上司がそこまで言うのと、幾ら目算とはいえ3人の大体の推理は一致を見る。あの時の状況と自分達の立ち位置、銃弾が発見された場所　狙撃の入射角方向を、それぞれが一斉に睨んだ。

「え……まさかあのビル!？」

裏返る寸前で普段のまま踏ん張った声色で、後輩刑事が言った。

先輩刑事も、その上司も、彼と全く同じビルを注視している。ここからはあまりに遠く離れたそのビル以外に、銃弾の入射角に適合するビルが無いことは、昨夜の狙撃手の相当な腕前を物語っていた。

「あそこ………だね。他に無いから。」

淡々と上司が言う。

「本部のスナイパーさんにも意見聞きますか？　まあ、この殺し一つで所轄にまで来てくれるとは思えません。」

腕組みをした先輩刑事は、上層部を皮肉りつつ上司に聞いた。

「いや、大丈夫だ。放っておいても本部は来るよ。」

眉一つ上げずに言う上司に、先輩刑事は目を丸くした。

「弾丸に緋色の鳥の羽根のマークがプリントされてた。タイガー・リリーだよ。」

日没が早まるにつれ、練習メニューの内容も自然と変わって行く。部活に力を入れていない我が校に、夜間照明の存在など期待出来る筈もなく、日光頼りを余儀無くされる実践系統の練習は明るい内に済ませ、基礎・体力系統の練習は暗くなってからというものだ。

皆と一緒に軽いストレッチをこなすと、僕は10球程度の遠投だけで肩を温め、太陽に急かされてマウンドに上がった。途中、最近を持ち歩いているキャッチャーミットとピッチャー用グラブを間違えそうになった。そんな小さなハプニングはあったけれど。

皆もそれぞれの練習に忙しく散っている。仲嶋^{ナカジマ}さんと小泉^{コイズミ}さんはトスバツティングを、友利^{トモリ}くんはその二人に一人でトスを上げ、相^サ良^{ガラ}ちゃんと野江^{ノエ}くんは内野守備練習を、ノッカーは田村^{タムラ}くんがやっている。少し遠くでは、ステファンがピッチャー役となつて、原田^{ハラダ}くんがバント練習中だ。実践系統の練習中は、毎回最低1名は球拾いの役回りとなるのだが、今日は碓井^{ウスヰ}くんが志願してやってくれている。

る。

なんて良い部活なんだろう。僕は目を細める。みんな野球が好きで、こんな進学校でこんな真面目に取り組んでくれている部員のみんなを、僕は今一度誇らしく思った。

今日自分が選んだのは、コントロール練習だ。トムがランダムに指定する球種・コースに、僕がどれだけ正確に投げられるかを鍛えるのだ。中学校時代から続くこのトムと二人三脚の練習により、僕は一般の高校生投手の平均より、かなりコントロールが良い。

「いいよ。早速始めてくれ。」

右肩をグルンと回して、意識をトムのミットへ集中する。

「じゃあ、まずはこれで。」

座って折られた両膝の間から、右手の逆ピースが見えた。”2”

は、”スライダー”のサインだ。何のことはない。僕が覚えた順に、球種に番号を割り振っただけだ。

いつものフォームで左足を上げ、右腕をしならせる。ストレートの握りのまま、投げる瞬間だけ人差し指をボールから離す。ボールは、少し斜めに曲がってミットへ。ちよつとずれたけれど、初球にしちや上出来だ。

返ってきたボールをグローブで受け取ると右手に渡し、後ろに回したその手の中を転がす。指の感覚が4シームの握りを覚えている。トムの返球から、ボールの縫い目が僕の右手の指にかかるまで、いつも約3秒だ。

今度トムが出したサインは”1”で”ストレート”。握りを変え

る必要は無いけど、バッターを幻惑させる為に、右手をグローブの中に入れてから一定時間動かす。これは練習中も例外ではない。

パアアン

インコース高め ストライクゾーンの右斜め上の隅から更にボール2個分高いところに構えるトムの焦茶色のキャッチャーミットは、微動だにせず乾いた音を響かせる。今度は要求通りのコントロールが冴えた。

途端に、僕の”眼”が自ずと発動した。グラウンドの端から歩いて来る少年……否、青年に反応したらしい。制服でも野球のユニフォームでもなく、私服で立ってこちらを見ているのだから、”眼”の発動は必然的だった。美しくもあどけないその顔は、少し女性的で、ジャーニーズの未デビューグループを探し回れば必ず居そうな端正で甘いマスクだ。しかし、彼が放つオーラは近寄り難く冷たいものだ。

僕は意に介さない風を装って、返ってきたボールを右手で遊ばせる。トムはまだ彼に気付いていないようだし、こちらとしても限られた練習時間を割くことは惜しまれた。もっと言うと、もし用件があるならその内向こうからベクトルが向かって来るだろうと踏んだのだった。

ボールを軽く宙に投げ、投げたその手でキャッチする。それからトムのサインを待つ。今度は”3”が出た。この球が僕にとって一番厄介だ。落ちが良い時と悪い時があって、試合ではあまり使わな

い。ごく稀に、スライダーに対応してくる打者に出くわした時、的を絞らせないために投げるぐらいだ。後は、ツーストライクで追い込んだ時、遊び球としてワンバウンドさせる時ぐらいだ。もし振ってくれれば三振が取れるからだ。

トムは、ミットを逆さに出した。ミットの背の部分でホームベース手前の地面を叩く。まさしく、ワンバウンドさせる吊り球の要求だ。4シームの握りを変更し、登場機会の少ない薬指を呼び出す。人差し指と薬指でボールを挟む。ノーワインドアップからボールを投げるまでは決まった動作だ。人差し指と薬指の間から抜かれたボールは、ホームベースに当たってバウンドした。少し方向が変わったけど、僕のフォークのばらつきなんて折り込み済みのトムは、難なく受けて見せる。

僕とトムは同時に苦笑いをする。やっぱりこの球種は多くは使えない。そんな当たり前の事実を、二人で再確認したのだ。

パアアン！

アウトコース少し高め トムの構えた通りのところにストレートが吸い込まれた。

秋の日は釣瓶落とし。太陽の角度がもう低くなっている。かれこれ20分ぐらいは投げ込んだ。今のところ9割程度は思った箇所にコントロール出来ている。コントロール出来ない残りの1割は、ほとんどがフォークボールの投げ損ないだ。

トムがボールを僕に返してすぐ、例の青年が野球部の練習内に割

り込んだ。僕と、今回はトムも気付いた。重さも太さも違うバットを数本入れてあるケースの横に、真直ぐ歩いて行く。

こうなると話は別だ。他のみんなの練習に支障が出てはいけない。放置を決め込むことは出来なくなった。僕は、マウンドから降りて2・3歩彼の方向に進み、右手を口に沿えて彼に声をかけようとした。だが、先に声を出したのは彼の方だった。

「おい、お前ら。ここにあるバット借りるぞ。」

嫌味なくらいに低い声だ。どことなくわざとらしい低さでもある。自身の冷たい雰囲気にもマッチさせようと、無理矢理声を統制している節もある。

彼の声は、それまで彼の存在を認識していなかった野球部の面々さえ、事態の掌握へと促した。

彼は、何本かあるバットを取っ替え引っ換え持ち上げては、一度の素振りを繰り返した。

ようやく意中のバットに出会えたのか、少し軽めの黒のを一本取ると、左打席に入った。

「お前が大崎だろ。俺を抑えてみる、二流のエイズ。」

バットを縦回りに一度回して、彼は打席の中で構えて見せた。”眼”は、しなやかな動きと身のこなしを見て伝える。彼は本物だ、と。

見え透いた挑発だ。僕はこういうのを相手にしない。部員の皆も分かっている。ただ、瞬間湯沸かし器という形容がピッタリのトムは、僕が止める隙を与えずに私服の青年に食って掛かった。

「テメエ誰だよ。本気でシンから打てると思ってんなら、頭おかし
いぜ。精神科、紹介してやるうか？」

青年の黒のシャツの襟を掴んで、トムが言った。そのシャツに白
色で刻まれている英字の”S”と”Y”がグニヤツと曲がっている
のが見える。彼の声も低い、今のトムの声は彼以上に低い。アイ
ツが本気でキれる時にしかこの低い声は出ない。自分のことのように
に怒ってくれるトムを、僕はいつも面倒臭そうに制止しているけど、
そんなに嫌な気分じゃなかった。なんか照れ臭いから、アイツには
内緒にしている。

「精神科にはお前が行けよ単細胞。」

青年は静かに言葉を返した。知性も備えていそうだが、トムの激情
を目にしても、涼しい顔をしている。喚くでも怒鳴るでもない、最
初からずっと同じ低くて抑えの利いた声だ。

「トム、やめろ。」

右手でこめかみを押さえながら僕が仲裁に入る。面倒臭がる演技
だ。部員達は練習を中断し、固唾を飲んで見守っている。トムは、
力を緩めて手を下げる。

「やっと臆病者^{チキン}が喋ったよ。どうせ大人を気取って……俺との勝負
からも逃げるんだよな？」

最後の一瞬、彼の発揮した切れ味はどんな変化球よりも鋭かった。
彼の投げ掛けた言葉が、一つずつ僕の胸に突き刺さる。シリアスな
顔をして、僕は小学校時代に聞いた曲の一節を思い出す、というウ
ルトラCを成功させていた。確かに彼の言うように、僕は硝子の少
年だったのだ。かつては。

「トム……」

彼は本物だ。野球も、心も。僕のことも見抜いている。しかし彼は知らない。彼が見抜いている僕は、脱皮する前の蛹サナギの僕だ。まだ羽ばたいてはいないけれど、まだ蝶じゃないけれど、蛹の内部は既に変化しているのだ、ということ。

初対面の彼に、並々ならぬ思いを抱き、僕はトムに言った。
「構えろ！」

トムの少し戸惑った顔は、すぐに嬉しそうなもの変わった。宝探しで宝を見つけた少年みたいな顔のまま、大きな声がこだまする。
「みんなああ！ 守備につけええ！」
部員の皆が、グラブを取りに向かったり、慣れたポジションへ足を運んだりしている。

現金な奴だ。僕が挑発に乗るなんて思っていなかったらう。こういう勝負事が大好きなトムは、鼻息荒く張り切っている。わかっているとと思うけど、トム、投げるのは僕だよ。

青年の長い足には、七分丈のグレーのカーゴパンツがフィットしている。鍛えられた足が少しだけ覗いている所に、ダラリとぶら下げた黒の金属バットをコツコツと当てて、暇を持て余している。

大騒動には程遠かったが、校舎内から興味深そうに見つめる者や、私服の彼に送られて然るべき視線を送る女子生徒達が、少数ながら集まりだしていた。

やがて、皆が守備位置についた。彼は、黒紐を結んだ白いスニーカーで、左打席の砂を撫で回した。その後すぐ、右足は細かなステップを刻み始める。

まさか……振り子打法！？

僕は、僅かに自分の瞳孔が開くのを感じた。トムの被るキャッチャーマスクも、ちよつと動いた。

「サインは俺が出す。」

「ああ。」

試合中、トムがサインを出すことはほとんどない。僕が”眼”を使って配球する。トムもそれで気を悪くしない。

”眼”は、美少年を捉える。色は透明　初球は手を出して来ない。

左足を下げる。下げてから体勢を横向きに変えるまでの秒数がサインだ。1秒と5秒はストレートと決めている。1秒……体重移動を行ない、踏み込んだ左足に体重を乗せ、全身を使って右腕を振り下ろす。様子見では外角低目が定石だが、内角高目を狙う。手を出さないことは”眼”で分かっているし、相手にストレートの残像を見せておく方が後々の配球が楽だからだ。

白い糸を引いて、球はトムの左手へ。

「ストライク。」

トムが彼に言った。

「ああ。ワンストライクだ。」

彼は二の句で返す。指し詰め速球の球筋やキレなんかを見たのだろつ。

ボールを受け取り、僕が次の配球を考えている間、彼は下げたままのバットを左右させている。仕草の一つ一つが板に付いている。少なくとも数年は野球に携わっていると結論づけるのが自然だ。

今度の秒数は2。つまりスライダー。さっきと同じく狙いはインサイド。ボール2個分横に外し、空振りを誘う意図のこの2球目が肝だ。この球への反応で、彼の打撃センスがそこそこ伺える算段だ。

”眼”が教える彼の色は、少し黄色を帯び始める。さっきより集中力は高まっているが、まだ微細な程の変化だ。

僕がモーションに入ると、スツとトムが重心を打席の少年よりに傾ける。インコース低目めがけて、スライダーを放る。

彼の肩がピクリと反応した。さっき”眼”で見抜いたことの真相が明らかとなる。若干の集中力は、ストレートが続けば打とう、という意思の表れだったのだ。

引っ掛かった。

そんな僕の思いとは裏腹に、バッドの角度がちょっと下がって以降は、彼の体重移動は完全に止まった。彼は全く表情を崩すことなく、悠然と見送った。

「ボール。」

今度の判定は彼が下した。

「良いスライダーだけどね。」

トムがどこまで詳細な点を見抜いたかは分からないけど、アイツ特有の勘が働いたのか、今回は何も言わずにボールを返してきた。

彼の打撃センスは、かなり高いと断言出来る。

さて、次はどうするか。ストレートをボール半個外したところで、彼は合わせて来るだろう。思いきってカウントを取りに行くのは以ての外だ。痛打されるのが目に見えてる。かといってボールにはしたくない。ボール先行カウントにするのは、やっぱり好ましくない。2球内角を続けたから、出来れば外角を使いたい。

熟慮の末、決めた球種はスライダー。でも投げ方は変える。外角のボールゾーンから、ストライクゾーンいっぱいの中へ曲げる。

”眼”を通して見える黄色は、随分と濃くなった。ストレートとスライダーの両方に照準を合わせている。打者側からすれば、追い込まれたくない筈だ。例えどんなに打撃が巧くてもだ。悪いことに、彼はさつきから練習を見ていた。フォークの完成度も知っている。使い物になるストレートとスライダー。双方の球筋も、今の2球で見極めたのだから、彼は次で仕留めにかかる。絶対に。

僕はトムに2秒のサインを送り、投球動作に入る。打席の彼の目がギラつくのが分かる。両手首にも力が入っている。あくまで、目をよく凝らさないと識別出来ないレベルだけだ。”眼”は微細な点も感覚的に察知する。周辺視システムに通ずるところが”眼”にはあるのだ。

放たれた白球は、外角やや高めを外れて行く。打者からは、今まさにそのように見えている。

彼は、目に点っていた光を消した。ボールだ、と判断した証拠だ。だが、結果的に言わせてもらつと、余りに短絡的な判断だ。

ボールが向きを変える。外れて行っていた筈のボールは、スライドしてストライクゾーンに入ってくる。

涼しい彼の顔に、始めて焦りの色が映った。バットスイングを再始動させようと試みるが、彼はすぐに諦めて見送った。元々ストリートとの球速差は約10km/hのスライダーだ。一度ためらって打ち直せる程まで遅くはない。間に合わない。

「はい、ツーストライク。」

トムの声に活気が戻る。

「今のはやられたよ。相手の裏ばっかつく配球と、コントロールで勝負するのは、臆病者にお似合いだと思っぜ。」

今まで通りに僕を挑発する言葉だが、声が少し高くなった。低く制御しきれていない。少し悔しがっているようにも、本気でこの勝負を楽しみ出したようにも聞こえる。

「後がないのは君だよ。」

返事の代わりに、僕は逆に挑発する。僕も何だか楽しくなってきた。素性の知れないこの青年を、打ち取ろうと意気込んで始めた勝負だったが、全力でやって打たれても良いような気さえし始めている。

配球は仕上げの段階だ。さっきスライダーが曲がった地点に、速度をわざと落としたストレートを投げる。これで決めるつもりだ。

僕は左足を引いてから5秒タメを作り、トムにストレートだと知らせてから、体を捻って左足を上げて踏み込んだ。沈ませた腰と下半身から力を伝導させ、右腕を振るう。

カ八分で投げたストレートは、スライダーと同じ130km/h前後だろう。

青年はカツと目を見開き、打ちに出る。黄色が一段と濃くなる。まずはスライダーかストレートなので迷う。軌道がストレートだと分かると、今度は別の迷いが生じる。ストレートにしては遅いボールが来ないからだ。この状態では満足なスイングが出来ない。ここまでの彼は、僕のシナリオ通りに動いている。だが、次の段階で計算違いが訪れた。

僕は、彼が取り敢えずバットに当てて、カットしようと思っていた。追い込まれているので、打ち取られないようにする最善策がファールで逃げることなのだ。カットしようとした鈍い振りでは、速度を殺したとはいえキレのあるストレートには当たらない。これで僕が勝つと思っていた。

目論見は外れた。彼は左手首を意図的に返して、一時的にヘッドスピードを上げて、鈍くなったスイングの欠点を補うという離れ業をやったのけ、そのまま払うようにして打った。打った、というより、ボールをバットに乗せた。

カキン

ほとんど芯に当たった打球は、レフト方向に上がった。フェアかファールか微妙だ。

「小泉くん！」

僕に叫ばれるまでもなく、レフトを守る小泉くんは猛ダッシュしている。懸命の守備も落地点には届かず、いっばいっばい差し出

したグローブの数メートル先に、砂埃を舞わせてボールは落ちた。

ボールが落ちたのは、白いラインのギリギリ左側だ。良かった。ファールだ。

「ファールだね。」

僕の声は浮かれてる。ファールで安心したんじゃない。こんな刺激的な対戦相手は、味方のトム以外で初めてだった。

「お前、面白いピッチングするんだな。」

僕が対決している彼の方も、たった4球のやりとりで変わっていた。小馬鹿にするような挑発は消え、純粋な勝負への好奇心を口に出している。

僕は決めた。今までの投球では彼に勝てない。あれを投げようと。

5球目、投球動作で僕が作った感覚は4秒。3秒のフォークでも、5秒のストレートでもない4番目に覚えた球。

ロジンの煙を散らして僕の右手を離れたボールは、暴投と見間違える高さにフワリと舞い上がって、直後にうねって内角低目いっばいに沈み込んだ。

「ストライ……」

トムの台詞を、僕は途中でかつさらった。

「ストライク！ バッターアウト！」

声を張り上げ、無邪気で楽しそうな僕は、トムの目にも映っている。無論、彼の目にも。

集まってきた野次馬達から、パラパラとまばらな拍手を受け

る。当の本人達は、宝物を見つけた確信と興奮で喜びに満ちていて、拍手なんか気にならない。

「俺は、岩見イワミ佑介ユウスケだ。転校手続きのついでに来てた。」
マウンドから歩み寄った僕に、彼は右手を差し出した。

「こんなに手強い打者は、アイツ以外で初めてだよ。」
”アイツ”の時に、マスクを取ったばかりのトムを親指で示す。差し出された右手を取って、ガツチリと握手する。

「右投両打、ポジションは外野手だ。明日から野球部の世話になる。」
岩見くんは、さっき僕との対決を楽しんでいた時に比べると、どこか機械的な声質で自分を紹介したが、声の変化など僕らにはどうでもよかった。

「イチロータイプの転校生が来たあああ！」
お互いの顔を見合わせるや否や、僕とトムは雄叫びをあげた。何だか楽しそうなムードを感じて、他の部員もみな僕ら3人のところに集まる。天高く馬肥ゆる秋　石滑高校野球部の戦力は整った。

hideaway

「男の名は、迎省吾。ムカシヨウウ桜田署が2年間ずっと追っていた男で、逮捕した瞬間に狙撃されたようです。」

丸い大きな磁石で、昨日撃たれた男の顔写真がホワイトボードに貼られている。

報告を受けた斉藤の表情は、ますます険しくなっていく。

「罪深き者に制裁を。色欲へ溺れし者に弾丸を。」

斉藤は、迎が狙撃される1時間前に本部に送られて来た、タイガー・リリーの犯行予告の一部を参照した。右手には、証拠品の緋色の鳥の羽根のマーク付きの弾丸が握られている。

「また……予告通りでしたね。」

刑事の一団の中から、誰のものか分からない言葉が、小さな音量で漏れ出た。

「山本さん、テロの方の聞き込み……あの場にいた高校生からは何か分かりましたか？」

場の沈む一方の空気をかき消して、斉藤は尋ねる。公私混同を極力避けたい彼らしく、シンを名前で呼びはしなかった。

「大崎くんは、他の方の証言通り、福原が荷物を運ぶのを手伝ってあげていたようです。」

「そうですね。彼が無関係なら良かった。」

ほんの一瞬だけ微笑んだ斉藤を見て、山本の横の工藤は、少し暗い顔をした。

「伝言、預かってますよ。シンくんから。」

山本は、これを言う機会は今しかないと思い、やや早口で言った。

「……伝言？」

怪訝そうに問う。斉藤が知っているシンは、そんなことをするイメージがない。

「僕の登場を待っていて下さい」だそうです。

それでも伝言の内容を聞いて、斉藤は考えを変えた。シンが動き出したんだ。”登場”の意味は分からないけど、恐らく自分が分かる形で表舞台に出て来る。

捜査員一同の視線が自分に集まっていることに気付き、斉藤は組んでいた足を解いてスーツの上着の襟を擦り、姿勢を正した。

コホン……

一つ咳払いをして、自分の感情と場の空気の二つ共を立て直す。

「ちよつと知っている子だね。立派になって、嬉しい限りです。」

斉藤とこの一般高校生がいかにして結び付いたかは、この中では斉藤本人しか知らない。

「狙撃の件に戻りますが……」

斉藤は捜査の話へと風向きを変えた。

「藤平警部の紹介で、今日からあちらの方に来て貰っています。」

差し出された手は、入口付近に佇む一人の女性刑事に注意を払わせた。黒に近い濃い茶色の髪は、肩より少し長いぐらいの長さで、

不規則にウェーブがかけられている。男ばかりの現場に現れた彼女は、男性捜査員の目を引くには十分な美しさだった。見惚れた若い刑事に、隣の刑事のゲンコツが飛ぶ。

「藤平フジヒラ 未結ミキユです。現在の所属は、特殊機動隊です。」
敬礼の際、アシメにして目元を隠していた前髪が垂れて揺れた。

捜査員達はざわついた。本来は、女性で機動隊員ということに食いつくべきなのだが、誰もが驚いたのは、聞き覚えのある彼女の名字の方だった。

「……私の娘だ。」
事態を推察した藤平が照れながら言うと、何人かは憚らずに驚いた。飛び上がっている者もいる。

「え！ 娘？」

「こんな美人が？ どう見ても似てないでしょ。本当に親子？」
口々に驚きを言い表す捜査員達を、斉藤が両手を使ってなだめた。未結は、あからさまな嫌悪感示していないが、居心地が悪そうに顔を背けた。この話題は、彼女が触れて欲しくない物なのだ。

「彼女は、機動隊の中でも5本の指に入るスナイパーで、迎殺しの件で意見を頂こうと思ってね。」

斉藤の説明で、彼女への好奇心は幾分か減ったように感じられる。「桜田署の刑事が割り出した狙撃ポイントは……」

場が暗転し、天井からスクリーンが降りて来る。そこに、事件現場付近の地図が映し出される。

「ここですね。このビル……港第四ビル。」
万年筆で、スクリーン上の一点を叩く斉藤に注目が行く。未結も、

背けていた顔の向きを直し、その一点を見る。

「未結さん、どうですか？」

斉藤の問いかけにより、再び未結の方に視点が集まる。暗さに助けられ、未結は今度は顔を背けずに済んだ。

「可能です。」

額の右の前髪を払いながら、強く断言する。

「もちろん、難しい狙撃だということは否定しません。」

まだ確信に至っていない数名への配慮なのか、未結の声は女性的で穏やかなものに変わった。この方が、場の圧倒的多数を占める男性陣には効果があるだろう。

「私を含めて、機動隊員で同じ距離から狙撃出来るのは2名しかいませんが……。」

警察内でさえ、たった2名しか実行出来ない狙撃。それを可能にする人材が、タイガー・リリーには居る。捜査員達が、各自の立场上認めたくない事実を、未結は口にするしかなかった。

「……可能です。現実に、起きたのです。」

「お前が最近キャッチャーミット持ち歩いてたのって……こーゆーことかよ。」

トムがそう言いながら見つめるのは、地方球場のバックスクリーンだ。秋期大会1回戦、投手のポジションを意味する”1”のランプは、僕の名前ではなくステファンの名前の上に点灯している。”大崎”の上には、セカンドを表す”4”が点灯している。

「おい、俺らに説明無しか？」

トムが怒った時の声のトーンだ。みんなも、納得がいかない様子で僕を見ている。本当は皆を混乱させずに試合に入れるように、言わないでおこうと思っただけ、そうはいかないみたいだ。

「学校側は、この試合で野球部を終わらせたいんだよ。」

僕は覚悟を決めて話し始めた。

「秋期大会出場の条件は、僕がマウンドに上がらないこと。学校からそう言われた。」

それを聞いて、トムがますます怒った。握り拳がワナワナと震えている。矛先は、僕から学校へと変わっている。

「で、僕は考えた。出場してしかも勝つ方法を。」

そこで、僕はステファンを自分の傍らに呼ぶ。

「ステファンは元々重量挙げをやったから、良い球投げるんじゃないかってね。球速なら、僕も負けるよ。」

僕は不敵に笑って見せた。

「オーダー、あれで良かったよね？」

頃合いを見計らっていた小野先生が聞く。

「はい。我儘を聞いて頂いてありがとうございます。」

先生は、僕が書いた紙通りのオーダーを提出してくれた。

- 1番・センター・岩見
- 2番・ショート・原田
- 3番・サード・仲嶋
- 4番・キャッチャー・杉原
- 5番・レフト・小泉
- 6番・セカンド・大崎
- 7番・ファースト・野江
- 8番・ピッチャー・ステファン
- 9番・ライト・田村

「ごめん、でもいつでも代走で出る準備しといて！」

僕は、いつもならショートの守備につく相良くんに謝る。彼はチーム1の駿足だ。僕がセカンドに入ったから、セカンドの原田くんがショートに回って、相良くんはベンチスタートになった。

「分かった。いつでも呼んで。」

細長い目を更に細め、笑顔で答えた相良くんは、屈伸を始めた。

「トム……」

皆の気持ちが集まりかけた所で、僕はトムの方を見て言う。

「手、ヒビ入るかもよ。」

ステファンがグルングルンと腕を回すのと僕のウイंकを見て、トムも俄然やる気になったらしい。

これぞまさしく隠し玉。僕という投手を奪えさえすれば、勝ちはしないだろうという学校の見方は間違っではない。ただ、僕は彼を温存していたのだ。

「今日からこのクラスで一緒になる、留学生のラボク・ステファンくんだ。」

満開だった桜が葉桜になった頃、褐色の肌の彼はやって来た。

石滑高校では、1年に多くて3名までの成績上位者を交換留学させる制度がある。アメリカには姉妹校の聖・ゴノアス^{セント}高校があり、我が校から排出された生徒の人数分、向こうからも生徒がやって来る。

僕はこの制度の取り決まった経緯も、如何にして姉妹校を選出したのかも知らない。だが、明らかな判断の誤りが一つ存在した。一言で言うと、教育の差である。姉妹校のゴノアスは、向こうで量ると並レベルの偏差値で、石滑に来る生徒の質もそれ相応らしく、迎え入れたは良いものの、後は帰国するまで事実上放置するのだ。

彼もまた、同じ撤を踏むかに思われていた。実際、率先して話しかけようとする者はおらず、教科書のページ数を教えるとか、体育

でペアになった時に口を開くとか、食堂で学食の買い方を教えるとか、そんな必要最低限の会話しか彼には展開されていなかった。

僕は疑問だった。彼が何をした？ 彼が何故こんな生活を強いられる？

牧師の慈悲の心など微塵もなかったけど、僕はせめて他の生徒と同じ接し方を心掛けることにした。朝の教室で挨拶をする。生物の教師の頭の禿げ方が面白いと言う。今日はお昼に何を食べたか聞く。そんな感じだ。僕が話し掛ければ、彼は戸惑いながらも答えてくれた。僕とよく話す女の子達も、彼と関わる場面も増えて行った。

” Why do you sleep every day? ”

「何故君は毎日寝てるの？」

そんな変化が見られ出した頃、初めて彼の方から僕に話し掛けて来た。紫陽花アジサイの葉カタンムリに蝸牛が見受けられる頃の話だ。

それを切っ掛けに、僕は彼に色んな話をした。この高校がどんな所なのか。どこでバイトをしているか。野球の練習が意外と疲れることや、トムが女たらしだということも。そして、クラスの皆には悪気がないことを説明して謝罪した。すると彼は、謝らなくてもいいけれど、一つ頼み事があると言った。

向こうで重量挙げをしていて、鍛える習慣がなくなって落ち着かない。野球部の筋トレマシンを貸してくれという頼みだった。僕はすぐOKした。彼の嬉しそうな顔を見て、なぜだか僕も嬉しくなったのをよく覚えている。

次の日から、野球部の練習に彼も顔を見せるようになった。時々、梅雨のジメジメした湿気を感じ始めた頃、僕ら野球部はステファン

と親交を深め始めた。

夏休み前の期末テストが近付いたある日、彼が野球をやりたいたいと言ってきた。練習を見ている内に楽しそうに思えたらしかった。それで、チームで唯一の左利きの野江さんに頼んで、家にある今は使っていないグローブを持ってきてもらった。

キャッチボール、ノック、フリーバッティングを一通り体験した彼は、とても上手とは言えなかったけど、満足気だった。キャッチボールの相手だった僕は、すぐに彼の球の重さに驚かされた。

僕の中で、投手ステファンの誕生が見えた瞬間だった。隠し場所は、控え野手。僕ら野球部のとっておきだ。

「……本当に良かったんですか？」

まだ怯えているような印象を受ける小野先生に近寄る。彼の身の

上からすると、けっこうな大事だ。先生は、対戦相手の先発投手の投球練習をじつと見ている。さつきからずっと。その視線は、ピッチャーではなくその向こう側の何かを捉えている。

「まだ、わかんないよ。でも……後悔はしてない。」

腕組みしているその姿は、まさに高校野球の監督そのものだが、手と足は怖くて震えている。

「……震えてるじゃないですか。」

言おうかやめようか迷ったが、放っておけなくて指摘する。

「やっぱり……」

やっぱり僕一人が学校側に反抗して、オーダーも僕が勝手に審判団に出したことにしようか。そう思った時、先生が力強い声を振り絞った。

「武者震いだよ！ さあ……勝つぞ！ お前ら絶対に勝てよ！」

こんな先生がいるなら、日本の学校教育も案外捨てたもんじゃない。かなり本気でそう思った。そこまで見直した先生には申し訳ないけれど、僕らは無理して強がっている先生が不自然で可笑しくて、一斉に噴き出してしまった。

「先生……」

学校の教師に、心からこの言葉を言うなんて、入学したての僕は夢にも思っていなかった。

「ありがとうございます。」

僕に続いて、何人かも礼を言う。先生は、ちよつとだけ笑って手を挙げた。

場内アナウンスが、試合の始まりを飾る。

” 1 回表 石滑高校の攻撃は 1 番 センター 岩見くん ”

アンパイアの右手が上がり、試合開始が宣告される。地方球場独特の、潰れかけみたいなサイレンの音が鳴る。左打席の岩見くんが、振り子打法のステップを踏み始める。

「さて、ウチの天才転校生のデビューだぜ。」

黒のバツティンググローブをはめながら、トムが僕を小突く。

「ああ。」

多分あいつの実力なら長打で出る。二塁打なら、次の原田くんにバントで送ってもらって、仲嶋くんの打席はどうしようか。トムへの返事もそこそこに、そんな計算をしていた僕は、良い意味で見事に裏切られた。

カキーン！

澄み切った打球音を残し、プレイボール直後の真ん中高めの甘いストレートを強振した岩見くんは、初回先頭打者ホームランという鮮烈なデビューをやったのけた。白球は、バックスクリーン右横の芝生に落ちた。

「おい、あんな子いたか？」

「杉原は敬遠するよう言つといたのに……」

「早く向こうに教えろ。岩見とかいう子も敬遠だよ。」

「身振り手振りでも良いし、サインでも良いからとにかく急げ！」
白髪交じりの教師や、バーコードにボマードを塗りたくった教師にネックレス様式で丸眼鏡を首からぶら下げている女教師……石滑高校の教師達が、計算違いに慌てふためく様子を、同じバツクネットの上段から見ている緋色の二人組がいた。

「大変そうね。」

同情の欠片も感じられない冷たい声で、ストレートパーマの黒髪の女性が言った。右手には携帯電話が握られている。

「たく……いつにも増して感情こもってないよね」

そういう男の声も感情がこもってないのは、黒髪の女性をある程度理解しているからこそその現象である。明るい茶色の髪を、右手でスタイリングし直している。この男も、ただ任務で来ているだけで、

目の前の状況には何の興味も無い。

「あのキャッチャーの子は敬遠するように先生達が言ってるし、さっきの転校生も次から敬遠でしょ……石滑勝てんの？」

女性は、野球の知識はあるようだ。それが今回の任務の担当に選ばれた理由らしい。

「青って野球分かるんだ。意外だね。」

とても意外そうには思っていない物言いだ。スタイリングはまだ続いている。動かしている手が、右手から左手に変わってはいるが、襟足の毛束が整い、立体感が出た。

「龍は男なのに野球あんまりわかんないよね？」

コードネーム”青”の女性が、コードネーム”龍”の男性に質問する。龍はようやく髪をいじるのをやめ、目だけで石滑教師陣の動きを追いながら答える。

「おれはサッカー派さ。わかんないってわけじゃねえ。」

どうにかこうにか、岩見を次の打席から敬遠するように伝えられたらしく、さっきまで総立ちだった教師陣が腰を降ろすのを見て、龍は鼻で笑った。

「点はこの１点で十分……石滑が勝つよ。」

「なんで？」

肩にかかる長さの黒髪が揺れる。初めて感情を伴った声を出して、龍の方を向く。

「あの留学生は打てない……らしいよ。」

不自然な間があつて、龍は伝聞の事実をほのめかした。しかし青は問い正しはしなかった。

「おかえり。」

ダイヤモンドを一周して帰って来た岩見くんを、僕はこう言っ
て出迎えた。初めて見掛けた時もそう……あの勝負の時もそう……彼
からは、何者も寄せつけない雰囲気常在に発せられている。しかし、
僕が”眼”で見ている色は”紺”で、その色は本人の苦悩がああ
の雰囲気を作り出していることを教えてくれた。色が薄まったり濃
くなったり定まらないのは、彼自身の葛藤による振幅で、本当は
皆と仲良く話したりしたいのだからうけど、何か岩見くん本人の独力
で打開するのが困難な状況が関わっているらしかった。

共に戦うメンバーとして、少しずつでも彼の心に近寄ってあげた
い。出来る範囲で良い。彼が入部してからずっと、そう思っていた。
だから、ナイスバツティングだなんて有り触れた言葉で迎えはしな
い。

「……ただ……ただいま。」

ちよつと面食らった後、彼はたどたどしく返事をして、出していた僕の右手にハイタッチをした。

「ユースケ！」

トムが気さくに話しかけた。野球部の中で、岩見くんを下の名前で呼んだのは、たった今のトムの発言が初めてだ。彼の両肩がピクリと動く。

「……流石だな。」

改めて岩見くんのセンスを目の当たりにして、改めて感心したのか、トムは真面目な顔で彼の肩を叩いた。

「…………くれ。」

視線を下げたまま、蚊の鳴くような頼りない声で、岩見くんはボソリと呟いた。最後の方が辛うじて聞き取れた。

「なんてった？」

あっけらかんとした感じで、トムは聞き返す。

「……やめてくれ！」

ベンチの皆は、あまりの声の大きさと拒絶反応にビクツとした。空気が凍り付く。当たって砕け散るタイプのトムも、今回に限っては堪えたっばい。

「下の名前……呼ぶ……」

岩見くんの声はどんどん失速し、消え入るようにフェードアウトしていった。

僕は、さつきから”眼”のスイッチを入れていたから、彼が強い声を出した後ほんの一瞬見せた寂しそうな顔を見逃しはしなかった。彼は今また苦しんでいる。こんな反応をするつもりもなかったのだ。

ろつ。僕は、精神的ダメージから驚異的な速さで立ち直ったトムに目配せをした。

「あー……とりま、ゴメン。」

トムの人間的な魅力はここにある。素直な彼は、自分の感情が害されたことぐらい気にも留めない。それよりなにより、どんな奴とも仲良くなるうとする。後先考えないという欠点は……まあご愛敬ということだ。

「下の名前NGなやついるよなあ……前の彼女もそーだわ。」

何故か女の話が例として出て来るあたりも、トムらしくて面白い。凍り付いていた何人かの部員も、表情を取り戻している。岩見くんは、意外な顔をしてトムを見た。

「じゃあ、ユウで良いだろ？ ユウくんもありだけど……なんか幼く聞こえるしな。」

「……………おう。」

恥ずかしそうに、小さい声の岩見くんは少しはにかんでいる。少し迷ったみたいだけど、この素の表情が、真の岩見くんなのかもしれない。

そんなやりとりの中、2番の原田くんは5球目を打ってセカンドフライ。3番の仲嶋くんが打席に向かっている。

「あんなの見せられたら、俺も狙いたくなるじゃん。」

トムはネクストバッターズサークルに入って、金属バット2本を同時に振る。打つ気満々のスイング音が、僕にも聞こえた。

「多分、お前は敬遠される。俺も次からは敬遠だな。」

素の岩見くんは消えて、冷静で近寄り難い感じに戻った。

「ユウ、どうしてそう思うの？」

でも、僕は気にしないことにした。彼が素の時もそうじゃない時も、構えずに接しよう。トムに見做って。”ユウ”と呼ぶ時、不自然にならないように注意した神経質な自分が可笑しい。

「バックネットに先生達が来てるけど、向こうのピッチャーに何か伝えてるしね。」

ウチの教員達も、墜ちるところまで墜ちたな。そこまでしてるなんて、ドン引きだ。

「負けて欲しいのに、応援で来てるわけないよね。」

ユウの指摘は的を得ている。なるほどトムにはホームランを打たせないようにするなら敬遠が良策だろう。だけど、転校生のユウのことは計算違いだったんだろう。

仲嶋くんが良い当たりのショートライナーで倒れた後、トムは案の定敬遠で歩かされた。次の小泉くんがサードゴロで、初回の攻撃は終わった。これ以降、ユウとトムは敬遠してくると考えてまず間違いない。追加点はほぼ望めないだろう。何か打つ手を考えよう。

「なんかやんない限り……もう点は取れないな。」
龍は、組んでいた足を組み替え、一つ下段の規格物の座席に足を置いた。

「お行儀が悪いでちゅよ。」
母親が幼い我が子を諭すように、青が注意する。それでもやはり、その声に感情はない。

「やめい。そーゆー趣味はねえよ。」
ふてくされ気味に顔を背けた先には、期待の表情がありありと伺える教師達がいる。

「あらら。期待しちゃって。」
「ねえ。」
青が、龍の左肩を一度軽く叩いた。

「さつきも言ったけど、留学生なら心配ねえよ。あの球は、こんなレベルの高校の野球部にや打てねえよ。」
青の呼び掛けに、龍は決め付けの答えを返す。

「違うよ。」
静かに、音量をわざと落として青は否定する。
「私が気になるのは、留学生もこっち側の仕込みなのかってこと。」
声を殺した理由は、問い掛けの内容が組織の指示に関することだ

ったからなのだ。

「いんや。留学生は無関係。大崎って子が短期間で投手に育てた。それだけさ。」

龍は、今回の任務を担当する前に、石滑野球部のある程度の情報をもらっている。その中には、大崎と留学生ラボク・ステファンの関係性についても触れられてあった。

「リーダーは、なんであんな高校生の子一人に執着するんだろ。」
青の目線の先には、セカンドの守備位置でボールを捕球する大崎がいる。

「わざわざ無事試合に勝つかを確認するなんて任務まで……」
青の台詞は途中までだったが、龍はなんとなく彼女の言いたい内容を感じとった。

「^{イッカタ}五法全部習得する可能性があるんだ。組織に有用な人材だから、監視してる。それ以上でもそれ以下でもねえだろ。」

龍は、彼女の気持ちも分からないでもない。だから自分が聞いた情報を基に、彼女に正論を返した。自身も彼女と同じように抱いている不信任は、ひた隠しのままにして。

投球練習を終えたステファンは、一度僕のほうを見た。僕は声は出さず、黙って頷いて返した。相手校の一番打者が右打席に入る。さっきのユウの指摘を思い起こし、バックネット方向の確認をする。と、見慣れた顔がやっぱり並んでいる。

ステファンが振りかぶった。長い脚をいっぱいいっぱい振り上げるダイナミックなフォームは、元々威力の高い直球の球の速さを更に上げる。太い腕がしなつて、ステファンの一球目が投げられる。右打者の懐を抉るクロスファイヤーが、ゴオツと音を立ててキャッチャーミットにおさまる。

ズドーン！

いつも僕が聞いている捕球音より重々しく、トムのキャッチャーミットが鳴いた。球速表示が146km/hを表示し、球場がざわつく。もはやあたふたする余裕さえ失った教師達の様子を見て、僕はほくそ笑んだ。

消しゴム

コツコツコツ……

ハイヒールの音は、整備された街道の上でよく響く。規則的に並んだ木々も、何かをモチーフにして置かれているオブジェも、欧米化した日本の表れだ。

百合は、午後のまばらな人並みの中、目当ての庁舎にやって来た。そのビルを見上げ、意を決して一つ息を吐き、正面玄関へと進み出る。しかし、速度は実に遅い。躊躇していることが、傍から見れば丸分かりな速さで両足は進んでいる。

「何やってんだろ……私。」

足を一旦止めて、目の前のガラスに映る彼女自身を嘲笑う。両足の重心が、後ろ側へと伸ばされる。しかし、引き返すには少し難のある距離まで、彼女は既に進んでしまっていた。

「……失礼ですが……」

これぞガードマン。そんな制服を着込んだ二人組のうち、前に出ている方の年長の男性が百合に話し掛ける。彼らの職務からして当然の対応だ。

「あの……この方に会いに！」

怪しまれたくもないし、何をしたわけでもなく怖い。そんな気持ちで百合を駆り立てた。咄嗟に一枚の名刺を取り出して、目の前のガードマンに見せる。

「これは失礼しました。どうぞ。」

二人組の雰囲気は一気に歓迎色になり、開けてくれた道を百合は進むことが出来るようになった。声を掛けた方じゃない男性が、無線機に何かを語りかけている。不審者じゃなかったという報告でもしているのか。

「すみません。ありがとうございます。」

会釈しながら、正面玄関を通り抜ける時、百合は自分にしか聞こえない声で独り言を呟いた。

「入っちゃったよ……」

残念そうな台詞を呟いたが、両足の歩みはさっきより力強さを増して、どんどん速くなっている。彼女自身気づいているのかいないのかはわからないが、心の奥は正直で、本人が望んで此処にやって来た事実が見え隠れしている。

玄関を抜けて少し進んだところで、百合は、受付をやっているらしい愛想の良い女性が、笑顔でやって来るのが見えた。

「斉藤警視！」

藤平と談笑していた斉藤は、捜査本部で雑務を手伝ってくれている婦警に呼ばれた。やけに楽しそうな感じで、両手を口に添えて自分を呼んでいる。

「はい。」

何だろう。婦警の様子からして捜査関係の用事では無さそうだし、斉藤は不思議に思っただけで返事をした。

「1階にお客様が見えてるそうですよ。」

やはり捜査とは無関係の用件だったが、自分に来客だなんて心当たりがない。数年日本を離れていた身で、大学時代の知り合いの日方との再会ですら奇跡的に感じたのだから。

「あんな人がいるんなら言ってもらわないと。」

まだ若いその婦警は、茶目っ気混じりにこう言った。学生時分に級友に恋人が出来たことをはやし立てる役が、同じクラスに少なくとも一人はいたものだが、そういう子がするのと同じ種類の口ぶりだ。

「私の同僚も、何人か警視にゾッコンなんですからね。ずるい人。」

そんなこと言われたって……どうしろと言うのだ。この婦警はいつも薬指に指輪が光っているし、毎週水曜日の夕方にはメイクに気合いが入るから、決まった人がいて、本気で怒ってはいないだろうが……ああ、女って生き物は面倒臭い。まだブツブツと咎める婦警を何とか手で制し、その場を離れかけた斉藤だったが、今度は別の刺客から攻撃を受ける。

「美人だっか？」

藤平が面白半分には婦警に問う。定年前の歳を疑いたくなるような少年の目が、斉藤と婦警に向けられる。折りたたまれたスポーツ新聞よりも、遥かに面白そうな匂いを嗅ぎつけて、藤平は身を乗り出して片肘を長机についた。

「とつても！」

婦警は、待つてましたとばかりに即答した。その後すぐ、藤平と婦警の快くない目線がたった一人に集中的に注がれる。

「そんな人、今の僕にはいませんよ。」

斉藤は、強めに否定して逆に怪しまれる場合を懸念して、ソフトな言い回しを選んだ。女性が詮索好きなのは覚悟してはいたが、こういう話題になると藤平も敵側に回ることを知って頭を抱える。

「あれ以来……浮いた話無いもんな。」

藤平は、大学時代の斉藤の恋人を思い出しながら呟いた。期待した話の流れにはならないだろうと踏んで、折りたたんだ新聞を広げて読み始める。

「じゃあ……誰なんですか？ あんな綺麗な人、ただのお友達だなんて言うのは無しですよ。」

藤平警部の援護射撃はもはや望めなくなって、婦警は咎めるような話し方から普段の話し方へとシフトチェンジした。

本当に誰だろう。婦警に言われて、頭を目一杯動かしてみても、藤平は一つの可能性に辿り着く。

「……あ！」

地下鉄の一件で進と再会した時に記憶は巻き戻される。斉藤は、

水原百合という女性に名刺を渡したことで、会いに来てくれない構わない旨を伝えたことを思い出した。

「私のじゃなくて、友人の恋人ですよ。」

注がれる2つの視線の送り主にそう言い残し、斉藤は会議室を出てエレベーターへ向かった。

「ほーらほーらどうすんだよセンコウ達。」

強烈に野次ってはいるが、事態がどう転ぼうがお構いなしの龍は、暇つぶしにニンテンドーDSをたしなんでいる。石滑高校の教師陣の焦燥感をよそに、留学生ステファンの快投は続き、とうとう6回まで来てしまった。ヒットはおるか、ランナーすら出ないし、バットに当てるので精一杯の相手校の攻撃を目の当たりにし、彼等は青ざめてさえいる。

「本当に1点で十分だったわね。スミイチね。」

青は、試合の途中経過を本部に送信し終え、折り畳み式の携帯電話

話を閉めた。その後、また一人空振り三振で倒れ、6回裏もツアアウトとなった。ステファンの球にバットが当たったのだから、内野ゴロ4つと内野フライ1つだけで、後は見送り三振か空振り三振という状況を見る限り、試合は未だ中盤にして結末は決まったも同然と言える。

「にしても、石滑も打つ手が無さそうね。」

初回の岩見の先頭打者ホームラン以降、得点は生まれていない。時折単打は出るが、岩見と杉原は徹底的に敬遠されてしまう。しかもさっきの回にいたっては、2打席連続ヒットの大崎も敬遠された。三人以外の打者は、直球は捉えてはいるが、スライダーには苦労しているらしかった。

「このままいけば、別に追加点は要らねえし、良いんじゃないね。」

タッチペンを忙しく動かしながら、龍は意見した。4回表ぐらいまでは、ヒットが出ると試合を見つめたりもしていたが、とうとう一切の興味も持たなくなったらしい。

ガギン……

久し振りに当たった打球は、鈍い音通りにフラフラと力無く上がり、キャッチャーフライとなって6回裏が終了した。ベンチに戻るステファンに、石滑ナインが声を掛ける様子は、良い絵になりそうだ。

午後の日差しが、床のタイルの模様と相俟ってモノクロのコントラストを成している。そこを踏みしめて、斉藤は受付の女性に案内された先へと向かった。REGALの紐革靴が、高い音を出す。

見た瞬間、ため息が出てしまいそうな美女がそこに座っていた。斉藤は、やはり彼女だったかと思い、身に覚えのない来訪ではなかったことに胸をなで下ろした。頭の中が切り替わり、今度は失礼があつてはいけないという意識が働き、自分の身なりのそこかしこを確認して呼吸を整える。

「お待たせしました。こんにちは。」

座っている彼女の目線に合わせて、少し体を屈めて挨拶する。

「斉藤です。」

「あ……と……」

まだ心の整理がつかないままの百合は、スムーズに挨拶の言葉が

出て来ず、慌てて席を立ち、髪を手ぐしでといてからゆっくりとお辞儀した。

「水原です……突然すいません。」

「事件以来ですね。私服もちろん……そういう服を着ていてもお綺麗だ。」

齒の浮くような台詞を自然に使いこなし、斉藤は動揺している百合を落ち着かせて行く。斉藤は、右手で今日の百合のフォーマルな服装を指摘した。突然訪ねたことも、奇妙な言動も、自分は全く気にかけていない。それを相手に知らせる効果を計上しての所作だ。

「どうぞ。」

そして着席を促す。百合はまた一度お辞儀をして、それに応じた百合が座るのを見た後で、やや遅れて斉藤も座った。隣の座席ではなく、一つ空けて座ったのは、この場にはない進を思っていたことだ。「進くんのことですか？」

自分を訪ねる理由はこれしかない。斉藤は、百合の方からは切り出しにくそうにしていると感じ、自ら尋ねた。百合は、小さく首を縦に振った。

「いやあ……私もあの日はびっくりしましたよ、ホント。」

まだ彼女の緊張は解けていない。斉藤は、わざとひょうきんな物言いをした。普段は絶対に使わない芸当だ。

「こんな綺麗な人が進の横に居たんだもんなあ……まいったまいった。」

「斉藤さんは、女性を褒めるのがお上手ですね。」

やっとのことで自分を取り戻した感のある百合は、いつもの清楚で品のある笑みを含んだ。

「知ってます？ 男の人って、一日に五分綺麗な女性を見るだけで寿命が伸びるんですよ。私も、今日少し伸ばしてもらいました。」

「冗談っぽい語り口と笑顔は、百合の緊張をほとんど解いてしまっ
た。」

「進の寿命はとてつもなく長いんでしょうね。」

「じゃあもつと進には大事にしてもらわないと。」

頷きながら返した百合の言葉は、斉藤の冗談に引きずられてユー
モアを伴った。自然に話せるようになっていく。

「シンは……えっと……ずっとあんなに……」

話し出そうとしたが、上手く表現出来ない。脳内の辞書は、ちっ
とも役立つていない。さつきまでの緊張とは別の理由で、相手に言
葉で伝えることの難しさに直面する。

「シンは、一人で背負い込んでしゃうんですよ。」

まとめて言うことは諦め、百合は一から話すことにした。

「昔もそうでした。」

斉藤は短い言葉で同意した。自分自身、進と同じ境遇なのでよく
分かる。自分以外の他人が踏み込むと危険な領域があり、そこに誰
も入れないように境界線を守っているのだ。入ろうとする人が善意
であっても。そこに入れば、その人は傷付く。だから入らせない。
それは今の進にとっても多分同じだ。

しかしながら、今これを言ったところで、目の前の女性が半分も
理解出来るかどうかだ。しかも、今安易に口をはさんで意見するよ
り、彼女の話の聞くことの方が先決だ。

「自分ばかりしんどくて……それでも全然顔に出さなくて……」
百合の感情的になっている様子は、確かにシンへの想いが溢れて
いる。

「そのくせ自分を實力以下に見せたりするから、周りには誤解され
るし……」

こんなにも進を理解しているのかと、斉藤は感心した。進が初めて彼の横に女性を置いた理由が、たった今その何もかもが分かったような気がした。そしてこんな風に想い合っている二人なのだから、年齢なんて大した障害にはならないのだろうとも思う。”愛に年齢は関係ない”と言われる事例の一つは、こういうことなのかもしれない。斉藤は、この歳でまだそんなことも理解していなかったのかと思うと、途端に自分がひどく幼稚に感じられた。

「それでも本人は、自分が傷付くことは全然OKみたいだし……」
百合は話し続けた。シンを理解して欲しい　長い間溜め込んでいた感情を一気に吐露している自分にハツとして、両手で口を覆った。

「……ごめんなさい。いくらシンを知ってる人だからって……私、初対面なのに何してんだろ……」

「言っておられること、分かりますよ。」
自分の招いた状況を反省していた百合は、斉藤の優しい笑みと言葉にまた救われる。

「彼は幼い頃から、そうやって苦悩して来ました。かくいう私も、同じ種類の苦悩をして来たので……進とは年齢を越えて分かり合えたのです。」

言っても共感も期待できない。だから、話す相手が信頼できる人だとしても、言えない。と同時に、周りの人には何の責任もないこともわかっている。だから自分も進も、一人で背負い込むしかないのだ。

「幼い頃から……」

百合は、斉藤の言葉の一部を復唱した。

「前も……その……シンは消しゴムみたいでしたか？」

「消しゴム……ですか？」

斉藤は、理解出来なくて申し訳ないという感じで百合に聞き返す。折っていたカッターシャツの袖を戻し、紐カフスを止める。百合の言葉を理解するために集中力を高めたが、それは杞憂だった。彼女の説明が分かりやすかったからだ。

「純粋なシンは、自分ばかり磨り減らして、周りの闇を消そうと頑張るんです。でもそのうちに、シンが灰色になって行っちゃって……」

陽は傾き始め、語る百合の顔も暗く映る。男性は理性的、女性は感情的。よくそう言われる。進を理解しているからこそ、彼が誤解される度に彼女は義憤にかられているのだらう。そんな感情的な彼女を、ひよっとすると理性的な進は諫めたりさえしているかもしれない。

「なるほど……それで消しゴムですか。的確な例えですね。」
まさに、大崎進を一言で表現するなら、消しゴムだと、斉藤は同意した。大きめに頷くことも忘れない。

「私、そのうちシンが黒くなって行っちゃうんじゃないかって思ってた……」
言えた。初めて他人にシンのことを言えた。でもどうしよう。こんな話をいきなりされても、刑事さんは困ってしまう。百合は、達成感と後悔がない混ぜになっていた。

「最近、映画がありましたね。」
斉藤は、予想外の角度から話を持ち出した。

「映画……？」
消しゴム発言で斉藤さんに陥らせたのと同じ状況に、今度は自分がいる。そんな切り返しをする斉藤さんはセンスがあるわ、なんて

考えていた百合は、もう後悔は消えて達成感しか残っていないのを見つける。

「私の頭の中の……っていうタイトルの……」

「あ……ありました。」

「あの映画だと消えて行くのは記憶ですが、進の場合、磨り減って行くのは進の心でしょう。」

百合は、この人に相談して正解だったと思って頷いた。この人は分かってくれている。他人に共感するなんて久し振りのことだ。

「水原さん　あなたが減った分の進の心を与えてやって下さい。」
齊藤は席を立ち、百合に深々と頭を下げる。目を丸くした百合は、急なお願いをされたことに対応出来ずにいる。

「そうすれば、進は磨り減らない。ずっと白のままです。
黒くならずね。」

「はい！」

力強い返事は、百合自身の強い決意と覚悟の表れだった。それは、彼女の生き方を変えることを意味していた。

「ところで……」

「何ですか？」

「先程おっしゃっていた、齊藤さんとシンの苦悩っていうのは……」
見上げる百合の瞳の引力に抗い、齊藤は自分をどうにかコントロールした。

「……進が自分で話す筈です。そのうちに。」

彼女の真摯な様子に心動かされたが、これは自分が手出ししてはいけない。二人の問題だ。齊藤は、進が言うまで待つように暗に勧

めた。自分と同じ過ちを、是が非でも進には冒して欲しくはない。

「分かりました。」

百合も立ち上がる。夕方の色になりつつある陽の光は、此処に来た時とは違った色のコントラストを床面で展開している。

「すいません。タイガー・リリーの捜査でお忙しいんでしょう？」

個人的な用事にお時間取らせてしまったから……」

詫びる百合に、斉藤は首を横に振った。

「長引きそうな捜査で……そんな中、良い息抜きになりました。」

お互い一礼した後、お茶に誘ったが、百合は仕事があると言って去った。その背中を見つめる斉藤は思った。そういえば、彼女は何故タイガー・リリーの捜査の担当が自分だと知っていたのだろうか。疑問を抱いてすぐ、些細なことを気にかける自分に苦言を呈する。

「悪い癖だな……」

地下鉄事件の時の自分を見て、そう判断するのは当然だし、最近ニュースで流れたりもしたからなんだろう。

「さ、仕事だ。」

紐カフスを外し、再び腕捲りをして歩き始める。それにしても綺麗な人だ。今度、進に会ったなら、思う存分からかってやろう。斉藤は、そんなシーンを思い描きながら、エレベーターのボタンを押した。

「……ヤベエな。マジで。」
水を得た魚。石滑教師陣は、8回裏の急展開に期待を込める。龍は、隣の青に助け船を求めると。
「何かやりようはねえの？」

「急造投手だからね。流石に守備練習まではしてなかったんだわ。」
青の見立て通り、投げることを努力して習得したステファンにとつて、守ることは考えていなかった事態なのだ。

速球を打ちあぐねていた打線は、バント攻撃に活路を見出した。
8回裏、先頭打者こそ球の威力に押されてピッチャーフライになったが、続く2人がステファンの右横にバントを転がし、立て続けにセーフティバントを決めてワンアウト1・2塁のチャンスを作ったのだ。

「どうしましょう。奥の手使う？ リーダーは同点になるまで待つって指示だけど……」
急変した事態を知らせるメールに返信が来た。青は、携帯画面を見ながら龍にも指示を知らせる。

「あー！」
龍が声を上げたのは、三者連続のセーフティの成功を目撃したこ

とによるものだ。これで満塁。内野陣がマウンド上に集まった。

「俺とノッチ（野江くんのあだ名）が猛ダッシュして打球を捕ろうか？」

明るい茶髪は地毛だと言い張っている、サードの仲嶋くんが声を挙げた。短髪揃いの石滑にしては長めの髪は、汗でびっしょりの顔に張り付いている。秋の爽やかな夕方、それでも1イニングだけで何度も走ればこうもなる。

「それしかないよね。ステファンには、ど真ん中でも良いから思いっきり投げてもらってさ。」

ノッチこと野江くんも、同じくバント処理に関わる身として仲嶋くんと同調する。怒っているように見えるが、本人の眉毛の角度がそうさせているだけであって、心優しい好青年だ。今の言葉にも、ステファンには気負って欲しくないという思いが出ている。

「えつとね……」

チームが本当にまとまっていることを実感して嬉しかったが、時間が限られているので、僕は割り込んだ。

「みんなは今まで通りのバントシフトで良いよ。」

「は？」

実際に声に出したのはトム一人だったけど、それ以外の5人もクエスチョンマークを浮かべている。

「ステファン……」

僕は、ここまで投げ抜いて来たステファンの両肩に手を置いて言った。

” Believe our practice! It's a time to show your real!”

「俺達の練習を信じて。今こそ本当の君を見せて勝負するんだ！」

” I know what to do. Leave it to me!”

「やることは分かってる。任せて！」

ステファンは力強く答えた。会話を訳す必要は無い。みんな石滑高校に入るレベルの生徒だ。これぐらいの英語は朝飯前だ。

「ってことだから……」

両肩の手を離し、集まっている内野手全員を見渡して言う。

「特別なことはしなくても、ステファンが抑えてくれるよ。」

去り際に、僕はステファンに左目をつむってウィンクした。彼もきつと、僕が今しているのと同じ回想をしているだろう。

「……すごいわ。この短期間に変化球も教えてたなんて。」
8回裏の攻撃が終わった時、青は感嘆の声を出した。

タイムが終わった初球、ステファンは曲がりの大きなスライダーを投げた。無論、そんな球など予期していなかった打者のバントは空振り。2球目はファウル。3球目はストリートを投げられてスリーバント失敗。ツアアウト。この時点でバント攻撃は機能しなくなったが、普通に打たせるより望みのあるバントを次打者も続け、結局は2者連続スリーバント失敗の三振で、ワンアウト満塁のチャンスは潰れた。

「あいつ……やっぱ人の扱い上手いんだろな。」
龍は、ベンチに帰って何やら指示を出している大崎を見つめつつ言う。

「いかにもキャプテンって感じで様になってら〜」
立ち上がり、DSを小形のシヨルダーバックにしまってそれを肩

にかけ、龍は、後はよろしくとばかりに青に手を振った。

「見ていかないの？」

青は、帰ることに異議は出さなかったが、本当にこの後の試合に興味が無いのかを確認した。

「あー……何か女抱きたくなってな。」

風貌通りの軽い男を装って、龍ははぐらかした。

「……ご自由に。一応任務だから、私は最後まで見て行くわ。」

何かに呆れて、青は龍の顔を見ずに手を振り返した。

「……」

しばらく押し黙ったまま突っ立っていた龍だが、やがて青の背中を見つめるのを止めて、球場を後にした。

「さて、仕上げだ。」

僕は、9回表の攻撃に際して言った。ベンチのみんなも顔が綻ぶ。

「何かするの？」

ユウが聞いた。ユウは間違いなく推しも推されぬレギュラーだが、何せ野球部に名を連ねて日が浅い。だから、進学校の弱小野球部がどうやって勝って来たかを知らない。

「そっか、ユウはとーぜん知らねーよな。」

トムのホームランだけで勝つには限界がある。実のところ、この勝ち方をいの一に提唱したのはこのトムだ。

「こいつはエースでもあり、キャプテンでもあり……」

トムの親指が僕を指し示す。

「策士なんだよ。」

「ま、数学学年1位の原田くんに助けて貰ってるけどね。」

青い縁の眼鏡をかけた原田くんは、数学の点数第1位の座を入学以来誰にも明け渡していない。試合が始まると同時に、彼が配球データと相手の作戦パターンを掌握する。そして、それを基盤にして僕が作戦を組み立てる。部員それぞれの得意分野、相手の弱点、成功の確率を熟慮して。

「今日は、あんまり僕のデータは要らなさそうだけどね。」

原田くんは、そう言って笑った。2回以降、わざと相手投手のスライダーを空振りして来たのは、終盤にその球を狙い打ちするためなのだ。今日の作戦に関しては、原田くんはあまり出番が無い。彼がなくてはならないもう一つの特技も、おそらく出る幕は無さそうだ。

「へえ……」

ユウは、興味深げに僕と原田くんを交互に見た。

9回表、僕らの作戦が炸裂した。先頭の僕が例のごとく敬遠で歩かされて出塁。次の野江くんは、スライダーを流し打ちでライト前へ。ステファンは見送り三振。バント練習はしてなかったから、一球も手を出さないように指示した。笑顔が似合う関西弁の田村くんも、スライダーをこれまた流し打ってライト前へ。ワンアウト満塁。

これこそが僕の作戦が目指した状況だ。ユウはこれまでなら当然の如く敬遠。だがしかし、今塁は全て埋まっている。徳俵に足がかかった相手校は、一縷の望みを懸けてユウと勝負したが、勝負を選んだ時点で結果は見えていた。

キンッ！

鋭いライナーが遊撃手の頭上を越え、あっという間に左中間を切り裂いた。ランナー一掃のスリーベースで、僕らは3点の追加点を得た。この瞬間、試合の結末と共に、石滑高校側の思惑も終わりを迎えた。

消しゴム（後書き）

表記が「進」の時は、嘘偽りないそのまんまの彼を、「シン」の時は、周りから見た人格かありのままですらられない場合の主人公を意味して書いています。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2052o/>

ミルクティーをもう一度

2011年10月13日15時53分発行